青鞜

紀念號

大正元年九月一日發行（每月一回一日發行） 第九號 九月號

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青黏

第二卷■第九號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜 紀念號目次

我がまゝ（短歌）……………一……原田琴子
泥水……………七……小笠原貞
老師……………二八……木内錠
ふた親のまへ（短歌）……………五三……武山英子
懐疑……………五六……加藤緑
習作の五……………八二……杉本正生
おもふこと（短歌）……………九七……青鞜同人
手紙の一ツ……………一〇〇……神近市
深草の里より（短歌）……………一二一……白雨
其の小唄……………一二五……紅吉

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

巴里雜詠（詩）……一二三……與謝野晶
京之助の居睡……一三八……野上彌生子
お　　重……一六五……加藤籌
二人の女……一七八……岡田八千代
或日の午後……一八四……長谷川時雨
チエホフの書簡……二〇九……瀬沼夏葉
女醫の話……二一四……水野仙
お使の歸つたあと……二一八……田村俊

南湖便り……二二三……紅吉
編輯室より……二二五……X、Y、
表紙繪……H、O、
寫眞……青鞜社仝人

わがまゝ

別れんと思ひたちつゝ漸くに君の戀しくなりにけるかな

七人の男を敵さしたる時はじめてわれは泣かまじものを

ある時はありのすさびに拾ひたる落葉にさへも熱き息吹く

いさかろき心のひまの戀にさへ男ひとりを抱くものかな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

なほ少したのむ心地にわれをめづ靜におのが
泣く音聞く時

すや〱と眠れる君をふとおそる知らぬ男の
かたはらにあり

人の夢ぬすみて見ぬと笑ふべしあだなる戀と
はかなくいはず

折々は君を忘れてひたすらに戀を戀するわれ
にかあるらむ

兄といひ夫(つま)とよばむもあぢきなし初戀人のた
ふときものを

あざやかに昨日と今日とかはりゆく心のまゝの戀をしてまし

二三人戀人あるに似てよろしわがまゝなれどなほ君にいふ

たのまれぬおのが心と知りしより戀のたふとくなりにけるかな

しめやかに人と泣きしを忘れ得ず似たる戀さへつくりけるかな

氣まぐれの君が心のさまよひにふるゝ女をおもひやるかな

わが君のいひ様もなきわがまゝになれては飛べる鳥もたらはず

幾人のよその少女を語るとも妻となる身はほこりかに聞く

たのむべき君と思へど頼まれぬわが身とあはれ知り初めし時

あやうけれ何を泣くやと大川のそゝぐがごとき手をかけ給ふ

あさましき少女となりてわが君を傷けざりしつゝしみを悔ゆ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

美しき夢が生みたる少女ぞと源氏の君の外はゆるさず

かなしきは一つの戀におぼれ果て生けりともなき君のおさなさ

七日ほど心をせめて泣きしかど悔ゆることなしなほ君を見む

僞りてをしへられたる少女ゆゑおそるゝものゝあらざるに似る

戀すれどいまだ君をば賴まずと云へば怒りて別れ給ふや

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

二百里は近し迫へよこはげしくも云はぬ男を
泣きて放たず

原田琴子

泥　水

一

おすみは少さい時から畫をかくのが大好だつたので、女學校を出るこ、或る畫の先生の家に、時々畫いたものなどを見て貰ひに通つて居た。今日もおすみは、東京の西の郊外に在る畫家のアツトエを訪ねたのであつたけれど、其頃に開かれる展覧會で忙しい爲、留守であつた。

門を出る時、おすみは後からじつと白こ黑のぶち犬が、自分の所を見送つて居るのち、何こなく心淋しく思はれた。

おすみは片手に包をさげて、甲武線のステーションに通じた路を力なく歩いて行くのであつた。

道の片側は射的場の高い土手が長く伸びて、片方は暗く茂つた神社の森で、奥の方にかすかにはげかゝつた朱塗の門が、枝こ枝この間から眺められた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

おすみはボンヤリ歩きながら、歌の中には、此間からの苦しい忌しい事を思ひ出して居るのであつた。

森の中からふいてくる濕りけのある冷たい風が、薄地の單衣を通して、汗ばんだ膚にしみるのも、何となく泣き度い様な心持が誘はれてくるのであつた。

離れよう〳〵ともがいでも、自分の脊には、暗い否なものがついてくる様で苦しくつて耐らない。

やがて森が終へて、土手がとぎれると、廣々とした武藏野が、目の前に開らかれた。心持青味がゝつた光澤は、柔かに野の上をつゝんで居る、所々にかたまつた林は、落ついた綠色をして、地面に茂つた夏草の白い少さな花が、所々にかすかに光つて見えた。もう間近くなつた××停車場からは、ゴーッと地しびきのする電車の音が聞えて居たけれど、おすみはどうしても此まゝ家に歸る氣にはなれなかつた。

右と左の別路の所に來るとおすみは、久らく立どまつて、廣く靜な野の景色を心を一つ一つにちぎつてもつてゆかれる様な寒い心持をして眺めて居るのであつた。

久らくすると、遙か向ふの小高くなつた丘の林の前に畫架をすゑて熱心に寫生をして居る人影が悲しさうなおすみの瞳にチラと映つた。とおすみの沈みきつた胸の中には、かす

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

かに奥の方から活々とした好奇心が浮き上つてくる様に感じてきた。

おすみは今世間にある何々會とか、何々とかそう云ふ靑年畫家の群を、大そう美しく、なつかしく、平常思つて居るのであつた。そしてそう云ふ人等の、少さな噂や一寸とした行動などでも、耳にする度に、胸の血を湧かして居るのであつた。新しい色彩、新しい手方が、其若い天才の人等によつて行はれて居るのであろう。どの様な活々とした主義や運動が始まつて居るのだろう、そう思つても體中の血しほがおどる様に覺えるのだつた。

おすみはそう云ふ目の廻る様なはげしい華やかな群集からくらべると、一人すてられて終つた様な自分が、どの位少ぼけだか、小供の手習よりも未だ幼いくだらない空漠なものとしか思へなかつた。

でこう云ふ所で、未知な靑年畫家に出逢つたりすると、押へきれぬ好奇心と敬慕の念とがあふれる様に胸にわいてくるのであつた。

おすみは其方に心が吸れる様になつて、喘ぎ〳〵丘を急いで上つて行つた。

其人影は若い人であつた、木綿の袴をはいた色の黑い、目に力のある靑年であつた。

おすみは傍近くなると、一寸ためらつて見たが、音のせぬ様に靜かに後に廻つて、一間許離れて胸をおどらして畫面を眺めた。

畫面には、今自分の歩いて來た道と、森と、冴えた靑の麥畑とが入れられてあつた。森の感じや道なりが、いかにもしつかりと握られてある。綠色で滿された廣い野の中には、自分の外には黑い人影も無いのが、何となくうれしかつた。で知らず〳〵長い間を筆の動くのに見とれて居るのであつた。

靑年は、おすみの居るのに氣もつかない樣な風をして、熱心に書いて居るのだつたが、暫時すると後にさがつて、畫面を眺め樣としたはずみに、ごつ〳〵した靑年の脊はかるくおすみの胸を突き飛した。

「や、失敬しました」

「いゝえ 私こそ……」

靑年は驚いて振り返ると、一寸頭を下げた。

極り惡るそうにおすみはこう云つて笑つたが、始めて二人は顏を見合した、そして靑年は直ぐに脊を向けて終つた。

おすみは其時、いつかどこかで逢つた事のある樣な丸顏の、ぱつちりした瞳の男の顏が胸に殘つた。久らく二人とも落ちつかない心持をして、默り合つて居るのだつたが、

「向ふの森の色がすつかり違ちまつて……」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

こ、青年はおすみにとも一人言ともつかぬ様な口調で、こんな事を云つた。おすみも默つて居るのも變だつたので、

「でも大そう面白い所をお畫きになりましたんですね」

畫面を見つめながら、ひくい聲で云つた。靑年は一寸振返つておすみを見たが、かくす樣に後にまわして居る風呂敷の中のカンバスを目敏く見つけると、

「失敬ですが君は××會の方なんですか」

こう探ぐる樣な言葉つきで問ひかけるのであつた。

「イヽエ　私なんぞ……飛んでもない

おすみは急いで其を打消そうとした

「大層御謙遜ですね」

靑年は今度は皮肉らしく云つて筆を動かし始めた。また二人の間には落ちつかない靜さがつゞいた。

空にはだん〳〵白い雲がひろがつて行つて、森の色も自然と沈んで行くのであつた。

「あの　貴方は××畫會の方で人らつしやるんでございますか」

今度はおすみが聞いて見た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「エ、そうです」青年はハッキリと答へて、しきりに麥畑の色を苦にして、幾度も繪の具を重ねて居るであつた。

繪の具の使ひ方にでも、形の取り樣でも、動かす事の出來ぬ此人の强よい生命がこもつて居る樣に思はれた。

おすみは平常自分の先生が敎へてくれる事許では、何となく自分の心に少しもひゞいて來ない樣な所があるのだけれど。無理に押しつけられる樣に感じながら、師の言葉を守つて居るのであつた。でおすみは此青年にでも平常思つて居る自分の心のあきたらなさを訴へてほしかつた。

「あの××先生は每日研究所に入らしやるんで御ざいますか」おすみがこう云つた時

「エ、時々やつてくる樣ですよ　然かしもう彼方などは僕等にとつてはあまり近しい人では無いのですからね」

こんな事を青年が云つた時は、おすみは自分の心持を話された程うれしく感じるのであつた。

青年は割合に柔しく色々な事を話してくれた。おすみは其に熱心にきゝほれて居るのであつた。二人はいつか親しい友達の樣になつて話し込んで居るのであつた。おすみは其青

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

年から別れてからも、中々興奮した心持がしづまらなかつた。

あゝ此自分の春にくつついて居る暗い家、と人から離れて、此青年のゆく道を、一所に歩いて行き度い、生ぬるい湯の中にふやけた様な生活を突き破つて、熱い血のほと走る様な渦の中に、自分の身を投げ入れたい！おすみは電車が野の中を走つてゆく時、彼青年の居るあたりを熱心に眺めて居た。青年の姿は緑色の中に一の濃い黒い影の様に少さく見えたのだつたが、直ぐと木の陰にかくれて終つた。

おすみはまた沈んだいら〳〵した心持がしてくる様に思はれた。

家に歸ると、母親は椽近く針箱を持ち出して、紺の香の高い反物をたつて居る所だつた。めづらしく結つた丸髮の油がつや〳〵と光つて居るのも、若々しく見えるのであつた。母親はおすみの姿を見ると

「オヤ　大そう遲かつたね」

おすみは急につかれが出てきて、ぐつたりと母の前に座つたがフト其反物を見ると痛い處を觸られた樣なけわしい心持がしてくるのであつた。

「是はだれのです」こう鋭くきいて見たが、母親の顔から何かを探り出さずにはおかない

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

様な目付をして、じつと母を見つめた。

「是かい　本田さんのさ　此間來た時に反物が一あるんだが誰れか縫つてくれる人があつたら賴んでくれろつて云つてたからね　何に單衣もの丶一枚許わざ〳〵人に賴まなくつたつて私が縫つて上げても好いつて云つたつたけれど　今朝おまへが出て行くと直ぐ來てね是をおいてつたのさ……長年あゝして家の事を世話をして居てくれるんだし其位の事はしてやつても好いのだから」

母親はおすみの目から避(さ)ける様にして、こう云ひわけらしく云ふのであつた。

「何も惡るいと云つたのじやありませんよ　私がするのじやなし……」

おすみは憎々しくこう云ふと、つひと立つて次の間に入つて行つた。

もうさつきの様な明るい氣分はメチャ〳〵にこわされて終つて、神經がやたらに尖つてきた。

母親は今迄自分一人で色々な事を思ひながら、反物をいぢつて居たのに、急に此靜かな空氣を娘の爲に荒されて終つたのが、いかにも忌々しく思はれた。出來る事なら娘の前で此反物をビリ〳〵に引破つて、娘の顏にたゝきつけてやりたい様に思つた。が氣の弱い母は、其も出來なかつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「縫つて上げるのか悪るければ縫ひませんよ！」

母親はこう一人言を云ふと、ジッと壁を見つめたまゝ、深かい吐息をして居るのであつた

二

おすみはいつも世に因縁ほど不思議な恐しい力でもつて、人間を支配してゆくものは無いものだと、つく〴〵思はれるのだつた。

本田と始めて知合になつたのは、おすみのまだ十四五の時で、父が亡くなつて間もなくであつた。

其頃本田は××學校の生徒であつた。學術も優等で心持もしつかりとした青年であつた。おすみの母親は夫に面ざしの似通つた所のある本田を、末の見所のある人だと云つて可愛がつて居た。其頃は母のお市は三十五六で嚴格な君主の様な夫の手から逃がれた様な却つて自由な心持のして居る時分であつた。そしておすみや其友達の子供許が出入りする中で本田はともかくも一番の相談相手とも話相手ともなつて居るのであつた。

よく月末になると、歸りがけに来ては、支出高や銀行の通などをしらべては、月々に少なくなつてゆく財政を、我身の事の様に心配してくれて居た。

こうした平和な年がたつて行つて、おすみの脊丈も伸びて心も少しは物心のついた時分

に突然――おすみにとつては突然の様に感じたのだつた――本田からはげしいラブレターを受取つた。其を見たおすみは始めて男の胸にもえて居る血の强よい響をきかされた様に感じたが、其當時おすみは本田のどこやら解らないけど何となく嫌であつた。其手紙を受取つて以來、おすみは毛虫の様に本田を嫌ひ始めた。そして相手の心持などは少しも知ろうともしなかつたし、了解も出來なかつた。

其から次第に本田は沈鬱な人となつて、はげしい神經衰弱の爲に、學校を失敗して終つてつひには方針を變へて終つた。が其もおすみは何の爲にそんなになつたのだか知らなかつた。

母親は前途有望な靑年が、病の爲にむざ〳〵方針をかへ行くのが、我子の上よりも口惜しく思はれた。

神信心をしたり、占を見て貰つたりして、母は寢食を忘れて看護してやつた。

本田が新に別の學校に入つて、其を卒業する頃には、其二人は强よい〳〵きづなに十重二十重にしばりつけられて居るのであつた。二人は後には自分等のして居る事について恐しくなつた、其きづながら逃がれよう〳〵ともがき始めた、が其時はもうます〳〵深く肉に喰ひ入る許りであつた。

三

去年母のお市は枕も上らぬ様な大病におかされた。醫者も病名を一寸は解りかねて居る様であつた。

おすみはやつれ果てた母の寢顔を眺めながら「××！」と思ふと運命の怖さに慄へずには居られなかつた。

其頃にはもう、母子の間には深かい〳〵溝が横たわつて居るのであつた。

二人の心はお互に顔をそむけ合つて居る。そしてお互に隙があつたら相手の心の奥を見ぬいてやろうとねらつて居るのであつた。

おすみは色々な世間の事情から、母に向つて責なければならなくなつたけれど、病以來ずつと心も體も弱り果てた母親を見ると、其上に致命傷を與へるには、どうしても忍でなかつた、そして其いづれとも決しかねた苦しいくされた水の中に住んで居る様な忌しい日が一日一日とたつてゆくのであつた………。

おすみの此頃はもう少さな事にも神經がピリ〳〵する程痛く感じるのであつた。

四

「苦しくつて耐りません」

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「何故云はない」
「云はれません」
「何故云へない」
「親ですから」
「馬鹿」

五

おすみは光のあふれる様にみなぎつて居る紺丈色の空に、白い焔と赤い焔のもえ上つて居る様な雲の姿にすつかり引きつけられる様な氣持になつて、若い晴れた日にカンバスを握つて家を出たのであつた、

森や林や細いすゝきの葉尖や、遠いうねくと見える小山、そうした目に入る凡の物の外廓には、太い火の色が光つて見えた、ドロくした緑色の野の面からは熱いかげろうが絶えず立ち上つて居る。

おすみは自分の胸にも白や赤や黄の雲の色と同じ様な焔がもえて居る様に感じた。長い間心に筆を握つて居たのであつたが、生れつきひ弱い質のおすみはとうくはげしいめまひと、熱と頭痛におそわれて終つた。

夕方家に歸るとおすみは間もなく人事不省に落ちて終つたのであつた……………

空には赤い焔が一面にもえて居て、果てしもない沙漠の様な野原はまた銀の様に白くかわききつて居る。そして太い血の色をした火柱が、あちこちに五六本づゝ立つて居る。と遙か〳〵向ふの方に一點の眞黑なしみの様なものが表れた。おすみは思はず「オヤ」と云はうとしたが聲が出なくなつて居た。

おすみはジッと其黑いものを見つめて居ると、だん〳〵自分の方に進んでくる様に思はれる。此天地も燃ゆる様なはげしい熱の中に居るのに不思儀にもおすみの體には少しも熱を感じない、許りでなくどことなく體中がシーンとして終つた様で、いやな寒さを覺えるのであつた。

豆つぶ程の黑いしみはだん〳〵と近づくに從がつて、横にひろがつて、おすみの目の前に來た時には、顏の長さが一尺許で、横の幅許が一間も二間も十間にも伸びてゆく。燒けこげた様な黑い顏色をした氣味の惡るい老人の顏であつた。おすみはもう恐しさと氣味惡さに體をちゞめてジッと息を殺して居たが、フト目をあくと赤い焔の空と白い〳〵沙漠とが森閑として目の前に展開されて居る外には、何も見えなかつた。いやな人の顏はいつか消えて終つて居た。と久らくするとまた向ふの〳〵の方に黑い猫の目程のしみが見え出し

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

た。と其がまた同じ様にだん〳〵自分の方にころがつて來る。おすみは恐しさに逃ようとしたが體中が釘づけにされた様で、少も動けない。黑いものは非常な通力でおすみの前にころがつてくる。と今度は前とは反對に顏の丈が空迄もとゞいてゆく様な、長い〳〵顏をしておすみの目の前迄歩いてくる。長い顏とつぶれた顏！　もうおすみは其おばけの様な人の顏にかわる〴〵責められて居るのであつた。する内にどこやらでガヤ〳〵とさわがしい人聲が聞え始めた………

「すみちやん　氣がついたの」

おすみはまた恐しい顏がと思ふとたんに、ふと母親のやさしい聲が耳に入つた。

「エ何あに」　何の苦もなしにこう聲が出た。そして目がポカリと開いた。

「何にぢやないよ　すみちやんおまへどうしたの」

母親はジッと死んだ様な我子の顏を、長い間まばたきもせず見つめて居たのだつたが、おすみが氣がつくと、一時に悲しさが胸にこみ上げてきて、止め度もなく淚が頰を流れるのであつた。

おすみの氣のついた時はもう外はうす青い夕ぐれの色が庭の草木をうつすりと包んで居る頃であつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

頭にひやして居る氷袋からは、いつこもなく冷たい水がにじみ出て、熱つい額に少しづゝ流れてくるのも快よく感じられた。おすみは次第に體から惡熱がはげてゆく樣に。身がかるくなつて行くのであつた。

畫架やカンバスが其まゝに、茶の間に投げ出されてあつた。それから自分のぬいだ着物や帶や、醫師が手を洗つて行つたらしい金盥（カナダラヒ）や、藥袋などが、足のふみ處もなく取亂れてある。平常取散す事の大嫌な母親は、もうそんな事に頓着する心の餘裕などはなかつた。おすみは青い悲しそうな顔をして枕邊につきそつて居る母親を見ると、もうわけもなく母にすがりつき度い樣な氣持がしてくるのだつた。

おすみは幾年も昔の少さな時に返つた心持で母をなつかしがつた。

「お母さん」　どこにも行かないで頂戴な　妾何だか心細くつて耐らないのですから」

おすみは幾度もこう云つては母の手を握つて離さなかつた。

「あいよ、どこに行くものかね、お母さんはどこにも行きはしないから安心してお休みよ、お醫者樣が靜かに寢せておかなくつちやいけないつておつしやつたのだからね、好い子だから靜かにしておいで」

母親はやさしくこう云ひながら、おすみの額をなでゝやつて居るのであつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

六

おすみが病の床にある間は久しぶりで親子の情がひつたりととけ合つて居る様に感じた。母は只一人の子の爲めに何もかもを忘れた様になつて、看護して居るのであつた。おすみの心もすなほな子供にかへつて居るのだつた。然かしそうした平和な日も長くはつゞく事もかなわなかつた。

おすみの體は一週間許りですつかり元の樣な體に返つて行つた。

夕方おすみは久しぶりでたすき掛になつて庭を掃除をして、草花にすつかり打水をしてやつた。今迄熱い日にうたれてぐつたりとなつて居た草花は、見る内に生氣づいて、細い葉尖からはホロ〳〵と白い水の玉が流れ落ちるのであつた。おすみは椽に腰をかけてじつと青々した庭を眺めながら、靜かな快よさを味つて居た。

と其所に人の足音がして本田の落ちつかない目をして入つて來るのであつた。おすみは其の男の顏を見ると一時に心の目が固くとぢて終つた樣に感じてきた。

「おすみさんの體はもう快くなつたんですか」

男はおすみの勝氣らしい强よい瞳を見ると、わけもなくとがめられる樣な不愉快な氣持がするのであつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「エヽ」

おすみはキッと水にぬれた地面を見つめたまゝ、體を固くして居るのであつた。男は急がしく襟の汗ばんでくるのを拭ぐひながら、ぬすむ樣に奥の方をソッと眺めて居た。久らく二人は無言のまゝ庭を眺めて居たが。

「そう〳〵、僕は是れを持つてきたのだつけ」

そう云ひながら男は、右の手くびにさげた包の中から少さな美しい瓶を取り出した。

「會社の奴にこんなものを貰つたのですがね、僕の樣なものには不要だから、おすみちやんにでもと思つて」

とそつと椽側に其をおいた。

「お母さんはおるす？」

ひくい聲で男は云つた。

「一寸、外に行きました」

おすみはなるべく男の顔を見ぬ樣にして居るのであつた。

「では僕は失敬します、その邊迄一寸きたものですからおすみさんの病氣がどうかと思つてきて見たのです、おやあお大事に……　……お母さんに宜しく」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

男はかう云ふと急ぎ足に出て行つて終つた。

おすみは默つて久しく男の後姿を見つめて居たが、椽側にのせて行つた香水の瓶を手に取ると、力一杯に手水鉢の敷石にたゝきつけて終つた。

七

あゝ彼の白い目が此門をくゞつて來るのを自分には其を拒絶する力は無いのだろうか。其が出來ないのかしら出來ないのか。

私はもう晝なんかはかゝない、何もしない、そしてジッと此門口に立つて居て、彼の男がどうしても此門口をくゞつてくる事の出來ぬ樣にしてやらねばならない。

おすみは母親が歸つて來ても本田の來た事は云はなかつた。

此少さな器の中に盛られた清水の樣な此家の空氣を、彼の男の汚い泥手でもつてすつかり濁されて終つた樣に感じるのであつた。

おすみは母の顏を眺めると、其そばに並んで居る人影が悄らしかつた。母を透して其人影をほろぼし度い。母の胸にある人影を殺し度い！

おすみはそんな事に氣のつかないで居る母と二人で、不愉快な思の中に夕飯をすましたのであつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青い夜の色は、潮の滿ちてくる樣に、ひた〳〵と開け離した室の中にも、流れてくるのであつた。

おすみは椽に出て果てもなくひろがつた大空に、かすかにまたゝいて居る星影をヂッと眺めて居る内に、只もうやるせない悲しさが胸に一つぱいになつてくるのだつた。

「オヤ、おすみちやん、まア おまへも讀んで御らんなさい、大そうな評判だ事、自分の娘がこんなに世間に知れ渡る樣になつたらさぞ親御さんはうれしいだろうね」

母親はこう云ひながら今日の新聞に此間の音樂會に出た演奏者の評判記を讀んで居るのであつた。

「まア大したものだね……あゝおまへなんぞはいつこんなに世間から色々云はれる樣になるのだかね………」

母は此娘がそんなになつたらどんなに自分は鼻が高いだらう、そんな事を思つて居るのであつた。

おすみは母の言葉をきくといら〳〵して耐らなかつた。胸は一層ビリ〳〵といら立つてくるのであつた。で何か針の樣な鋭い皮肉が云はないでは居られなくなつた。「お母さんは私にそんな事をあてにして居らつしやるなら失望して終ひますよ、私はお母さんの虛榮

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

心を滿足させる爲に畫を習つて居るのではありませんからね」

おすみは後をむいたまゝ憎々しく云つた。

「何ですと、おまへは私の云ふ事はいつでも虛榮心だの何だのつて………親に向つてそんな事を云はれたものですか」母親はこう云ふと思はず顏の色を變へた。

「だつて出來ないから出來ないと申のです」

「出來ない所を出來る樣にするのが勉强と云ふものですよ」

「私は御母さんのお望の樣な勉强は出來ません」

おすみはどこ迄も云ひつのつて居る。母親はもう口惜しさに身がふるへてくるのであつた。父親が居ない爲に子に迄馬鹿にされて居るのかと思ふともう口惜しさ悲しさが胸にこみ上げてくるのであつた。

「親を親とも思はぬ樣な不孝ものを生んだのがくやしい………」母親は聲をふるわして云ふと、つゝぷして終つた。

「御母さんも少しは母親らしくして下さい………私は死ぬ程苦しい思ひをして居るのです」

おすみも淚のにじんでくる瞳を見はつて、キツと母親の脊を睨みながらヒステリーの樣に叫ぶのであつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

おすみは心の奥ではこうして若いものにしいたげられながら、其でも離れる事が出來ずに、ズル〳〵と深かい〳〵泥沼の中に陷つて行く樣な淺間しい母の運命を見つめて居るのであつた。みじめな母の姿を眺めて居ると、憐みの情が胸を引しめる樣に迫つて來ながら、どうしても母に向つて柔しい言葉を云ふ事が出來なかつた――

小笠原貞

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

老師

土曜日なので夕方からの英語の講習もなし、珍らしく身體に餘裕のある日なので片影の出來る頃からお類は中元とも無沙汰見舞とも附かない訪問を思ひ立つて板木町の師匠を尋ねる事にした。

簞笥の抽出をガタ〳〵させてお類は有りもしない外出着の才覺に眉をしはめて居た。まさか久振りで尋ねて行かうと云ふのに毎朝學校へ着て行く平常着の飛白でもなるまいし、二三枚の浴衣には事を欠かないやうなもの丶、いざとなると、どれも是も糊の硬い洗ひ洒しばかりで埒が明かなかつた。

「もう帷巾の時節だわねエ」

漸く洗濯物を片附けて、ヤレ一服と襷掛けの尻端折のまんま、長火鉢の傍へにじり上つて來た母親に話し懸けた。

抽出しの下隅から引出した只だ一枚の帷巾は裾の方が甚く痛んで丹念に母が綴くつて置いて呉れた背筋の夥しい繼ぎに愛想が盡きて着る氣がしなかつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お類は滅切眞夏めいた竹垣の日ざしをまぶしさうに眺めながら暫く呆然考え込んで居た。

毎年々々來年こそは奈良洒の帷巾一枚位は出來るだらう位に高をくゝつて、滅茶々々に着荒しては仕舞つても、扨夏になつて見ると帷巾は愚か、洗濯替の安物を一枚新調するにもいゝ加減な臆劫さであつた。

「お前はいつも出る先へ立つてはあれがないの、これがないのと云ふ、心掛けが惡いからだ」

と斯う一口に母に云はれて仕舞へば其迄である。

「阿父様も居らつしやらなくなつたし、曲りなりにも斯うして母子二人がどうやらかうやら生活を立てゝ行かれると云ふ丈が關の山だもの、どうして着る物の方なんぞへは中々以て手が屆かなからうではないか」

お類は今年二十四になつても自分の手から着るもの一枚作り出せない自分の身の不甲斐なさからじり〳〵した。

「私が男だつたら」斯う考えては死んだ兄と替れなかつたことをくやんだ。

「藥味箱のやうでも是で、自分の家と云ふものを持つてゝ見れば家税は取られるし、疊だつて切れて來る、垣根だつて腐つて來る、何處をどうはたいたつて到底もあのぼつちり

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

計しな阿父樣の恩給位ぢや遣り切れないしね、お前に此樣な愚痴をこぼしたつて仕樣がありやしないけれど、誰一人聞いて呉れる人はなし、するものだから、つい……私や世間の人達からあんなに馬鹿々々しい畠セヽクリなぞ斗りして、何の素人が、へボ瓜の二三本や玄白茄子のひねつこびたのを生らして喜んで居た氣が知れない、其手間で借金をしても貸家を建てるとか、又は地面でも人に貸すとかして少し宛でも上つて來るものを用意して置かなかつた報いがあの體爲さと後指さゝれるのが如何にも口惜しくつてね」

又お定りの母の世迷言が始まつたとお類は嫌な氣がして壁を向いたが、一面には、其呑氣性な父親の譯もなく喜ぶに任せていゝ氣になつて、一生に二度と返つて來ない大切な年盛の三四年と云ふものを詰らない藝事三昧に打込で仕舞つたことが今更甲斐なくも恨めしいのであつた。あれで父が死なず、兄が倘存命で有つたなら、或はまだお類は其古雅な遊戯三昧の夢から醒めずに居たかも知れない、習ひ覺えた藝の年月と共に記憶から消えて行くことはあつても失はれた月日の又と戻つて來やう道理はない、何故彼樣な役にも立たない眞似をして居たらう、何でもお金錢の取れる事をして置かなければ不可なかつた。お金錢が取れて自分で自分の生活が出來るのが一番豪いんだから。

お類の胸には此頃絶えず此樣な思想がこんぐらかつて居た。そこへ持つて來て、ふと錄を

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

かけるやうな母親の斯うした詞に接すると一圖に胸が迫つて、私さへ此樣に意氣地がなくなかつたら、私がせめて自分丈の仕末でも手一つで附けられたら、此樣な耳辛い詞の母親の唇を洩れる事では有るまいにとそれを繰り返されるたんびに壽命が縮まるやうに感じられた。さう思ふと、なまじ自分の肉體が比較的安全な、そして惰眠を催ふすやうな生温い空氣の中に浸つて居るのが堪へられなく辛い、誰か自分の傍に鬼でも蛇でもが有つて、自分の體を肉の裂ける程鞭で打のめして、炎え立つ火炎の中にでも投込んで呉れたなら、目と云はず、鼻と云はず、流れ込む猛火の煙に咽びながら、笞の責の下に體を固くして、一ト聲の叫びも發つまいと齒を喰ひしばつて、耐えるキビ〱した苦痛が寧ろ好もしく忍ばれた。

お類はもう悉皆力ぬけがして了つて出掛る氣分にもなれなくなつた。けれども目の前に折角母が調へて置いて呉れた土產の菓子折も有つた。澁々立上つて氣の進まない仕度に取かゝると麻襦袢に懸けてある絽縮緬の半襟も、自分が大の氣に入りで有つた朝顏の花を大きく絞つた絹ちゞみの帶揚も、いづれも其等は自分が十五六の頃人に貰つたり、父親にねだつて買つてもらつたりした物のみで、色もさめて居るし、それに赤いもの丶チラ〱入つて居るのが氣恥かしかつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

もう彼是四時近くにもなつて居た。

未だ去年の夏頃はセッセと毎朝早起きをしては露のしとつてる涼しい地面を踏みながら紫の包を抱えて、寢込の師匠を驚かした……下座敷に昨夜更かした座敷の疲れで、去るお屋敷の紋處を其儘拜領した水淺黃のサラ〳〵した帷巾に絽の羽織も重ねたまゝ投げかけた靑い蚊帳の中で涼しい朝風に顏を撫でられながら氣持よさゝうに寢んで居る師匠の橫顏をそれとなく見ながら、稽古場に當てゝある二階へ委細構はず押上ると慌てゝ跡から內弟子の一人が箒と塵寄せとを持つて上つて來ることもあつた。

毎朝々々必々と氣根に通つた拔裘の活動寫眞小屋の前を相變らずなケバ〳〵しい繪看板を見い〳〵通りぬけて大通りに出ると、眞晝の白け切つた色彩から醒めて漸く景氣を盛り返して行く町の樣が心地よかつた。

お類が師匠の許を訪はなかつたのはやがて半年餘りにもなる。年始に其門口迄行きは行つたが、風呂屋へ出掛けたとか、一足違ひで師匠には逢はれなかつた。

格子を開けるとそれでも師匠の孫に當る少さい娘が、もう何時の間にか、前髮をふくらましたお下髮に巾の廣いリボンを結びつける年頃になつたのが、忘れずにお類の顏を見てニッと白い齒を見せながら行儀よくかしこまつて、

「何卒お二階へ」とつゝましくお辭儀をした。

「まあ、おせいちやん、大きくおなりでしたのねえ」

吃驚する程背丈ののびた、纖細な娘の姿を爪先から見上るやうにして、つい我ともなく甲高な調子を出した。

パナマ帽、麥藁帽とりまぜて二つ三つ懸つた玄關口の帽子掛に、袖のさきや裾に露草の模樣をあしらつた絽紗の道行が縫取りのある白のスカーフと一緒に釣してあつた。「矢張來て居る」と、お類は四五年前から稽古に來だした濱町邊のさる物持の妻のことを考えた。すると其惡く取濟した金ぶちの眼鏡の横顔を思ひ出して嫌な氣がした。

二階からは聞き覺えのあるやうな聲で山姥のクセを唄つて居るのがピン／＼と小氣味のよい扇柏子に引立てられて來る。何だか夢を見て居るやうな恍惚した氣持になつて、自分が此危なつかしい梯子段を上り下りして居たことが十年も昔のやうな怪しく隔たつた感じに打たれて、

「あの鼻垂しがあんなに大きくなつたんだもの」と僅か半年餘りも見なかつた子供の成人にお類は悉皆年寄染みた氣になつて自分が振返られた。

二階は矢張西日が一杯さし込んで居た。一體に廂が短かく日ざしが近いので、それにブ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

リキ尾根のほこりが手傳つて居るので座ると疊がポツ〳〵として居る。蒸し暑い日なのに雨染みた日よけが餘計風通しを惡くして、室内はいきれさうにムンムとする。

師匠は僅かに風の通る往來に面した小窓の下に柏子盤を座えて端嚴な構えをなして居る。膝のすれた稽古袴、洗ひ洒してはあるがさつぱりとした白縮みの浴衣の襟元をキチンと掻き合はせていつ見ても年の衰へを見せぬ老師の緊張した顔面は赤く油切つて、ふくれた青筋が廣い額に盛り上つて充血した眼の内が熱氣を帶びて光つて居る。

お類は稽古に行つて居た頃から座り馴れて居た椽側の片隅に少さく座つて居た。

……かつぐ重荷に肩を貸して里迄おくることもあり……

何時耳にしても氣の引締まるやうな重々しい調子を帶びた山姥の謡は殊に仕舞で習ひ覺えた型の經驗もあるのでお類が大好な曲の一つであつた。

初めから終り迄強吟ばかりで通す、とても女の弱い調子では謡ひこなせるものでないのを知りつゝ負け嫌ひな強情から無理をしてよく唄つたものであつた。傍の人がお類の調子を褒めでもすると、極つて師匠は得意さうに

「エヽ皆はさう云つて褒めます、けれども私は決して褒めません、左様、女にしては成程確りした方です、けれどもまだ以て中々……」

……

と自慢さうに鼻をヒク〳〵させて云ひながらぬすむやうにお類の顔を見て笑つた。

此「女にしては」と力を入れて云はれるのが何より癪に障つて、此方は態と不足らしく空吹いてツンとして見せた。

師匠がお類を養女に欲しいと云つたのも丁度其頃でまだお類には腹違ひの兄が存命で居た時分であつた。

朝から辨當持ちで稽古場へ來ると師匠の下から上つて來る前に張盤を出したり、鼓の調べ緒を懸け替へたり、煙草盆の火を見たりして時には金魚鉢の水迄取かへて置いた。お類が長い袂を肩にかけて來る途中で見繕つて來た夏菊の二三枝を小器用に活けて居る傍で、其時分笛の稽古を強いられて居た内弟子の一人がよく椽側に出て、爽やかな朝の空氣に胸を滿たしながら節くれ立つた指を不細工に動かして居た。

「お類さん、昨日漸く神樂を終りました」

一ト息吹きやめて金次はお類の方にむき直つて面白さうに動く手附を眺めて居た。

「エッ神樂を、そんな事が有るものですか、中之舞だつてまだよた〳〵な癖に……」

突然、後ろで誰か「ハッ〳〵」と笑つた者がある。敬さんと云ふ年嵩な内弟子がいつの間にか梯子段の中途から頭を出して

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「お類さん、一杯食はされて御座るな」
朴訥な九州辯で仰山に大きくあびせかけた。
「エッ」悉皆話を眞に受けて居たお類は思はず鋏の手を止めて薄身な肩をそらせると、
「其神樂は二十五座さ」
いつも戯談口一つきいたことのないむつゝりやな金次が矢張まじめな貌で靜かに露拂ひをして居る。其澄した貌が可笑しいのでお類もかつがれた腹立だしさを怒りもされず、一緒になつて高く笑つた。
「でも大變上手におなりだわ、確かに鳶が油揚をさらひ損なつた位にはね………」
日外師匠がお素人の笛をかう冷評した口吻を思ひ起して、惡まれ口の駄賃に附け加へると敬さんが一人で又面白さうに笑つた。此度はお類は態とすました貌をして鋏の手元に念を入れた。
「先生、金次さんもお替りは入らつしいませんか、嘸御勉强でせう」
お類は此樣な二三年も昔になる他愛もない光景を思ひ浮べながら、氣安く呑氣であつた其頃ののび〳〵して居た氣分をなつかしんだ。
漸く一ト切切り上げた師匠は、新貌の内弟子の手から受取つたタオルで頸筋から襟るや

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

うな油汗を拭いて居る。

「え、お陰様と替ることも有りません、けふは澁谷の方かへ朝から出稽古に行きました」

お類が日々師匠の家へ詰めて居た頃、お類さん、花月を一つ願ひます。樂の唱歌を書いて下さいませんか。恐れ入りますが羽衣の切丈けでようムいますから八ッ拍子に盛つて下いな」彼方からも此方からも手附の依賴で、端近く寄せた師匠の古い手習ひ机に倚つて、朱墨を摩りながら

「一つ十圓宛でも頂くと大したお金儲けになるんですがねエ」など〻戲談云ひ〳〵、墨で横罫を置いた奉書に朱で丹念に手配をはめては謠の文句を割りあて〻行く氣の盡きさうな仕事を見て居て、

「俺だつて百圓も呉れりや三ッ地にツゞケ位書いてやるよ」師匠も元氣に笑つた。

ふつつり思ひ絕えて居た其時分のことが跡から跡からと止め度なく記憶に上つて來ると、一々紹介される稽古の人達も內弟子も、ついぞ見も知らぬ新參貌計りになつて居るのに先づ驚かされた。

自分が長い間使ひ馴れて居た古机は小供の惡戲の名殘でもあらうか、疵だらけにされてよく師匠のみとめや一寸した書類なぞを整理してしまつといた、抽出も何もなくなつて了

つて、今では金次の所有になつてるらしく寫眞畫報や、諸本や古新聞やがゴタ〳〵と堺もなくつみ重ねてある上に女持の退紅色の艶めいた紙入れがのつて居た。

いつか師匠と内輪の者同志が連れ立つて北國の旅へ出た時、汽車の中で木の蓋の附いた宛然植木鉢のやうな鰻の丼を食べながら、

「之が一杯五錢位なら五杯も食つてやるんだがナ」と盛んに水戸ッ坊の蠻色を發揮した甚だもつて色消しな逸話を同行の敬さんからそこいら中へ電信をかけられて當人大閉口を極めて居た事も有つた。旅にはいつも布呂敷包で、着る物なぞも平常は田舍の兩親から仕送つて來る手織物のゴッ〳〵計りで滿足して居た。

「先生いつか電車の中で一寸金次さんをお見懸けしましたつけ」

お類がいつか新橋へ人を送つて行く爲に電車を芝口で下りやうとすると、ふと出合頭に目に止まつた金次は僅か一年も見ない間に滅切り大人作つて十八と云ふのに柄の大きい丈けリウと着流した柔か物がしつくりと體について頭髮も中央からわけて濡れたやうな黑い色艶を帶びて居た。ニッと心持笑ひを含んだ口元から前齒の金がチカリと光つて、心地よく奇麗に剃り上げた揉み上げ、垢ぬけ切つた襟足の男には勿體ない位長い頸筋、お類は師匠に何か云はれる度にハア〳〵と朴訥な物云をして居た上京當時の金次とは殆んど生れか

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

はつた人のやうな威が有つた。其一分の隙もない天晴粹を以て自ら許して居るやうなきいた風な樣子と、机の上に載せてある退紅色の紙入とを結び付けて何等かの因縁をさぐり求むべくお類はさま〴〵な妄想を空に畫いた。

然し師匠は金次の事に付いては一言も善いにつけ惡しいに付け洩らさなかつた。

「藝人は藝斗りで身が立つと思ふな、眞實に藝を大事と思ふなら身持に氣をつけろ、藝に熱中して藝の爲の身體になりや墮落の何んのつて其樣な馬鹿氣た話のある筈はない、お前達の圍りにはいゝお手本がウンとある、何だせどうもお前なんざのろさうだせ、氣をつけねヱといかねヱ」

眞實藝の爲の犧牲になり通して、七十餘歲の長い生涯を獨身で禪僧のやうな生活に甘んじて來た老師の斯うした活例から出た詞を、膝の上で皷の調べ緒を繰り〳〵、ハアッ〳〵とねつから他愛もなさゝうに聞いて居た金次よりお類の方が染々と心を動かして聞いた。

「先生だつて、藁の上から貰ひなすつて男の不自由な手一つに丹精して育て上げなすつた御養子さんに早く死に分れてお了ひなさるし、全く家藝と云ふ事に對しちや貴夫一人が賴みなのだから、ほんとに確りしなくつては駄目よ、義一樣てお孫樣は有つても何しろま

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

だ少さし、行く〳〵は貴夫に家名を繼がせたいお考えなのだから……今貴夫が一歩でも道をあやまる樣な事でも有つたとしたら、それこそ先生がお可愛さうよ、まるきし、たよりを失つてお了ひなさるのだから」

お類は年寄つた親切な叔母かなぞの心持になつて、それとなく若い男の得て迷ひ込みやすい道を豫防したつもりで有つた。

「ハアッ〳〵ッ」と例によつて例の通り何と云つても更に手應へのない返事斗り至つて神妙さうに、あのシャア〳〵した横面をあの紙入れで叩きのめして遣りたく思つた。

お類なんかは斯うはいひつゝも小倉の袴をツンツルテンに穿いてお茶の給仕をしたり、煙草盆の掃除をしたりして居た金次の少さい時分を知つてるのでまだ根つからの子供のやうな氣がして居るのに、師匠の處へ來る誰彼は、

「金次さんは男振りがいゝから中々油斷はなりませんよ」などゝ心得貌に師匠へさゝやいて居た。

暫らく息次ぎに團扇の風を入れてる師匠は去りとて久振りで尋ねて來た昔馴染のお類に話しかけるでもなかつた。

いつでもお類は師匠にいろ〳〵な事を聞きもし又問はれもしたいやうな氣がしてもつい

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ぞ二人切りの席でも藝の話の外、細かしい内輪事や思つたまゝを語り合つたりしたことが長の年月に一度もなかつた。恐らく養女に貰はれて來て師匠の傍に旦暮添つて食物の世話をしたり、起伏しの面倒を見たりして居てもこれ以上の打解けた話は聞かれまいとお類は思つた。

師匠は今迄唄つて居たお素人に向つて、冷たくなつた澁い茶を啜りながら、彼處のクリがどうの、あの小まわしがかうのとクドイ程云ひ聞かせて居て果しが見えなかつた。新下襦袢を通して、浴衣はまるで夕立でも浴びたやうに汗でグショぬれになつて居る。新參な内弟子が途方もない方角から贈る團扇の生溫るい風を受けて暑いとも一言云はない。

「エ、此人は私と思へば間違ひ有りません、强情で負け嫌ひな處は私に生寫し」

數ある女弟子の内からお類の薩張した氣象がとりわけ氣に入つたと見えて、よく師匠が貌を見る人毎に斯う云つて滿足氣に吹聽した言葉をお類は今だに忘れずに居る。

「なアに、女だつて藝さへ出來りや　ヘチヤな亭主野郎なんか持たないだつて樂にやつて行けます」

時計屋の若旦那、紙屋の番頭さんと吹けば飛びさうな素人弟子の前で態とこんな皮肉な口も聞いた。

「まア先生！」お類は傍で呆氣にとられて目を丸くした。

廿一と云ふ年盛りに二人の子供を殘して死んだ養子の榮二郎を除いては旦暮かしづかるゝ幾人かの黑人素人の弟子達より、世の中に一人の身内も持たぬ師匠はそれでもめげる氣色を見せなかつた。

目の中へでも入れて了ひたい程可愛がつて居た一人の養子に死に別れた時でも人の前では涙一つ落さなかつた。師匠の氣心を知らない世間の人は、其養子の少さかつた内から、寒中と云へば裸體へ袴を穿かせて土藏の中へ入れて朝稽古をさしたの、よくおぼえないの、出來が惡いのと云つては滅多に張扇で處きらはずピシャ〳〵打つたの、あれでは全くなぶり殺しにしたも同然だとさへ云つたもので有つた。

其程氣象の峻嚴な師匠をお類は決して徒らに苛酷一面な涙のない人とは思つて居なかつた、のみならず、或はより以上、熱涙を胸の底にたゞえて居るのであると信じて居た。

一ト頃、春先の日永時をブラ〳〵と煩らつて居た頃、徒然の病床に日頃は諸本より外、新聞も大體は人に讀ませて聞く師匠が珍らしく、ボロ〳〵になつた俳諧の古本なぞを枕元に擴げて居た。

見舞に來合せたお類が病人の傍に誰もついて居ないので片隅の火鉢にいけ炭して懸けて

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

有つた小鍋のスープが甚く煮つまるのを氣にして師匠に「今でお宜しければ差上ませう」と云ふと、「それならば」と云ふので甲斐々々しく勝手から食鹽の瓶を搜して來たり、盆を拭いたりして、持つて行くと、床の間の方を向いて居た師匠は返事ばかりして起上りさうにもしない、幾度もく催促をして漸く、側から掻巻をはねのけて萎えた身體を助け起すと、じつと澄んだ靜かな目の底に涙が光つて居た。何の爲の涙かお類には薩張解せなかつた、死んだ子の追憶から滲ませた涙か、來し方行末の心細い身の上を思つての涙か、師匠の是迄經て來た困苦の道に付いてはついぞ一言洩らされもせねば又問ふよすがも持たなかつた。少年の時分、謡の文句を暗誦する爲に、深夜、人の寢靜まるを待つて夜具棚にもぐり込んで、よつぴて一生懸命覺え辛い長文句を繰返して居る内いつともなく一番鷄にうとうとした夢をさまされた事や、將軍家の式能を勤めるに付いて毎夜水垢離を欠かさなかつたことや、藝事上の苦心談を除いては、全然波瀾の多かつた生活の辛勞を語らなかつた。中にもはげしかつた維新當時の貧困に絕した時代には、生れて以來持つて見たこともない鍬を手にして植木屋の手間取りに出ることも辭さなかつたと云ふ――こんな切ない話も他人の口から聞いた。人傳の疑はしい話の緒からさかのぼつてお類は師匠が若いから嘗め盡して來た苦い涙の味を雲を握むやうに想像して眉をくもらせた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「今は何をして居るんです、忙しいのですか」

暫らくしてから師匠は煙管を取直してお類の方に向き直つた。

「えゝ、何と云ふ程のこともありませんが、些と斗り詰らない眞似をして、又小學校の生徒に跡戻りしたやうなもので御座いますの」

ほんの一言二言で話はすぐ斷れた。

「之はお珍らしいお類さん、ついぞ懸違つてお目に掛りませんが近頃は如何です、相變らずお精が出ますかね、」

稽古日と見えて次へ〳〵と押しかけて來る古參の弟子達が口々にお類の來て居るのを見ては斯う云つた。

「否え、もう薩張、御無沙汰で……斯うして久振りで皆様のお稽古を伺つて居りますと一ト昔も跡のやうな心持が致します」

古い夢の跡を辿るやうな鹽梅にお類は恍惚した目をして答へると、

「えゝ、今の處は當分まづ一ト休みと云ふ處です」

何か意味有氣に師匠は笑ひを含んだ顏でお類の横顔をじつと見て引取つた。だがお類には何の事やら解し兼ねた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

中にはお下髮に淡紅色のリボンを仰山に蝶々のやうに頭の頂點に結んだのや、銀杏返しに赤いチンコロがけをかけたのも居る。いづれにしても肩上げの深々とある中形の浴衣に袴を高く穿いた生徒達の仲間に交じつて、算術や、簿記や、タイプライターとそんな乾燥し切つた學課の中に一日中浸つて居て、行々一二年の内には一人前の女事務員となる資格を得る爲に恥かしいも忘れて、拭いて取つたやうに忘れて了つた外國語の書物を戸棚の隅から引ずり出したり、人には内密で夜學の會話練習にそつと通つたりなぞしてさま〴〵に心を摧いた。病氣の爲に女學校を三年迄しかやらなかつたお類にはほんの一寸した智識の融通にも欠ける處が度々有つた。年羽の行かない子供達に笑はれるやうな無間な失策を殘すと、もうどうなつてもいゝから此樣な學校なんかへ來ることはよさう。

と云ふ向ふ見ずな氣になる。けれども母のことや自分の未來を思ふと涙を干かして又ペンをとらなければならなかつた。

「英語の會話が達者に出來て、タイプライターの心得でもあれば東京か横濱邊の大きな商店に雇はれたつて三四十圓がものは譯ない」と父の歿後、傍の人達から頻りに此樣に云はれるのでもとより好で仕込まれた藝をサラリと捨てゝ杓子定規で行く算盤玉の世界に身を以て飛込まうと決心した。それらの話のまとまる迄には同じくなら是迄覺えた藝でやつ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たらと云ふ人もあつたが、家柄に生れた子ではなし、それに母親がたとひ師匠でも藝人と云ふ名が虫よりもいやしんで嫌ふので此説は自然立消えにもなつたし、それに當人もなまじ藝人の裏を見て居るので女判任官になる方が一層一人立の身の上に無難だと信じたからであつた。

女學校時代から算術と理科が一番の不得手であつたので、數理的な要素なぞはみじんも自分の頭腦にないものと斷念めて居たものゝ、其氣になつて取懸るとさのみ苦痛でもなく、漸々と其道の興味も加はつて行くに従つて進歩も早く、成績も人に劣らぬのが自分ながら可笑しくもあり、不思議でも有つた。

然し時には昔歩んだ道のさまのなつかしく振り返らるゝ事もないではなかつた。母と買物に出掛けた折など灯の點つた杉垣越に下手な謠の一節でも洩れて來ると耳敏く母が聞き付けて、

「稀には稽古にも行つて見たいだらうねエ」と同情を以て云はれる母の詞を聞くと、

「否え、ちつとも」口の先ではキッパリとかう云つても巴や蟬丸の一つ〳〵に濃い思ひ出の籠つて居る曲は、ふと死に別れた友達にでもめぐり會つた樣な云ふ可からざる一種のなつかしみを心頭に催さしむるので有つた。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「けれども藝人になるぢやなし、お慰みと云ふ場合でもなし……」

母親は定つて一人で打消してから話を切るので有つた。

上から上へと鴨居へ貼り重ねられた、處々の催しの番組、黒塗の細長い板に仔細らしく胡粉で認められた稽古の日割の傍に少さく紙が貼りつけて有つて、

（來る二十九日、先生宇都宮へ、向ふ十日間御出張の事）とあつた。

「先生、今でもまだ宇都宮のお稽古を持つて居らつしやるんですか」

お類は親身の親の身體を氣遣ふやうな心持で、此七十餘歳の高齢を提げた老人の而も炎暑の旅路を心からあやぶまずには居られなかつた。

「此お若いのに」

「若いつたつて何だつて稼がずにや居られません、それに近頃は遠方の出稽古が漸々殖えて來て、月の中、五六日宛は水戸と千葉へも行かなけりやならず、之も若い者に任して置くと兎角粗漏をやつて不可ませんから、目の黒い内丈けは自分でやることにして居ます」

嘸かし、今頃榮二郎が生きて居て呉れたらと思はるゝことであらう。とお類はいかに勝氣でも年に爭はれぬ衰への影が貌に表はれて來たのをいたましく眺めた。おとなしくつて

器量がよくつて近所の評判であつた榮二郎の嫁もつい此春病んで二人の子供を老人に殘して死んで行つたと云ふ……。

ヤンチヤでヤンチヤで手こずつた義一と云ふ末の孫が、危ない梯子段をはふやうにして上つて來た。父にも母にも似附かぬ、堅肥りした丈夫さうな男の子で、五才にしては大柄な、何より逞ましい眉付が、未來を頼母しく思はせるのであつた。

父親の穿き馴れて居た稽古袴を少さく仕立てゝ、少さい足には謹ましく紺足袋をさへ穿つて居た。

「せめて此奴が十七八になる迄も生きて居られると充分ではなくとも、幾分自分の手で仕込むことが出來るのだが……」

子供を自分の膝近くにすはらせて頭に手を置きながら師匠は染々と愚痴つぽく云つた。

床の間の片隅には少年の丸い肩にふさはしい烏胴の玩具のやうな雛型の小皷が置かれて有つた。

「普通の大きさではとても肩に堪へられませんし、まア音は出ても出なくつても今から少し宛、持ちならさして置かないと……」

老人は虫に物を食ませるやうな氣永さを以て此子の行末の幾分をでも自分の手で形作つ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て行かうともがくので有つた。

「さア、お類さんにお聞かせしな、サ……花咲かば……」

紙をもんで鼻の下を拭いてやつて一口先に立つてきり出すと、それでも子供ははにかまずにどうやらかうやら人々の貌を見廻し〱、「木陰により居ていざいざ花を眺めむ」迄唄つて丁寧に疊へ頭をすり付けた。

人の胸には十五の年、晴の舞臺で翁の頭取を勤めて斯界の麒麟兒とさわがれた榮二郎の素袍長袴の凜々しい扮裝が浮び上つて、老師の身の上を氣の毒と思ふにつけ、云ひ合はしたやうに沈んだ目をして此兒を見た。

田樂ざしにさした西日の炎えるやうな若さのほとぼりが漸くさめかけて來たので、立縣る用意に小扇を帶へはさむと、昔馴染の敬様が、出稽古の歸りでもあるかして、羽織袴の前とは見違えるやうな身綺麗な形裝で上つて來た。イガグリにして居た頭髮も綺麗に中央から分けて、衣紋づくりなら袴の穿きざまなら、何處へ押出しても恥かしくない一個の藝人風になりすまして居る。然し物を云ふ調子丈けは相變らず頓狂で、昔の通りに笑つてよくしやべつた。

今ではつい師匠の家の裏手に家を持つて國から迎へた女房と今はこぢんまりさしたつゝ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ましい生活をして居ると云ふ――

「ちつとお歸りにお寄んなすつて一服召し上つて入らしやい」斯う云ふ此人の貌をまともに見て居るとお類は自然に笑へて來た。

まだ田舍から出て來たてに此人を怒らせると、むきになるのが面白いのでお類はいゝ可減大きななりをしながら、チヨク／＼惡戯をしてはからかつた。金次をそゝのかして、いゝ心持そうに椽側の風吹きで晝寢をして居る足へ皷の緒じめで金だらひを結びつけて置いたり、空氣枕の栓をねぢつたりすると、案の定怒つて扇子をふりかざしてお類を打たうとそこいら中を追駈けまはした。肥えた男がドサ／＼かけだす袖の下をくゞつて、鼠のやうにキヤツ／＼云ひながらお類ははしこく逃げ廻つた。それが又面白くつて堪らないので、何がないゝ折のあれかしとつけねらつて居た。

「よく笛のなりさうな指だな」金次や敬さんがよく手先のいたづらをするお類の指を見ては羨やましさうに云つた。さう云はれると何となく嬉しくつて、日頃は女の手のやうにもないと家の者から云はれる節の高い彈力の強い指先きをじつと見入るので有つた。

手持不沙汰に呆然といつ迄座つてゝも話はなし、果てしがないのでお類は師匠に暇を告げた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「阿母様にも宜しく、暑さは暑し、貴女にも折角御機嫌よう」

昔流儀の固苦しくかう挨拶する師匠の聲が思ひ做しか甚く濕つて居た。

お類は何だか緣付いた娘が、親許へ來て、ホツとする間もなく追立られて歸されて行くやうな味氣ない淋しさを感じた。

「其梯子段は險呑だから落ちないやうにするのですよ」稽古の席に再び戻りながら師匠はこんな小供に云ふやうな詞もつけ加へた。

「又入らしつて下さるでせうね、………折角まア御丈夫に………」

敬さんは玄關迄送つて來て虫弱さうに痩せたお類の後姿を暫く見送つて居た。

勝手元では目のショボ〳〵した婆やが久しい間見なかつたお類の影を見つけたので慌てゝ出て來て襷をはづしながら手をついた。

皆から御機嫌ようの、お達者に、のなどゝ浴せ懸けられるとそれが月並な詞であるにもかゝはらず染々情けなくなつて、自分の影がそんなにも薄れて居るのかしらと送り火をたかれるやうな嫌に濕つぽい氣持がした。

二階では師匠の諸で今班女の楊羽にかゝつて居る。

……そなたの空ぞと眺むれば夕暮の秋風、嵐山おろし野分もあの松をこそはおとづる

れ……

謠の內にしては可成艶つぽい文句に富んだ此曲の哀愁綿々たる若い遊女の情緒が、しはがれた老人の咽喉から發せられる時、より以上人の胸にせまる或物が有つた。

お類は暫くは去りもやらず格子の外で謠を聞いて居ると、まだ自分がづぶの小供で肩上げが取れなかつた頃、山吹色の襦子と緋の紋縮緬とを合はした帶を古風な八の字に結んで、袖の長い帷子に白麻の襦袢を重ねて師匠と二人去るお屋敷のお座敷開きに上つた時、師匠の謠で、此曲を調べた當時の光景がまざ〳〵と目の裡に浮んで來るので有つた。

木 內 錠

ふた親のまへ

平凡の女とするをねがひゐるわがゐまはりの
人もにくからず

おちつかぬ心は今宵ふた親のまへにコ、アを
のみて過せり

掃除せし部屋の柱にうとうとと眠れる親は捨
てもわざりけり

親の家をのがれむとすることをのみ思ひめぐ
らしよれる窓かな

言葉強ういひきりし後さめざめと泣き入れる
娘(こ)に親は默(もだ)しぬ

なるがまゝになりてあらむと瞑ぢし眼にあは
れあふるゝわが涙かな

美しきものにあこがるゝ女らしき女にて永く
君をおもひにし

酒の上のわろき夫(をつと)に病身の友は夜ふけて魚や
煮るらむ

わかき友の二兒(ふたり)の親になりぬてふ消息を見て
さびしき夕

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

縫物にうみてうつとりとせる窓際のわが半身を吹ける風かな

すなほなる女となりて弟らにもの教へゐる初秋の朝

塀外に立話するいやしげの人ごゑやめば夜は静かなり

夕方にかならずかへりくる奥の家のわかき主人の細きこゑかな

武山英子

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

懷疑

島子は生れて初めて二三日前に島田に結つた。今迄の無雜作な西洋髮が斯うした高い大きな髷になつて、それに赤いパラ／＼した髮にも艶がのつて、銀絲の先が光つて居る自分の高島田を見るにつけ、急に小供から大人に飛び進むだやうな氣がした。

殊に二度目の今日の髷は髮結も馴れた故か一層自分の美を引き立てて見せる。

『さあ立派なお嫁さまになりました。早速お婿樣に御目見えをなさいまし。』と髮結は笑つて云つた。

島子は叔父が今度の結婚の祝儀に買つて呉れた鏡臺の前に立つて澄ました顏をして自分の姿を見て居た。

友染縮緬の通しの長襦袢に意氣な黑地に赤と白で元祿模樣を染め出した半襟を思ひ切つて拔衣紋にして、白い長い首を惜し氣もなく出して居る。襟足が美しくクツキリと見える。

『島子樣すつかり御變りなさいましたね。東京からお歸りの時も美しう御座んしたけれど

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

又此の髪にお結ひになつたら………何處の華族のお姫様かと思はれる位で御座いますよ。』と先程からさ見斯う見して恍惚として居た隣の女房は斯う云つて未だ島子を見詰めて居る。

『あら厭な小母さん。』と一寸面を染めて鏡臺の前を離れた。

眞に島子の面長な白い中高のキリリッとした顔は崇高く見える。殊に眉炭も用はない眉は黑く匂やかに張のあるパッチリとした眼、通つた鼻、稍高慢に見える處はあるが、田舎には珍らしい器量である。

母家の方からは賑かな陽氣な笑聲がして來る門を出入する人の足音も忙しさうに、唯此處の離室のみは我が居る場所のやうに靜かである。

此の時廊下にスリッパの音がしたと思ふと今年七十歳の祖母が手に緋ビロードの小箱を持つて這入つて來た。

『何で御座います』

今瀬戸の火鉢で煙草を吸つて居た髪結のお石さんが先づ斯う聞いた。

『島子や、まあ立派な、これ御覧。』

隣の女房もお石さんも、今祖母の後から來た女中のお絹も皆祖母の手許を覗いた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

島子は長襦袢の上に縞御召の綿入を引きかけて緋の紋綸子の腰帶を結び乍ら顧つた。

『まあ。指環で御座いますね。』

『まあ美しい。これが金と云ふので御座いますか。』

『大きい金の指環！』

三人の女は驚きの聲を發した。島子も此の言葉に祖母の傍に來て坐つた。而して手にのせて目方を量るやうにして居るお石から指環を受取つた。

『美しいでせう。』と島子が蓮葉に云つて白い細い左の藥指にさして其の前へ突き出した。

島子は矢鱈既う心が浮々して斯う何とか此の震へるやうな心の喜悦を口に出して見たくなつた。日頃の不安も悲しみも何處へか拂はれたやう、女達の輝く目の光を快く身一つに受けた。

『お婿様が下さいましたのでせう、結納に。』と隣の女房、

『いいえね、結納はそれ彼の厚板の丸帶でしたがね、これは今日ねまあ内々に此の娘に下さつたんですよ。』と祖母は孫娘の指に滿足な目を向けて斯う云つた。

『これエンゲーヂリングと云ふのよ。お絹知つて居て？』

お絹は羨望の目の色を變へて居る、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『其麼六づか敷い名の指環は存じません。』

『あのね、外國では結婚する時は屹度お婿さんの方からお嫁さんの方へ指環を送るのよそれが夫婦の固い證據となるのよ。日本でも今は外國流になつて來たの。』

『ほお左樣で御座いますか。』と隣の女房は未だ眸を力一杯開いて居る。

『まあ拔いて箱へ入れて置くがいいよ。』と云つて置いて祖母は忙し相に出て行つた。

『未だお晝飯には早う御座いますから、私一寸お座敷へ行つて參りますよ。お膳にお坐りになる迄にお化粧もしませんければなりませんから。』

島子の仕度を引き受けたお石さんが出て行くとお絹も隣の女房も襷掛けで忙しさうに去つた。

島子は一人離室に取り殘されて茫然と自分の指にはまつた浮彫の巾の廣い指環を凝乎と見詰めて居た。

島子の七八年の過去は夢のやうに消えて行つて、是れから新らしく這入つて行く我が變つた人生の種々樣々の事が思ひ浮んで來た。第一に良人――、彼の色の淺黑い、鼻の高い四角な顏の男――金緣眼鏡と金鎖、長い太い指にはめた大きな金の三個の指環、島子は唯外見に現れた男を見る目より他知らないので、未だ男に振れた事のない其の處女の淸

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

い心には男と云ふものが今迄の憧憬の對照物として美しい姿となつて現れて來るのみであつた。

寒さも漸く此の二三日は薄らいで、梅の花もチラチラと綻び初めた。開けた硝子窓からは幻影をそつと包むで崩さないやうな軟い颯が吹き入つて柱に掛けた丹冊掛を緩く振つて居る。床の間の衣紋掛には今日着る空色裾模様の晴着が得意相に廣げられて、松葉重ねの金絲入縮珍の丸帶が春の光に輝いて居る。美しい色彩と匂を籠めた此の八疊の室に島子は醉はされた者のやうに茫然として居た。

明日は愈々此の生れた實家を捨てゝ見ず知らずの人々の中に這入つて、見た事のない新らしい世界の者とならねばならぬと云ふやうな事は全く今の島子の心からは消え去つて居る。

『電報が參りました。』

島子は此の聲に驚いて顧つた。其處にお絹が電報を持つて立つて居た。

『まあ電報?』

島子は今の此の平和と希望に滿ちた自分の心を亂す魔のやうな心地がして怖ろし相に默つて其れを受け取つた。胸は急に轟いて手はブルブルと震へる。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『まあ何處からだらう？』

輝く目に映つた文字は「コンドノ、ケッコンヲシユリスアネヨリ」とあつた。

『あゝ姉さんからだわ。』

島子は斯う云つてひしと其の電報紙を胸に兩手でかかへた。指環が光る。開けた窓からは澄み切つた瑠璃の空が見える。島子の眸は急に曇つて來たと思ふとハラハラと涙が膝の上に散つた。それが丸く點々とお召の着物に汚染をつけた。

『あ！姉樣!!』

既う一度叫むで見た。

島子は忘れて居た姉の事を思ひ浮べた。同時に夢の中の出來事であつたと思つた過去の事が忽ちの間に胸に浮むで來た。同時に今迄の處女時代の自由な華かな世界から人の妻となる我が人生の隔てが明瞭と意識されて來た。東京に出ての五年間。其の永い間唯自由な姉の監督の許に過ごして來た事を思ふと彼の華かな都の光の下に多くの若い男の眸に憧れて何やかやと噂を立てられるが却つて嬉しく、若い心を充分滿足させて來た時代。それはほんの今から半年前迄續いて居た。紫カシミヤの袴にハイカラな靴、髮はマガレットに巾廣の流行のリボンを掛け、友染メレンスの本包を抱へて二人の妹と連れ立つて神田の佛英

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

和女學校へ通つた。赤煉瓦の建物、綠色の壁、桂の葉をさしたキリストの像のある教室、白い帽子に黑い服のマスヤシスター、肺病だと云ふ美人の若いシスターはどうなつたか。一生結婚をしないクリスチヤンの教師達の哀れな運命。

島子は不圖自分の今の境遇と並べて考へて見た。その時代と今の、否今後の自分の人生と何れが幸福であらうかと考へて見ると何だか又と歸らない學生時代が矢鱈戀しくなつて來た。同時に何かに縛られてしまうやうな結婚と云ふものが怖ろしくなつた。

島子は姉の結婚を思ひ浮べると又しても目に涙の溜るのを覺えた。

島子は今迄自分の事にのみ心が紛れて姉の事を忘れて居たのが濟まないやうな氣がして來た。姉が結婚しての一年あまり、其の妻となつた姉の事をゆつたりとした心に思ひ浮べて、同時に自分の樂しかつた過去を繰り返して見やうと立つて窓に凭つて外の方を見た。囁くやうな水の流は清く白い眞砂の水の底を緩かに流れて居る、日が暖かく差して南裏の小川の堤には白い、菫の花と若芽を出したばかりの餅草とが春待ち顏に見える。母家の方から手飼の鶯が人の喜に何の關係もないやうに長閑に鳴いて居る。

島子の目には東京の郊外に住む姉が消え行く冬の景色と、凝平と子供を抱いた儘眺めて居る姿が見えて來た。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

島子の姉は八重子と云つて島子とは五つ違ひである。島子が姉と別れて住むやうになつてから既う一年半になる。島子が姉の良人の良作を知つたのは姉が結婚する餘程前からであつた。八重子が何かと口實をつけて外出したは皆良作と會ふ爲めであつたと云ふ事を知つて島子や其の妹達は非常に憤慨した。而して島子はその事を故郷の父の許へ知らした事もあつた。父からは嚴しい小言が來て神經質の姉の八重子は一日泣き明かした事もあつた。その時でさへ島子は何だか姉さんを奪はれたやうな氣がして腹立たしく別に慰めやうともしなかつた。父からの嚴しい小言にもしまひには馴れてしまつて八重子は大膽に良作を家へ導いた。而して妹達と共に遊戯をして遊むだ。常に物思ひに沈むでのみ居る姉は良作が來た時のみは晴やかな顏をして面白相に騷いだ。それを見て島子は自分も嬉しいやうな氣がしたが、時とすると一人の姉を良作に奪はれて行くやうな不安を感じて厭み嫌う時もあつた。又良作は良作の若い友人を幾人も連れて遊びに來た。島子は今でも其の若い人達の顏を朧に思ひ出す。何の男も何の男も皆其の眸は美しく輝いて居た。而して島子の未だ邪氣のない可愛い顏を見詰めて居るやうに思つた。其の頃から島子は異性と云ふ者に何となくインスピレーションされて居た。

遂に八重子は父に向つて良作との結婚の許可を要求した。其の頃八重子は今迄の束縛の

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

苦痛と自己を沒却した犧牲的生活から目覺めてしまつたので、最も大膽に最も熱心に自由結婚を主張した。物固い田舍の父親は妹達を捨てゝまでも結婚しやうとする娘を不孝者と立腹して了つた。それでも八重子は自己をいかさねば止まなかつた。遂に逃れて二人は東京の郊外に新家庭を持つた。其の折島子は全く姉を恨み惜むだ。而して其の行爲がいかにも不道德な汚はしい事のやうに思つた。然し今迄絕えず來た若い男達が見えなくなつたので急に淋しい氣がして春が秋に急變したやうな寂寞を感じた。

よく來た靑年の中で島子に戀の眸を向ける者もあつたが、島子は左樣した男の心を察するには餘りに無邪氣であつた。而して譬へ戀の印象は多少受けたとは云へそれを己が心に締めて男の情熱に酬ゆるやうな自覺も起らなかつた。唯何となく異性と云ふものが同性に對するよりも美妙な感じを與へる事だけは自覺して居た。

父は八重子の振舞に一時非常に腹を立てたが中に這入る者があつて稍其の怒りも止むだ。が然し父は決して八重子を公然に許さなかつた。田舍では斯うした八重子の行爲を村中の者、親戚中の者が何かと惡口を云つて父親も世間の手前娘を許す事は出來なかつたので、初孫の生れた事を知り乍ら何の祝儀もしてやらなかつた。勿論家庭を持つた時でも一文の補助もせず、結婚の費用なんて云ふものも一文たりとも出さなかつた。八重子は主義

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の爲めに遂に何者をも犧牲にして了つたが、心では餘り無情の父の心を恨み咀つた。母が去つてから十餘年間の自分の苦心に何の酬ひもしてくれぬ父を心から憎むだのであつた。

八重子は戀人と共に筆を持つて戰つた。傍勉强を怠らなかつた。

島子は姉が去つてから止むを得ず姉の位置に立つて妹達を監督しなければならなかつた。五十歳近所の婆やを賴むでは居たが、會計の事や一家の事は大方十六歳の島子が頭を用つた。

島子は急に責任と云ふものを感じると同時に漸々女の自覺が起つて來た。而して父を捨て妹達から隔れて去つた姉の心をも考へて見た。月日の經つに從つて島子にも今迄の姉の心が多少解されるやうになつて來てそれ程に八重子を嫌はなくなつた。却つて手賴ない心から姉を懐しいと思ふやうになつた。

丁度春の眞盛りの花見頃、島子は妹二人と共に高田の方へ散步に出た。見る限りの若葉は心地よく目に輕い光を投げて、心をそそるやうな、若い者の心のシンボルのやうな緋の椿や八重櫻が道の邊の家の軒端に咲き亂れて、靈も溶かして了ひさうな春の薫りが一面に流れて居た。雲雀の歌も、小鳥の鳴く音も、胡蝶のむつるる姿も島子の心には何とも云へぬ酔はしい情を見せた。蓮華の花と菫の花束を手にして三人は鬼子母神の境內に這入つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

其の折思ひかけなくも姉の八重子に逢つた。

『まあ三人とも揃つて何處へ行くの』

姉の八重子は見馴れた元の着物を着て銘仙の被布を引き掛けて手に包を持つて居た。

『まあ姉さん？』

三人は目を見合せて立ちすくむだ。

『私の家へいらつしやい。ね、直ぐ其處だから。ね、島ちやんいいでせう。』

二人の妹は姉の島子の顔を見た。

島子は何うしやうかと考へて見たが、矢張姉が戀しかつたので、

『何處？行つてもいいわ。』

島子達は姉に導かれて鬼子母神の境内を突つ切つて廣い道へ出た。それから一丁ばかり右に行くと新建の家があつた。

『此處よ。』と八重子はいそいそと格子戶を開けて中へ聲をかけた。

『小さいお客樣よ。貴郞』

椽の障子が開いて顔を出したは良作であつた。

『おお珍らしい。よく來たね。さあお上りなさい。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

机にガラリとペンを投げる音がして良作は椽から三人を招じた。

島子は父の怒に觸れて勘當同様になつて居る姉の家へ來たのが何だか父に對して惡いやうな氣がした。それ故家の中へ這入るのも憚かられた。

『上つたらいいじやあないの。今餅菓子を買つて來たところだから、御馳走するものを。』

八重子は妹達が椽に腰かけて居るのを強いて上げやうとした。

『此處で澤山よ。』と島子は云つて上らうともしない。八重子はお茶とお菓子を三人の妹に出した。而して良作も八重子も暖かな日影をあびて椽側に坐つた。

島子は開けた障子の外から中の樣子を見た。普通の新夫婦の家庭とは異つて新らしい鏡臺もなければ、簞笥もない。姉が着物の代りにとて父にせがむで買つて頂いた大きな硝子の本箱は家に置いて去つたので此の新らしい家には其の樣なものさへも見當らない。唯買つたばかりの一貫張の机、その上には縮緬の桔梗の肱突と書きかけの原稿とが取り散らしてある。オリーヴの机かけをかけた大きな四角な机は良作のらしひ。雑誌や金文字の洋書や原稿などが一杯に處せまきまでに載せてある。島子の目には全く家の中が貧しげに見えて姉の顏などもそれとなく同情の目で見やられた。

『久しぶりね。今日はゆつくりして行つていいでせう。』

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

八重子は嬉し相に妹三人の顏を當分に眺めやつた。

『夕飯でも食べて遊むで行くさ。丁度月もあるから送つてあげる。』

良作も他意なく斯う云つた。

『でもね。遅くなると心配するから。』

『大丈夫よ淺やなど何と思ふものですか。』

『でもね。又來るわ。靜かでいゝ處ね。』

『今頃は殊にいゝわ。花が多いから此の邊は、』

『摘草も出來るわね。夏は螢も居るでせうよ、眞當にいゝわ。此の邊は。』

島子は自然の美に恍惚として若い心を波立たせたのであつた。

『土曜に來て宿つて日曜の夕方歸るやうにするといゝわ。これから折々いらつしやいな。姉さんは淋しくつて仕方がないから。』

『來るわ。ね姉さん。島子姉さん。今度の土曜に摘草に來ませうよ。』

島子の次の妹は何の考へもなく斯う云つた。島子は唯淋しい笑を見せたばかり。

此の時若い男が二人這入つて來た。

『おゝ居たね。』と二人の客は良作を見ると斯ういつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『よく來たね。さあ上り給へ。』

『おや。島子さん方ですか。』

一人の色白い美しい顔の青年は島子を見て微笑した。

島子は心持面を染めて頭を下げた。妹達も微笑で頭を下げた。

『暫くでしたね。』と青年は親しげに三人を見て其の前に彳むだ。

二人ともよく遊びに來た人達なので姉妹は親しかつた。殊に色の白い方の青年は良作の一番の親友と云ふので幾度も姉妹は會つて居て心置きなく交はつて居た。島子は多く來た青年の中で最も此の秦と云ふ男が好きだつた。

二人の男は其の手に白い大きな菫の花束を持つて來た。

『まあ大きな菫ね。這麼の何處にあつて？』

末の妹が其の菫を欲し相に云つた。

『あげませうか。』

『エヽ。頂戴な。』

一人の男は末の妹に、秦は島子と其の次の妹に分け與へた。

島子さん。秦さんの心つくしの贈物よ』と八重子は晴やかに笑つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

島子等は間もなく暇を告げて出た。

其の次の土曜に三人は再び姉の家を訪ねた。其の日も秦と他に二人ばかりの客があつたが秦だけ殘つてあとの客は間もなく去つた。其の夜は秦と若い美しいお客さんで常も靜かな家も賑やかゝつた。カルタを取る聲もした。良作の詩を朗讀する聲もした。元氣のいゝ島子の英語の唱歌、其の妹二人の佛蘭西の唱歌、果ては珍らしく八重子迄が讃美歌を歌ひ出した。春の夜は朧に、庭の八重櫻は人々の瞳に心ゆくばかり誇らしい姿を見せて居た。夜鳥が鬼子母神の森に鳴いて青い燈明の光が星のやうに瞬いて居るのを島子は椽に彳むで眺めやつた。

『お稻荷さんのところに白狐が居るつて眞當』

と誰に云ふともなく島子は斯う茫然と云つた。

『居ますよ。確に。』と秦は島子を驚すやうに云ふと。

『鬼子母神の中のお稻荷さんを信ずると戀が成功するつて云ふね。實際らしい。』と良作が云ふ。

『さうかね。』と秦も笑ひもせず感心する。

『あの狐の穴の口元へ油揚を置いて祈念して居るといつか知らぬ間に持つて行つてしまう

つて云ふ。』
『さうすると御利役があるつてのか。』
『秦さんも試にして御覧なさい。』
島子は姉の言葉を笑つて聽いて秦の顏を見ると、其の眞黑い眸が一種の誘惑の光を放つて電光のやうに島子の眼を射た。
秦は淋しい道を歡樂の跡を辿つて歸つた。島子の美しい面影を消すまいとするやうに其の二三日は學校にも行かず下宿の自分の狹い部屋に籠つて西洋の詩を讀むだり、時として は興奮した心を筆にして見たりした。
島子は翌日の夕方妹達と共に歸つた。何だか自分の靑春時代の歡樂を味ひ初めたやうな喜びを感じた。
それから土曜の來るのが心まちに樂しむやうになつた。土曜に姉の家に行くと必ず若い男の一人や二人は來て居た。島子は斯うした若やかな空氣に充たされた姉の家を羨むだ。其の中に交つて若い男の目の光、其の自由な思想に憧れて居る話。絕えず戀の秘密を包むで居るやうな感じを島子は快く味つた。然し島子には斯うした自由奔放な姉の家に行くのは自分の知らぬ間に墮落して行くのだと心づいて行くまいと決心する時もあつたが、胡蝶

が花に憧れるやうに島子は幾度も幾度も心に迷つた末には遂に又姉の家に行くやうになつた。

八重子には折々良人の口から妹をラヴして居ると云ふ青年の事を聴いた。然し良作の友人は皆デカダンで。一人の女を深く想ひ、一生の苦樂を共にしやうと迄戀を眞面目に考へて居る男はないと知つて居るので、八重子は小說でも讀むやうな氣持をして其の話を聽くのであつた。

『秦さんは眞面目ですけれど、齡は未だ貴郞よりお若いし、それに餘り美男子ですからね。』

『心配だつて云ふのか。』

『………それにおあした妹にはね………』

八重子は常もこんな事を云つた。

『第一に父が許さないでせう。斯うして私等の家へ妹達が出入して居るつて事が知れたらどんなに腹を立てるか判らないわ。』

良作は苦い顏をして默つてしまう。

春も夢のやうに過ぎて若葉の夏が來た。

島子の學校は七月の中頃から休暇になつた。島子は日頃の學校の方と家の事とで心勞の結果腦が惡くなつて、暫く田舍に歸つて靜養し度いと思つたが家を捨てゝも行かれず、それに今年は妹二人の歸省の番なので仕方なく暑い都に止る事にした。

妹達が歸つてから島子は姉の家へ暫く裁縫を習ひに行く事にした。それに其の頃八重子は身重になつて居たので手傳ひをすると云つて正直な婆やを一人殘して八重子の家に行つた。晝の間姉と二人で仕事を持ち出して椽に出て居ると氷のやうな冷い風が八重櫻の大きな若葉に囁いて二人に涼味を送つて來る。塵芥もたゝねば、何の物音もない、鬼子母神の鳩が日の光に翼を飜して飛んで居る樣も見える。何とも云へぬ滿足を覺えて島子は幾日かを姉の家に過ごした。朝の空氣の冷い中を露を踏むで鬼子母神の森に散歩し、夕方日が沈むで富士の山が畫の如に浮むで來ると又一人默つて田の畔を散歩しながら、百姓家から立つ煙が霧のやうに黃昏の空に棚引いて行くを倦かず眺めて居る事もある。此の頃島子は人の話も耳に入らない位に默つて考へて居る時があるかと思ふと、又よく紅の油切つた薄い唇を震はして姉を捆へて喋舌りつゞける事もあり、唱歌を一人面白さうに歌つて居る事もあつた。

或日、日光が前の空地に暑さうに映て遠くの森の樹立が日に大波のやうに光つてそよ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

いで居るのを見乍ら、風通りのいゝ椽に島子は姉の友仙縮緬の長襦袢を持ち出して解いて居た。其の傍に八重子は小さい赤子のメレンスの着物を縫つて居た。其處に一人の若い洋服の男が這入つて來た。庭先から突然良作の在否を問ふと留守だと云はれて直ぐ歸らうとしたが、八重子が強いて止めるので其處へ腰をかけて自分の名刺へ用向を書いて置いて何だかあはてたやうにして去つた。

後で姉妹は其の肥えた男の後姿を見送り乍ら顔を見合せて莞爾とした。

次に其の男が來た時は丁度島子が歸つて了つた後であつた。其の男は大澤と云つて其の頃新聞記者を務めて居る

『あの此の前大澤の來た時に島子さんが居たんだらう？』

『エヽ。私と二人で椽に仕事して居たわ。』

『その時にね、何だか島子の美人なのに面くらつてしまつたつてさ。』

『ホヽヽヽ、道理であの時の大澤さんの風つてなかつたわ。さうでしたの。』

『白い美しい顔の女の人が二人、一人は確に奥さんだと思つたけれど、若い方の女の人が膝に美しい美しい友染の布をひろげて居たのが何だか目にパッと輝いて來てドギマギして了つたつてさ。ハヽヽヽ、大澤も無邪氣だね。で是非既う一度會いたいつて。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『島子に?』
『うう。』
『妻君にでも欲しいつて?』斯う云つた八重子は冷膽であつた。過ぎ去つた自分の獨身時代を思ひ出して人の妻となつて一人の男を守るやうになつては、殊に間もなく母となる身では、既う若い男の心を誘ふ力は失せて了つた。何事も妹と並べられては自分は全く美の力を失ひあるかなきかの女となつて了つたと思ふと神經過敏になつて居る八重子の心は忽ちにして苦しく泣き度くなつた。
それからは頻りと大澤は遊びに來た。良作の居ない時でも椽先で遠慮のない話をして八重子を笑はせた。
大澤は其の後二三度島子に會つた。而して遂に島子を自分の妻にとせつなる心を打ちあけて良作に頼むだが、良作は今の處どうとも返事のしやうがなかつた。
島子の妹達も直きと休暇がお了ひになるので歸るやうになつた。
八月も過ぎて九月にはいると武藏野は何となく秋めいて來た。
月の良い夜、島子は姉と良作と秦と四人して散歩に出た。姉は既う何時生れるか判らないやうなお腹をして、紋綸子の夏の被布を着て出た。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

月に白く見える廣い道を池袋の停車場の方へ四人は歩いて行つたが、秋らしい虫が頻りと畑の方で啼くので細い道に誘はれるやうに這入つて行つた。

八重子は何となく悲しめる心に月を仰いだ。

島子は姉と並むで良作と秦の行く後からついて行つたが、月の光が廣い野を隈なく照らして居るのを見て自分の心が充分滿たされて居るやうな、而して戀人と共に歩いて居るやうな滿足を覺えた。

『あゝ！　實に良い夜だ。』と良作は詩人のやうな憧憬を見せて月を仰いで佇むだ。

『良い月だね。』

四人唯無言！思ひ思ひの心を抱いて果てしない武藏野の一種偉大な自然にうたれた。此の時おそらくは島子と秦との間に神秘的な或自然から受ける愛情を感じたであらう。島子は今も其の時の感じを痛切に味はうのであつた。

其の夜以來島子は秦とは會はなかつた。否姉とも、良作とも、他の男とも、それは姉が出産してから十日ばかり經て急に故郷へ歸る事になつたからである。

島子は多くの若い男の自分に對する戀をそれとなく姉から囁かれて居た。若い心は絶えず一種の自惚に伴ふ誇り（ブライト）を以て道を歩くにも電車に乘るにも自分は美人で什麽男の眸をも

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

魅(チャーム)して了ふ力を持て居ると信じて居た。同時にたやすくは男に笑顔を向けるやうな事はしなかつた。故に戀に夢中になつて煩悶すると云ふやうな事はなかつた。然し島子は秦の事だけは何となく忘れられなかつた。田舍へ歸つた淋しさは折々學校の友人を思ひ出させ秦やその他の男の事も思ひ出させた。

島子は今迄の若やかだつた世界から不圖目が醒めた。

「ああ！　姉さんは今頃何をして居るだらう。」

自分に青春の樂しみを與へて吳れたは姉であつた。それが今では遠く隔れて、文通さへ出來ない境遇にある。父とも別れ、妹達とも會はなくなつた姉は小供を抱いて什麽感じをして居るであらう。何故父は姉を許さない？姉の結婚は眞に道德に反して居るんだらうか？島子は靜かに姉の自由結婚を考へて見た。而して自分の結婚をも考へて見た。すると島子は何だか取り返しのつかない事をして了つたやうな後悔が起つた。姉の家庭――、それは實に富むだ俗人の目から見たらみすぼらしいものであらうけれど、親兄弟にまで捨てられた姉は或偉大な慰籍と希望を持つて居る。若い情熱の世界を所有して居る。愛する男と共になる爲めに總てを犧牲にした其處には意地がある。肉身から隔れ俗世間から嘲笑された姉等夫婦には縱ひ情熱は消えても其處に別れる事の出來ない天地自然の力がある。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

とすると自分の結婚はどうなるであらう。甞て見た事もない、勿論氣心も知らぬ男と一生を共にして其處に平和と安心と希望があるであらうか。財產は身につく寶にはならぬ。何時消えるか判らない水泡と同じもの良人の愛――――、それが一度ばかり見合ひをして永久に變らない愛情となるであらうか？、自分は未だ十八歲、姉の結婚した齡迄には餘程あると思ふと島子は未だ未だ自分の青春を葬り去るのが惜しくなつた。一人の男故に身を飾り一人の男に自分と云ふものを支配され、自由を束縛されるのが實に心外になつた。

『厭だ。私は未だ結婚するんじやあなかつた。』

戀の歡樂を未だ充分味ひつくさない氣がして自分の美を今迄のやうに多くの男の前に誇り度いと思ふ。

『私は何故何の考へもなく父の言葉に從たんだらう。どうせ結婚するのなら少しは好いたと思ふ人と……』

姉の數寄なる運命を羨み、自分もせめて自分の爲めに死むで吳れると云ふ男と結婚したいと思ふ。

然しそれが既う是れ迄に至つては取り返しがつかない。どうしやうもない。親と云ふもの世間と云ふものが自分の手と足を縛つてしまつて人形のやうに取り扱つて居る。口惜し

いと思ふけれど仕方がない。――――。

此の時忙し相に小走りの足音がしたと思ふと伯母が這入つた來た。

『まあ何をして居るの此の人は。』と小さい身體の女は一寸眉をよせて

『お化粧もしないでさ。お石さんは何をして居るんだねえ。』

島子は今度の媒介者の位置に立つて居る此の伯母を不快な目で見た。日頃餘り好かない伯母が一層此の場合自分を殺しに來た者のやうに思はれた。

『さあお石さんが忙しければ私でもしてあげる。明日は朝早く立たねばならぬのだから今日別れのお盃をして了はねば。』

氣忙しげに云ふ伯母を、他人の事を云つて居るやうに冷かに見て居た島子は一層此の家を捨てゝ去るのが厭になつた。

『おゝ、指環を御見せ。大へン良いのだつてね。』

島子は今迄忘れて居た指を不圖見た。

『既うはめて居るのかい。』

島子は其の指環をつと拔いて神經的にポンと伯母の前に投げた。

『まあ投げなくつても。』と驚いて拾ひあげる伯母に

『私其麼指環などいりません。』

『まあ！　これは安價くないよ。お前。』

『何故私、彼の方と結婚しなければならないんでせう。何も彼の方と限つても居ないでせうに。私既う一度東京へ行き度い。姉さんの許へ。』

伯母は非常に驚いた。口ばかり動かして眼を見張つて居る。

『私考へたら判らなくなつたんですもの。何故伯母さん達は私一人の爲めに左樣騷ぐんでせう。私が誰の處へ嫁に行かうと構つた事じやあないと思ふわ。姉さんなど誰にも人形のやうに扱はれなくつて……眞當に幸福よ。』

『まあお前姉さんの眞似をしやうと云ふのかい。』

『エヽ。姉さんは私より幸福な結婚をなすつたわ。』

『それならお前迄親不孝の娘にならうとするんだね。』とプリプリする程怒つて見たが氣をかへて

『今更馬鹿な其麼事は義理として出來るものじやあない。ねえ島子。そんな人困らせを云はなくつてお化粧おし。まあ御父さんだつて又伯母さんだつてお前達に母親がないばかりに餘けいな心配もしなければならないんだよ。』

『でも判らないんですもの。今度の結婚は自分の爲めじやあない。他人の爲めにするやうな氣がして……あゝ厭になつてしまう。』

島子は神經の嵩じた顔をしてつと座敷を出た。

美しい島田の後姿が消えて梅の薫が何處ともなくして來た。

――完――

加藤緑

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

習作の五

私の家の向ひどもなる亀家の裏二階からは何うかすると浪花ぶしが響いて來る。夫れが何時も朝餉を了へ、湯に這入つて、茫然と暗い房の中に默想しかけると、俄かに耳立つて聞えて來るのだつた。能くきくと、夫れは郡山から來た藝者の一行が泊つてゐるのだとの事。さすが素人にしては出來すぎると思つてたが或る時など、女と思へぬほどゆつくりと餘裕を有つてゐる低調な調律(ふしまはり)などは、何だか誘惑させる樣な力を有つてゐた。姿は能くは見せないが、大凡そ何うした風な日課を追つてゐるだらふなぞ可懐しい空想を私は湧かせた。折々氣扮れに彈く三味線が水の底から潜(くゞ)つてでも來る樣につうんつうんと泌(しん)み響く、素より纏まつたものを彈くのではなくて、老松の好い部分、あたかの中程、などと洒落れてゐるのだつた。何うかすると新内もきこえた。なつかしい午睡の夢のやうに、温い湯の手觸(てざわ)りのやうに私は慿(か)う恍(うつと)りとなるのだつた。三味線はまだ他からもきこえた。梅雨ばれの空は勿忘草の花色にのび渡つて晴れてゐるかと思ふと、夕方近くなつても音もなく

中天は灰色とも何とも名の付かぬ憂鬱なムードに充たされた雲の群がりにふさがれ、何時かしらず深い深い雨を思はせる空合となるのである。冷めたく並びきつた家根の瓦の上に闇々として綿蟲は飛び交ふ。然ういふものを私は凝と見つめてゐた。護謨人形を片手に鳴らし乍ら、めまぐるしく廻轉する綿蟲を見てゐると、何處とも知れず舞の手に合はす低い絃歌のひびきをきいた。其音は點燈まへの街々のもの丶響きのどよめきの中にあつた。然ういふ風に心をそゝらうとて傳はつて來る絃歌のひゞきは、まるで私を玩そばうとする樣に、消えるかと思つて諦めにかゝると、俄かに明朗として絃に觸るゝ撥ずれまでが私には分つた。

丁度さうした時刻となると、私の家の臺所の隅の方では鼠とりが行はれてゐる。早い電燈は已う灯を通はせて來る頃、ちゝゝゝと言ふ泣き聲を立てゝ鼠捕の網の中には愛嬌もののゝ小さな生者が囚はれた。夫れは頓て前の高瀨川へ捨て流されて行くのだつた。何處一點傷を受けてゐない鼠は川を渡り何れ何處かの床下に這ひ上つて行くのだらう。氣の弱い私達の家の人々は此れ以上の事を爲し得ない。然ういふ悲劇があらふと知らぬ鉢の金魚はまた、夕暮れのなんとない哀愁を味はゝんとてかびらびらと青い藻の中に踊を踊る。白い斑點のあるのは、緋色の方よりも強いかして夫れは熾んな勢で跳ね廻はる。誰人の惡戲

か千鳥草の花瓣を水の中に投げ込んで遣つた爲めに、食物か何かと思つては口を揃へてつゝきに來る。愚鈍なものはそればかりではない。

私の房から直線に向ひ對つた龜家の二階の或る室は、今日も新しい旅人があるかして凉しく開け放つて、障子の色を明るく暗色に染めてゐた。白木の欄には美しい手拭なぞがかゝつてゐて、次第に日沒の憂暗が迫つて來る。外光の淡らいでゆくにつれ、家々の灯の色は次第に深んでゆく。なつかしい心を揺らめかせる樣な初夏の灯は、諸々の物の色の薄らぎと共に鮮かに、樂しい夜の沈靜を彩どり初めた。然ういふ灯のともる處には、私共の知り得ぬ不可思議な、或るは極同じい境遇などでわだかまつた生活が廣がつてゐるのだらう。などゝ、愚かにも空想はさうした人々の顏を描かせ、人の肌から發散する匂などを嗅がせた。

丁度何處かの家の時計が七時を報じた。私は其音を無意味に愚かものゝ心して數へると、あゝ、何時の間にか私は時刻を無視する樣な生活に住んでゐるのかと思つて見るのだつた。頓てその思ひは淋しい無音な、沼のやうな世界に私は一歩も浮び上がられぬ運命に沈んでゐるのだといふ事を思はしめる樣であつた。然うしてゐて、冷たい笑ひが禁じられないのは何故であらうか。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

机の上に置かれた洋燈は、其ニッケルの面に私の顔を幾つも映した。其顔はみな違つてゐた。何の象徴か知ら。私は淋しく微笑しながら已う悉かり暮れきつた外を覗ると、庭の角（すみ）にきらりッと光つてゐるものゝあるを視た。能く視ると、夫れは手洗水の杓の金（かね）が光つてゐるのだつた。何の事はない私の鼻は已う螢のあのなつかしい病的な匂を嗅いでゐたのだつた。

然う言へば私の近來のヒステリーは一日御飯を喰べさせぬ様な事を爲る。室中の息苦しい汚い匂が私一人に迫つて來るやうに覺えさす。紅生姜の辛棘な味覺に爽かな悦びを覺える。カンフルなぞを醫師の家から貰つて來たりなぞするのである。さは言へ、無生（むせい）のものゝあえかな色を見て思はず涙をそゝぐ様な事も稀れになつた。然う言ふ處女の涙から脱れて行く枯れ枯れな私の醜い形と影を何うしやう。あゝ、夫れでも私は此無智な愚か心の涙を流して泣き立て度い。音もなく濡らせてゆく雨に生き返る岸の青葉にほろほろと悲しみを視出す様な涙は流れても、自分の形と苦しい影との醜さに注ぐ涙は惜しまれない。泣いて何うかなる事なら泣いてゐたいと云ふのでなく、何うする力も智もないと見た時に、初めて知つた此世の驚きと欺かれ果てた期待とに哭かざるを得ないのだつた。異性の人達ちに此涙がないならばいたましい悔恨とか、はげしい懊惱とかが頓て愚かしい涙に變るのだ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

らう。何うしやう、人は何うであれ、私にはまるでいぢらしいものに加はる保護の缺乏を訴へでもする樣にわけ知らぬ涙が流れた。

市營電車の設置の爲めに今日は祝賀の花火を擧げるとか、夫れを視にとて家の人達ちは大橋へと出かけて行つた。稀れに獨りで人なき家を護るといふ事が耐らなく嬉しく思つた。晴れてはゐるが潤ひを有つた泌みりとした風が曇つた硝子戸に當つた。

恁う言ふ風な獨り居の靜寂は、偖となると何事をも考へさせやうとは爲ずに、頓て泣かまほし氣の悲しみが淋しさに混つて心をほじりはじめる。壁に淡く立ち添ふ影の動搖すら、私は眼を當てゝ視やうとは爲なかつた。

少時くすると、人の氣のない家にそつとして訪ねて來た人があつた。

『何うですか。其後は鼠は捕れますか。』

などと言つて私の房に平氣で上つて來ると其大きな懷からむくむくとした小さな生者を投げ出す樣に疊の上に攫み出すのである。

私は夫れを見つゝ、あゝ猫を持つて來て吳れたのかと思ふと、其愛らし氣な、淋しい姿を能くは見ずとも直ぐ何とも言ひ難い和かな悅びのさゝやかなものを覺えた。能くきくと、猫は、今夕何と言ふあてなく步いてゐるとふと街道の片隅に白く動いてゐる小さいも

のを覗つけた。其一つは自分の姿を見て逃げて了つたが後の此一つは難なく兩手の上に抱かれて來た。何と人慣れた可憐いものだと思つて連れて來た、恁う言つて說明した。

何の事はない盜んだ猫だ。何れ温かい人の膝から倦怠の少時くを外の光りに打たれやうとて戯れてゐたのだらふに、夫れぢや飼ふ人の心配と、何も知らぬ愚かものゝ新らしい家庭の人々の匂の痛さとは、止みがたく私に辛い厭惡を與へたのだけれども、まさか何處の町とも知れぬ處へ返しに行つて呉れる人ではなし、而も其人は前に、氣に止める容子さへなく白い扇子の端で輕く小猫の頭を叩く樣な事をして笑ひ興じた。

『人形よか、生者の方が面白がさ。』

など國土なまりを使ひ乍ら、笑ひきつてゐる。

猫は房の角に行つては物かげに秘み、泣き聲をたてた。其聲はまだ乳を離れぬ樣な細い聲だのに體軀は已う充分發育して膝に乘せれば可なりの重みがあつた。

毛深い白い手を差し伸べて、扇子の先端を押へてみたり、冷たい鼻をそれに當がつては、耳先きをぴりぴりさして敏感な神經の震へを見せた。

『へゝゝゝ』

と何となく其人は笑ひ乍ら。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『居なづいて見りや、可愛いものですせ。』

と言つてぷいと茛の烟りをかけて遣る。

『おい。獵を確乎りやるんせせ。はゝゝゝ可愛いもんでさ。』

などと言つて、ふいと立上る際に又一つ扇子で頭を叩いて、和々と笑ひ乍ら歸つてゆくのである。

一人になると、何處からとなく集まつて來る淋しさは、小猫の背の上にもある。折々邪見にも膝の上から突き放すと、行き處のない様な眼をして、壁の裾、柱の根、疊の縁りなど毛を摺りつけて、嗅ぎ慣れぬ匂の淋しさに悄然として古新聞の紙の上にゐづくまる。膝に上せてやると、圓らかな可憐な眸をしてゐる。洋燈の光りが眼に痛いか直く暗がりの方へ向き直ほるのだつた。

『綺麗だよ、綺麗だよ。』

戀う表から聲を立てゝ家の人達は勇ましげに下駄を鳴らして歸つて來た。

『何うも立派な花火だつたね。』

『細工花火さ。』

『水色に光つてたのが好きだ。紫、紅、綠、なんて。』

『つゝと天まで上つて行つたね。』

などゝ、先刻まで暗い顔をしてゐた人達は衝き上つて來るやうな聲を立て乍ら未だ眼には燦爛たる花火の姿を描いてゐるのだつた。

『猫が來ましたよ。』

と私は冷たく言ひ乍ら、人々の前に白い姿を突きつけて遣つた。

『へえ。』

『一寸お見せ。』

『子供だね。體は大きいが。』

『でも鼻が温かいね。是れあ健全な猫ぢやないよ。』

と冷酷に言ひ乍ら、其くせ圓るい眼で訴へるやうな小さな泣き聲を立てると、

『いーいー。』

と下手に眞似ながら、膝に上ぼせ、眼をすり付けたり、物を食べさせて遣りなぞするのだつた。人はみな彼あだ。と私は笑つて見てゐたが、何だか恁う、弄み物を奪られたと言つた調子な不快で、つと無言になつて、自分の房へ歸ると更け行く夜の寂寞を味はせる樣な遠くからひゞいて來る町の物音などが、妙に腦の澄みきる樣な冷たさを味はせた。猫を

相手にたはむれてゐる人々の聲までが浮蕩らしく聞けるのである。

『おや、おや踊るやうな眞似をするよ。』

『兩手を恁麼にしたでせう。』

『猫は古くなると踊るつてね。』

『へえ。』

『踊るよ、人間のやうに。』

『あゝ、手拭を被て。……さうですつてね。老け猫は踊るさうですね。お化けになるんださうですね。』

『私には覺えがある。』

『私しも見た事があります。』

『さうだらう。』

『淋しいものですよ。』

恁う言ふ話は、怺らなく私を壓しつけた。一種の物苦しいとも何ともつかぬ心地はつい聲になつて出た。

『猫を此方へ返して下さい。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と荒らかに言ふと、

『はい。はい。』

『さあさあ、彼方へ行つといでよ。』

恁う言はれてまだ名の付いてない猫はひよいひよいとして這入つて來た。

二

白いなぷきんの手觸りのやうな、何となく心を撫でまはす樣な朝が來た。昨夜降つたかして土は濡れて、坂塀の裾の方は一尺ばかり暗く色づんでゐる。其まはりを蝶が飛び交ふ。眞白な蝶がたつた一つ。

私は午前中を何もしずに暮した。心の影にうづくまる可懷しい人にとて、讀み了つたものを送り、端書を添へた。かゝる行爲が、秘密なかゝる行ひが頓て私の身を亡すならば亡ぼされやう。音もない、濁つた沼の水かげに浮く草のやうな身に、痛いばかりに放なたれた强烈な光りを呼吸して、頓て腐つてゆくならば夫れが眞の私の身だ。一つの身に立ち添ふ影の一つを、一つのみと見る時に、くづをれてゆく身を何うしやうと爲る依賴も力も考へなくなるのだつた。

何もしずと半日は過ぎてゆくけれど、矢張り人並みに午眠をとるのである。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『すゞき』賣りはもう春と共に町よりゐなくなり金魚賣りも已う古い聲にきけた。珠慾賣が今では最中だ。其生活の苦しみを訴へ歩るく様な珠慾賣りの聲は、物憂い午睡の夢を佗しく呼び醒ます。

家の人は、私の弱い身體の爲めにとて態々冷茶を井戸に吊るして作つて與れるのである。其澁い、爽かな、輕るい刺戟を齎す冷茶は、疑苦しい腦を幾らか明晰にめざめさす。硝子の埃を吸はんとて這ひ歩るく蠅を、小猫は圓るい毛深かな手で拂ひ下す。あゝ、私は何時まで恁うした古い悲しい家に埋もれてゐるのだらう。

二階に上つて見ると、目下には若艸がもえ立つてゐる。緑の色の海の如くに擴がる中に白、水色、卵色、などのばらそるがしとやかに行き交ふ。何となくまだ落ちきらぬ戀のやうだ。

再び私にはさうした麗はしい日が來なからう。何故、私は然ういふもの丶無價値を知るほどに花の息を終りまで吸ひきらなかつたのだらう。總てを知る前にあまりに早く生の眞を視やうとしたのではなからうか。何うでも好い、私には處女の日が戀しい。しやぼんの泡の手觸りのやうな軟かな生命にしくしく泣いてゐた日が戀しい。夢であらうと、幻であらうと夫れが私の總てだから何うしやうとする疑ひもないのである。

慈悲の假面を被た自然は、私共、無智な者に向つては痛いばかり强烈な光りと、古沼の底とを與へて呉れた。

猫の毛を嚙みきる様な總ての活動に乏しい日はやがて午を越して行つた。「晴れてはゐれど梅雨らしい憂愁を含んだ空、これが私の象徵だ」、と言ひ寄越した可懷しい人の指先きを嚙むやうな懶さが、復私の身内へ上つて來た。戀ひ、疑ひ、妬み、此複雜なリヅムは止みがたく心へ刻み込む。努力の後の疲勞、倦怠、夫れにめぐられてぽつとした安心に抱かれる時もあるかと思へば、物の初めの日の如く、處女らしい青々しい刺戟が止み間なく心を叩く事もある。今は丁度其れだ。

何と思つてか、私は昨日買つて來た水色めりんすの机かけを取り出して、新らしく夫れをかけ、出來るだけ本を取り片づけて見た。然ういふ事をしてゐると、奥では母が、

「猫と、金魚と、夫れから何やらと何やらが。私しはえ。」

愍う、姉に言ひ告げてゐる容子だつた。何やらといふものゝ中に、私の身が包んであるらしく、軟らかく、煩らはしい。之れが母のめぐりに在る猫と金魚と私となのであらう。

「枕を下さいましな。」

と私は母に言つて、大きなくゝり枕の上に痛い頭を載せて仰向きに倒れた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『又頭が破れさうかい。』

と母は側へ來て、鬢の根を弛める爲めにピンを拔きなどした。

『赤い顔をしてゐるね。』

と言つて額に手を當てると、

『水枕が好い。』

然う言つて、立つて行つた。其足の裏から、ぷんとした匂が立つた。幼い日を呼び起す樣な母の匂ひ。

『おや、まあ、佳い花を。』

間もなく然う言ふ聲がした、誰人か來た事を思はせたのである。少時くすると、濃紅な夾竹桃の大枝に手紙を添へて友の吉村から使ひに持たせて來たのだつた事を告げて母は笑顔して這入つて來た。此手紙と花は又私しに友の岩丈な人柄と、簡淨な生活とを思ひ起させた。悄れた私の側に此ういふ友のある事を思つて見た。

私が何ういふ花を好むかをも思ふ必要のない吉村は、然うした大きな枝に、太く書いた文字の墨の匂さへ失せぬ樣な手紙を寄來すのである。使を去なせてから、私は友の袖の汚點をなつかしむ樣に、幽かな聲を唸らせ乍ら、ころころ布團の上を轉びまわつた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

眠りも眠りでなくなる、然ういふ苦しみが衝き上つて來る中に、私は少し睡つたと思ふと直ぐ又呼び醒まされた。

輕るい熱氣を含んだ心は病的な私の總てを何うしやう力もない。

「何處かお腹でも痛いの。」

と母はきくので。いゝえと答へると、

「ぢや默言つて寢てゐて、聲を出して泣くやうな事を爲るもんぢやないよ。子供ではないから。」

然う言つて頓て冷めたい飲みものを枕元に置くと、涙に濡れた私の顔にそつと手を觸れた。

母は少しがつかりとした様にして、

「熱がある。」

と言つて立つて行くと、小聲になつて姉と物語つてゐる容子である。私は冷めたい譙讀の上に麻のはんかちふをあてがつてある上に顔をすりつける様にして俯きになつた。

「お醫者さんは自分でゆく方が好いか、呼んで來た方が好い？」

と姉は母と物語つてゐる聲を一段高めて私に對つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『お醫者さんなの。いくら診て貰つたつておんなじですもの。』

辛じて之れだけの事が口に上つた。

病氣となると、直ぐ肋膜の方の患ひに人々の心は移つた。僅かな風邪をも頓て夫れを聯想せしめられるのだつた。私は決して背部の折々ちくちくと痛む樣な事をも洩らしは爲ないのだつた。

『あゝ、手紙が來た。』

慈う姉は言つて、血の深い手を濡らせて臺所から端書を握つて來た。

――小さい頃、小母に習つた笛の手も忘れて了つた。何うかすると思ひ出す追憶の寂しさが反つて心に喰ひ入る――

と端へ持つて來て書いてある。

木屋町の小さき家にて

杉本正生

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

おもふこと

——青鞜同人詠草——

眼を伏せて思へば悲し幻影は牛酪色の渦巻を
かく

薄暗き書齋の卓にキユラソーの瓶とダリヤと
あるが悲しき

吾若き愁ひつゝむに想應しき色を思ひぬ夕暮
の雲

六月の影さす部屋にうたゝねし夢の扉に咲く
鈴蘭の花

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

繪絹透きて燈の灯あはく漂へる夜のなやみに
愁まつはる

岩淵百合

半旗あげて家ごとしづかにすゝりなく聲のき
こゆる街のかなしさ

諒闇の憂くもりて草の家の灯のいろもうちし
めりつゝ

白玉の少女ごころにおそれたるひとゝしもな
し君老ひたまふ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

黒髪をめづるや籠の鈴虫わはがたつごとにさ
わやかに鳴く

矢澤孝

瓦斯の灯に白く光れる玉すだれまくりもあえ
ずしとどふる雨

風の音に起きなをりては親のなき少さき寝息
を秋ふかくきく

綿の花黄なるを好きしふる里の黄昏思ふ髪な
びく野に

北原末

手紙の一ツ ■Bなる男と結婚せんとする女のHなる女に書いた手紙■

捨てた！私が戀をすてたと、あんな祝福された戀を私が進んですてたと仰有るのですか。自分から進んですてた戀としては、餘にあつけなく餘に腹立たしい許で、今迄私が「戀の勝利」と云ふ文字に對照して考へて居た樣に、何時思ひ出しても心地のいゝほこらしい、凱旋の歌を聞く樣な氣持のものでないのはどうしたものでしよう。

今もかうしてあなたに手紙を書きながらも、それがいかにもあなた丈を單にこの手紙のリシーバーとしてゞなく、何だかKに書いてる樣な氣持もしますし、又私の周圍の人達に書いて居る樣な氣もします。それにしても比較的私に近いあなたが二人の間の戀を寧私がオーバカムしたもので有つたと仰有れば、その他の人達には無論さう見へましよう。私がKを離れたのを非常に憤慨して、Kに私を刺して死んでくれと血判をおした勸告狀を送つて、童貞に止ることを契つた美しい青年が有つた相ですが、でもそんな人に限つて女にあつたら、日向に出たくらげの樣でないとは誰も確言が出來ませんもの。

Kが自分の周圍の人達にどんな辯解どんな説明をして居るかは、私の知る限では有りま

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

せん。今度二人の別れたことが知れ渡りますと、今迄二人の仲を隨分攻撃して、二人を同じ樣に惡んで居た人達迄が、急に私丈を疎外視仕出して、少しも眞情を知らしてくれませんから。でも私は私の立場として、Bに對する私の立場として、少くも信賴して居る一人のあなたには一應の事情を説明して置く必要が有り又義務が有ることゝ思ひますから、おうるさくも聞いていたゞかねばなりませぬ。

順序として私共が相知るに至つた事情をお話致しましよう。

もう一昨年になります。その頃大森に入らしつたM氏のお宅で紀元節に大勢が遊んだことがございます。その前から病氣だつたM氏が全快祝を兼ねて、一日若い人達と遊び度から來る樣に、そして比較的女の方が少いから學校の人で來る樣な人が有つたら一所に來る樣にとのことだつたので、私は式がすみますと自分の親しい人を四人程誘つて出かけました。質素な私共の校風ですから、皆縞の着物に袴をつけて居りましたけれ共、羽織丈は申し合せた樣に色も恰ど同じ樣なお納戸の紋附を着て居りました。さつぱりしたなりをした若い女の心は樂しいものです。私共は半藏門から品川迄、品川から大森の間の電車の中を、まるで若木をわたる小鳥の樣に嬉々と、巣をつッつかれた蜂の樣にわけもなくガヤガヤと幸福に騷しく行つたものです。

その日はM氏を中心とした同人と云つた樣な極つて集る顏振はみんな集りました。美術學校から三人、音樂學校から二人に、ずつとどんで齒科醫專のYさんに例の△△女史。それよりも私の注意を引いたのは見慣れない高商の人なのです。淺黑い色の男らしい句の勝つた人で。M氏が簡單に「Kさんです」と云つて紹介してくれました。M氏の佛蘭西語の教師の紹介で來たのだつた相です。

それ丈の人を集めた團體は氣の若いM氏夫婦を加へて、八景園近くのその宅で愉快な一日を送りました。愉快！或はそれよりもつと深いものと幸福なものを意味する agreable——一人が樂しむ處を他も樂しみ、一人が樂しむものを他も樂しむ、云ひ替て見れば藝術、同情、と云つた樣なその團體を貫く糸の樣なものが有つた。皆がそれによつて他に合奏することが出來る場合に丈存在することの出來る情で agreable つて云つた樣な字が當つて居るかも知れませんが、私共の用ゐて居る文字の範圍では矢張りよろこばしい華かな幸福なものを形容するには、「愉快」つて云ふ字が一番よくうつるでしよう。いゝえ、その字によつてがあなたは一番よく私がどんなことを意味するかを御覽になることが出來ると云ふんです。

兎も角その日は前後に久しくなかつた程賑かな日でした。男も女も美しい人も醜い人

も、樂しい人も淋しい人も等しく幸福で有つたことを、も一度たしかめて貰きましよう。そして私共女五人は又一團となつて、どす黑く夕ぐれて行く品川の海を見ながら、各自が捕へた幸福の失せるのをきづかふ様にぢつと沈默勝に歸りました。

云ひ後れました。その日私は三月の廿五日に私共の校舎の敷地購入費の不足を補ふ爲に現在校學生よりなつて居る學友會が主催で開くことになつて居たバザーの切符をもつて來て居りました。そして殆皆の人に一枚づゝ買つてもらひました。勿論Kもその時に買つてくれた一人です。

三月の廿五日！その日の名のある限は私共の命つゞく限は、確にKにも私にも忘らるゝことの出來ない日附です。

私は可成忙しい、希望とアネキザエチーがこんがらがつたうれしい様なたよりない様な幾週を送つて來て居りました。

何にしろ直に卒業仕様とするその時の三年の下から私共の手に入つた許の學友會つて云つた様なものを統御して、バザーと云ふ様なある獨立したものを起して、まとまつた成功を得様とするには、それぐ\責任をもつた者は随分頭もいためます。

恐しい暖かな日和の日でした。これなら上野あたりは直に滿開だらうなどゝ、朝早くから飾り付や仕入れものゝ手入れに忙しく立ちはたらきながらも皆で談らい合つて居りました。

私の受持は接待係でした。一年生と豫科生のうちから選つた十四五人の人達を相手に、七間と八間の體操室を常磐木や廉い花やで飾り付けて、教室の机をよせて白のテーブル掛でごまかしてそれに椅子をあしらつて休憩室にして、お客様の應待や、又便宜を計つたり注意をしたりしてあとで菓子に茶をそへて出すのです。

お客様は八時から入り始めて、十時頃にはもう百人前入の菓子の箱が二十分とたゝないうちにつきる盛況なんです。でもその群集が片付いて終ふと、その日の出盛の絶頂で有つた四時にも一寸間が有つたので皆が一息ついたんです。と二階の賣店から、紅茶室から、植木屋の室から、事務所から、各々が交代で打ち連れて出て來ては、だんごやおすしの賣店に行つて、折をもらつて來ては休憩室に茶を呼ぶんです。暫時は接待するもの、されるもの、水入らずの家族同士で、買物の景況やらお客様の月旦やらペチャクチャ耳も聾する騒なんです。

皆が交代にお辨當をつかつたとは申しましたね。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私は最後迄殘つてたんです。仲のいゝ友達と二人入口に立つてチラホラ見へるお客樣を案內して居ました。恰度二人連の英國の紳士を應接して二階に送り上げてホッとした處に、そこに制服姿のKが來たんです。その佛語の教師と云ふ美しい瑞西人のミセスFと。私共は云ひ知れない親しみを感じながら言葉を交はしました。Kは直に私をミセスFに紹介して、前の稽古日にミセスFも切符を買つて居らしつたのがわかつたから、その日に所に來たと云ふことを私に說明しました。

私は後を友達に賴んで二階に案內しました。ミセスFは英語がよくは話せないのです。それで二人の話はKが通辯してくれました。廊下の裝飾やそれ〴〵の賣店の賣物、皆が日に夜をついで作り出した製作品殊にコマ〳〵した細工物に二人は驚嘆して、專門の學科を勉强する者にどうしてこんな餘裕が有るのかと怪んで居りました。

そして私共の級の賣店で手拭地のテーブルクロスやナプキンやかさね付を着た人形や、いろんな形の袋を買つて、二つの紙包にしてもらつて手ん手に下げて居りました。

そして三人がおすしの折を前にして、思ひ〳〵に箸を割る頃からミセスFは打ちとけて私に學校のこと、敎師のこと、學科のこと、何くれと審問を仕はじめました。そして卅分の後には、スツレンヂャーとして逢つた私共は、十年も交はつたフレンドの樣に手を握つ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て別れました。

翌日は又後の片付に追はれて居りますと「Kさんと仰有る方から電話」と小使が申します、出て見ますと「ミセスFが人形をもう三ッ四ッ欲しいから殘りが有つたらとつておいてくれとのことでしたから」と云ふんです。

それで方々の店に尋ねて見ますと、比較的上等なのが一寸價がいゝので賣れ殘つて居たんです。殘り物だから廉く手放すと云ふので私はそのうちでも顏のいゝのを選つて、大小四ッをその日の歸途に中坂の近くのKの許にとゞけておきました。

それから一寸の間、私共は又と逢ふ望はたえて居る樣に思はれました。

がそれでも七月に入つて、M氏が佛蘭西に立たれる時に、時間が有つたら佛語も少しはやつとけと云ひおかれたのと、ミセスFの美しい人格のなつかしかつたのとに引かれて、私は初步で止めて居た佛語をミセスFに就て又始めました。

それからはミセスFの面會日や茶會に一所によばれたり、方々の展覽會の切符のやりッこしたりしたのにはじまつて、ミセスFをはさんだ相弟子の親密にM氏の人格に對する二

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

人の渇仰もたすけて、私共は互に往來する樣になりました。

Ｋはその頃中坂の近くの叔母さんのうちに居りました。學校の行きかへりや日曜日の午後によく行つたものです。

叔母さんは五十餘の品のいゝ、さつぱりとした性の人で、廿許の女中を相手に醫科大學に通つて居た自分の悴と、Ｋとの世話をして居る人でした。私がその宅に出入しはじめて家族語の一ツ二ツは覺へる頃には女の子のない叔母さんは、もう私のこと迄自分の子の樣に世話して吳れて、暫時しますと私は家内の皆の者に家族の一人の樣に扱はれる樣になりました。祭日やお節句は勿論、叔母さんやＫの從兄の誕生日に迄私はなくてならぬ人の樣に招かれました。

「何故」つて云ふほどの根底もないんです。叔母さんがＫの從兄が別にどうと思つて居たわけはありません。只皆が私の顏さへ見れば悅んで居りました。そしてわけもないことをしやべつたり笑つたり、したものです。一寸の間行かない樣なことなんか有ると「何故來なかつたんです」「あなたが來ないと皆がつまらない〳〵と云ひつゞけるんですよ」そんなに云ふんですもの。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

縁日の好な二人はよく方々の縁日を新聞で探しては出掛けたものです。植木屋の前で鉢物を負けるだらうか負けないだらうかと賭をしたり、あくどいアセチリンのガスにむせびながら絹ハンカチを商ふ商人のＲの馬鹿にひゞく呼び聲に他愛もなく笑つたり、イセイの好い飴屋の若い衆がカタコトトン〳〵と調子をとつて飴を切るのをうつとりとながめたり神樂坂の交番の裏手ではよく書生歌を聞きました。バイオリンに合はして、何かうすつぺらな人生觀を語つたり、甘つたるい戀や安價な憂愁を歌ふのを。戀の甘酒に醉つた二人にはさうしたつまらないものでも面白おかしく思へて、肩と肩とを並べ足と足とを揃へては歩きました。

時には月末に殘つた金を一所にして、芝居や寄席にも行きました。役者ではＫは羽左が大好でかゝる度は大抵は行つて居りましたよ。

十月になつてＫは突然上野の方にうつりましたが叔母さんもＫもそれに就ては何の説明もしてはくれませんでした。でもその後不確ながらも私は私自身がその原因の一部で有ると云ふこと、そしてＫが私が叔母さんのうちに出入することをきらふこともわかつて來ましたので、その後叔母さんには餘りあいませんでした。可愛想に従兄のＣさんはそんなこと

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ゝはちつとも知りませんでした。

でも戀のいろはを綴つて居た二人は樂しかつたのです。二人が目と口と筆と詩とで綴つたその一字々々は直に私共の生命で有り生活でございましたからね。

そのうちに二人の戀――――いゝえそれよりも寧Kが私に對しての愛情を裏書したと私に思はれた時が參りました。

十一月の中頃だつたと思ひます。二人は櫻の朽葉のほろ〳〵と河水に散る江戸川添を歩いて居りました。

穩な晩でした。星は神秘的に豫言的にその氣せわしいまたゝきにまたゝき、僅に枝をならして行く風には重い悲壯な憂愁が含まれてあかりと云ふものに貧しい下蔭には殆ど死に行く人の病床にさゞこほる樣な得も云へぬ寂しみのみちた、しみ〴〵と「秋」と云ふものを具體的にも説明してる、妙に穩な晩でした。

戀の二人の頭はともすればうなだれ勝で、折々暗をついてほこらしゆうも無作法に走り過ぎる電車丈が、僅に私共の眼をあげさせる權威をもつて居た樣です。

と急に方々で半鐘が鳴り出しました。暫時すると矢來の邊と見へる方角の空に魔の王座

の表徴の樣に、火の柱が見えました。

直にポンプが行く、見舞のチョーチンが數かぎりもなくつゞく、自轉車が行く馬が行く、それ丈でなくそれ迄は如何にも落付を得たかの樣に歩ひて居た人達迄が、急に自分達の仲間の人間を苦しめて居る「運命」と云つた樣な一の力に反抗して立つたかの樣に、浮足立てゝ急ぎますの。私共も何時とはなく人浪におされて終點近く迄行つて居りました。

と、突然人浪を打つて居た群集が右往左往に散るんですの。

「放れ馬〳〵」

狹い道に逃げどころを失つた群集は、來らんとする恐しい危險を期待して青ざめた聲で無意識にくりかへしますんです。傳染的な失望、落膽、恐怖にくまどられた、炎にてりかへされて赤黑い顏の群集を見て私は氣をのまれてしまいました。

「危いッ。にげろ〳〵」

私はどうして居たんでしよう。火を見て狂した軍馬の一團が歩調もしどろに近付いた時、矢張りにげ場を求めてウロ〳〵として居りました。

「にげろ〳〵」

とさけぶ群集の聲は徒に私を墓場に送る挽歌の樣に空虛にひゞきました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

不意にどこからかとび出したKが私を力に任せて群集の中につき倒しました。

ハッと思つた瞬間に、その恐しい恐怖の波は通りこして終ひまして、ホッとした群集がお互の平安を目と目とで讀む頃、私は中心を失つたゴムマリの様に、どこをあてどもなく走つて居りました。Kの切に私の名をよぶ聲が聞へますので立ち止つて見ますとどこか人通のない暗い上り坂を登つて居るんです。

「どこへ行くんです？」

Kがかう聞きますの。私は何にも云ひ出す言葉をもたない様な氣がしました。只不意に身體も心もその人に任せて終ひ度い氣分になつて、夢中にKにかけよつて身體をなげかけますと、Kは靜に私を抱きしめました。

その時から私の心は全くKに抱擁されて終ひました。

その冬休みから私は卒業論文にとりかゝらねばなりませんでした。

割合に自由であるべきその學科が、ともすれば教師の思想をこねかへして書かねばならぬのに不滿で居た私は、それ迄一度も眞面目に書いたことがなかつたので、その終りの時に多少は囑望して居てくれた人々の間に、一度失つたグットネームもとりかへしたし、そ

れに一度亡兄の着手したことが有つて多少研究材料も集つて居た强味も有り、旁々私の郷里に住む舊い天主敎徒の歷史に就て、英文でまとめて見樣とかゝりました。

十六世紀に歐洲に漲つた敎爭に出立して、科學の進步に基く冒險事業から、印度航路の發見、それから支那、種子ヶ島を經て平戶に入つた葡人の狀態を多少立證的にかゝつたので、二月が來ても半分位しか捗取りませんでした。

Kもその材料には餘程趣味をもつて、よく仕事の進捗を見に來て吳れまして、調べ物の手傳に方々の圖書館に古本を探し廻つてくれたこともありました。

丁度その論文が出來上つて二三日して、偶然に來あはしたKと二人で、心祝に高等演藝館にかゝつて居た露西亞の俗謠をきゝに行つてその歸途鹽瀨の二階に入りました。

コーヒーを入れてもらつて菓子をたべながら、フッと話が私の卒業後のことになりました。私がその頃計畫して居たことをほこらしく話し出しますとKはそれを打ち消す樣に、

「お止しなさい〱。女がそんなことを仕樣ものならいやに生意氣になつて、人を容れることが出來なくなるものです。止して下さい〱」

つてさう云ひますの。餘り熱心にとめますから可笑しくは思ひながら私はKの意味してることがわかつた樣な氣がして、止めることを約束してその夜は仲よく別れて歸りました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

かうして一の事業つてものを計畫しながら私はKの爲には惜氣もなくすてゝ終ひましたの。戀と事業！かうして二つを對比して見ますと、女にはどうしても戀は絶對の力を持つて居ることをつく〴〵感せずに居られませんでした。それとも私丈が特にそんな傾向をもつて居るのでしようか。

その頃から私は私の心の中に、Kがエンシュラインされて行くのがあり〳〵と見える樣になりました。自分の心に建設されて行く男の姿を魔術で出來て來るものゝ樣に、歡喜と恐怖の混合した驚をもつて見て居りました。

間もなく淺草に二人が奈良丸を聞いての歸途Kが始めてみよしに行かうと云ひ出しました時私は何の躊躇も羞耻もなくついて行きました。かうして多くの準備と形式と社會の認識とをまつてわたるものとばかり考へて居た海を、私はKに倚つてたつた一人のKに導かれて悶も恐怖もなくとびこへて終ひました。かうして二人の間を隔てゝ居た男と女の垣はくづされ、二人は戰慄すべきみよしのうす暗い部屋の空氣でさへも、私共の幸福に備へられてあるのだと思ふ樣になりました。

私共をとりまく惡夢の樣な快樂のうちにも、月はよどみなくめぐつて私は卒業しました。

卒業と現實――その間には運命の容喙を許さない結合が意味されて居ります。富める人も貧しい人も、一所にねむつて居た文字の子供は卒業の聲に起上つて、自分〳〵の實生活を味ふやうに命令されますの。

かうして私の數年の道連は皆起き上りました。そして恰度大洋さして行く人の樣に、或者は家庭に或者は生活の戰場に、或は愛のうれしい抱擁に、或は智識の泉に入らうとしてはともすればふりかへつて最後の一瞥に無量の思をわかして居りました。

盛に喧傳されて居る「智惠の實」が何んなものかゞはつきりと私共の眼に見えましたら恐らくは皆の人々が極に集る磁石の樣に、イブに百倍した刑罰を意としないで、とらうとしたでしよう。「何故」つてそれはそんなに高價に尊く私共の直覺に映りますから。

「さめよ、自覺せよ」「新しい生命を求めよ」と叫ぶ聲は私共を救ふ人の聲でなく、私共を呪ふ人の聲ですね。少くとも嘲る人の聲としかきこへませぬ。その說く處は私共のある者には餘りに不可解に、ある者には餘りに突飛に、或者には非社交的に、そのよる處はあまりに無智にあまりに淺薄なのです。その笑ふべくして賴むべからざるを知つた私のなつか

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

しい道連は、前後左右に救の爲にふりかへりつゝも淋しい「あきらめ」の陰にかくれて、渦卷の底ふかく消えて行きました。その底深く消えて行くのを私は獨り苦しき哀歌と涙とをもつて見送りました。

そのうちに比較的私が迷はなかつたのは事實です。私は愛と自由と覺醒の保護を誓つたKをもつて居りました。二人の幸福は二人以外からは如何に巨大な國家の王權をもつてしても、いかに無盾した天意をもつてしても破壞することの出來ないものとのみ見へました。而し私がより深くその幸福を樂しむのを表はすにつけ、私共——寧私の周圍がシムプルになるにつけて、Kは私の前に暴君の態度を示す樣になりました。一旦私の肉を見て私の貞淑を疑ふ必要のなくなつたKは、一度手に入れた「私」つて云ふものゝ所有に倦いて、私に對しても「女性」に對する因習的な概念をもつてするのが見えて來ました。

これを見それをきく私の耳と眼はおどろき果て、私の平安はそれからきえうせました。そのやるせない避け所を失つた狩り立てられた獸の感ずる樣な不安を私は長くたへることは出來ませぬ。

その日はたしか土曜日でした。私の方から無理にその夜を乞ふて——それが終とはその始めから思はれましたが——二人は牛ヶ淵のうすやみに人をさけては歩きました。下絃の月が中空に淡くかゝつて、雨模様ほいの風はなまぬるく吹き、池には夢みぬ鯉の物狂ほしくはねる音がさえて、鬱倉のうすあかりがほのかに水にうつゝてはゆら〳〵とゆらひで總てが夢の中の様な靜寂の氣分を含んで居りました。私は妙にそゝられる様な涙がとめどもなく流れ、嘗て經驗のない嗚咽が唇をもれるのでした。

何の涙だつたのでしよう？自分でもわかりませぬ。只その夢の様な周圍のうちに自分丈ひとりがさめて……その苦しくさめた瞬間に私にはつきりとしたことを云はせ様として居たその時の決心がその涙をさそつたのでしよう。Kはうろたへて理由をきくんです。私は呪咀、復讐、怨恨のあらゆる文字が頭のうちで出口を求めて爭ふのを感じました。

「私共はどう考へてこんなことになつたんでしよう？あなたは夫婦になる積でこんなことになつたんですか」

「それはさうですよ………」

私はつとめて冷靜な言葉を選びました。

「それぢや今もそう思つてらつしやいますね。私共は一しよになるんですね」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

かうたゝみかけた私の言葉に、あなたはどれほど私がその時にうろたへて居たかゞようくおわかりでしよう。

「さう急に、妙にむきにならなくつてもいゝぢやないか」

Hさん！男は魔物です。獸です。

Hさん！さう云つて男は私を引きよせ樣とするんです。

いゝえ、その時丈でなくKは一旦私を手に入れると何時もその手で私を扱つて居りました。無論その時もその手で私を捕へ樣として居たんです。

「止して下さいッ」

私の聲は可成高うございましたの。近くに聞えて居た低い話の聲々がパッタリたへて、皆が私共の方を見た樣な氣配がしました。

Kは驚いて私の聲を遮らうと手をひろげるのを私は見ました。けれどあふれ流れる河水は王者の手も堰き止めることは出來ませぬ。さめた自我は世に恐れる力を知りませぬ。

「直に御返事を聞くんです。はつきり仰有つて下さい。私共は一しよになるのですか。ならないんですか」

「さう今急に返事と云つたつて……………」

H、これが私がKから終に得た返事です。あなたは何故もう一歩立ち入つて返事をきかなかつたかとおせめにはならないでしようね。人の心を目で、顔でよむ樣にそだてられた私共はどこ迄淋しいものでしよう。

私はKにすてられてBを選びました。理由は簡單です。Kとの關係が始まると散つて終つた私の周圍のうちで、お人好のB丈がウヤムヤのうちに殘つて居たんです。Kによつて男つて云ふものゝ半面を學んだ私にはBを手に入れることはたやすいことだつたんです。

Hさん、男つてものは薄情なもの、嫉妬深いもの、嫉妬の爲には女のために時として生命をすてることもあるものです。これが短い私の今日迄の生涯で得た經驗なのです。例へ狹くともみぢめでも、あはれでも僞のないこれが私の爲には生きた敎訓なのです。理想と現實と道德と本能と宗敎と實生活との間に迷つて、去就を定むることの出來ない、寧許されない社會に居るものには矢張りどんなに小くとも見惡くとも、自分の得た經驗はそれがその人の人生で有り智識で有り根底ではないでしようか。

かうして私の美しいゆめは破られ、男性に對して受身に出て居た私迄が男性の奴隷とならぬ爲、性の滿足な發達をとげる爲に兩性の間にわだかまる永遠の爭鬪に預ることゝなりました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

幸福なBは財産と境遇がつくつてくれる今の位置に滿足して、私さへ外面的に多少幸福に暮せば Goob-natureb daddy として私の多くを望まない生活と墓場の保證はしてくれるでしよう。そして私自身の爲にも、それは最安全な平和な方法でしよう。

Hさん、自分の生活を安全にし、自分の存在を實際ならしむることは人としての私共の義務では有りますまいか。その方法として黴の生へた貞節や情操をすてることはそんなに社會の憎惡の中心となるべきでしようか。そして自分達の仲間の一人が自分達の辿つた道、自分達の是とする道をとらなかつたからと云つて、巣を荒された鳥の樣にガア／＼云ふ丈が人間の同情と云ふものでしようか。

人の世は複雜ですもの、人の心は複雜ですもの。それを自分と違つた道を行くから、異つた周圍に居るからと呪つて居つたら、かの人達の生涯も亦寧日ないものでは有りますまいか。

Kは利口です。Bに走つた私への復讐に且は自分の社會的位置の爲に、相當の辯護も說明もしますでしよう。それに私に代るものが未だ出ないことも一點の利益ですから。

天は世は、地は人は眠つて居るかも知れませぬ。でも少くともあなた丈は淋しい私のためにねむらないで居て下さい。そして此手紙があなたの御手に落ちた時に招かれずに行つ

た客人の様な冷い待遇を味はぬ様、深切な握手と心よりの接吻とを切にお願ひしておきます。

神近市

深草の里より

かへり見て君が心と遠ざかる夕べ〳〵の悲しき思ひ

むしやくしやと心いらだつ此頃はおかしからねど笑ひなどする

あゝ一日夫し見ざれば物足らぬ旅なれし身も淋しかりけり

何と云ふ事はなけれど逢はまほし叱かられつゝもみそばを戀ふ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ともすれば松間をもるゝ月影を戀しき人の魂かとぞ見る

或る時はやる瀬なく身を投げ伏して赤き花など惜しげなく摘む

恍惚と雲にとけ入る魂をわが戀人にわかたましかな

旅にありて戀語らなむわが夫よ裾野あたりは百合花咲くと聞く

狂はずば死ぞや願はむ晝顔の赫熱に生くわれなりしかな

なつかしき人住む國に流れ行く彼の夕雲に心傳へむ

惑亂の胸を抱いて岸に立つ子を襲ふにも似たる波かな

せめてもの思ひを筆に書きやらむこゝろも叶はで呪はれし日よ

翼なくも夢にかけりて相見なむ日毎〳〵に老ひ行くものを

老ゆと云ふ日を食ふ虫の今日も亦わが若かりし頰の血を吸ふ

見えざれどいとおごそかに銀の紐われを結びて引き行く力

夜嵐の吹けば燥立つわが胸の小琴の亂れ戀の亂調

われ住ふ天地弘しおほかたのむなしき心捨て去りあれば

白雨

その小唄

今朝は珍らしく晴れ切つた美くしい天氣です。私は今、四階の展望室に昇つてそして目の前に擴げられてゐる眞靑な海を見てあなたに手紙を書き出した。八つの窓からは毒氣のない、恐れ氣のない凉しい風が吹きにちつて來ます。

眞白い三角帆をかけた船がキラツと太陽に光つて一文字にうづ高い線を殘して行きます。あなたがゐると云ふ房洲の海岸をあてどなく探して見ましたが只靑いばつかりで見當らない、大島が遠くの方に、にぢみ出してゐるばかりです。

きのふの夕方あなたの葉書を見ました。大變面白そうな生活で羨やむでゐます。

漁師町であなたの様に騷いでゐちや隨分いろんな評判もあることでしよう。

そんなことから考へ出すとあなたを獨り手離してやつたことが妙に氣にかゝつて來ます。私は近頃大變あなたについて考へさせられてゐる。なんだかあゝして歸へしたことが氣にかゝつて、只むやみと濟まない樣な可哀想だつた樣で、けれどもあの場合私はどうしたつてあれより出來なかつたのです。あなたはどんなにか私を恨むだか、どんなに私をつまら

見えざれどいとおごそかに銀の紐われを結び
て引き行く力

夜嵐の吹けば燥立つわが胸の小琴の亂れ戀の
亂調

われ住ふ天地弘しおほかたのむなしき心捨て
去りあれば

白雨

その小唄

今朝は珍らしく晴れ切つた美くしい天氣です。私は今、四階の展望室に昇つてそして目の前に擴げられてゐる眞青な海を見てあなたに手紙を書き出した。八つの窓からは毒氣のない、恐れ氣のない涼しい風が吹きにおつて來ます。

眞白い三角帆をかけた船がキラツと太陽に光つて一文字にうづ高い線を殘して行きます。あなたがゐると云ふ房洲の海岸をあてどなく探して見ましたが只青いばつかりで見當らない、大島が遠くの方に、におみ出してゐるばかりです。

きのふの夕方あなたの葉書を見ました。大變面白そうな生活で羨やむでゐます。

漁師町であなたの樣に騷いでゐちや隨分いろんな評判もあることでしよう。

そんなことから考へ出すとあなたを獨り手離してやつたことが妙に氣にかゝつて來ます。私は近頃大變あなたについて考へさせられてゐる。なんだかあゝして歸へしたことが氣にかゝつて、只むやみと濟まない樣な可哀想だつた樣で、けれどもあの場合私はどうしたつてあれより出來なかつたのです。あなたはどんなにか私を恨むだか、どんなに私をつまら

なく考へたか、よく知つてゐました。けれどあの時、私は譬へなんと思はれても差つかへはしないと大膽な生意氣な氣になつたのです。

私はあの時つくづくそう思つたのです。恐らくあなたも私がよもやあれだけ鐵面皮に非常識に出ようとは考へてはゐなかつたでしよう。

又私自身もよくあれだけの場所を押通したと感心してゐました。けれども私はそれだけにまだ充分未練をもつてゐた。あなたに充分未練をもつてゐました。私はあの日が五六日過ぎるとすぐあなたを思ひ出した。考へ出したのです。あなたは何故私があゝした態度をしたと云ふことについて少しでも考へて見たに相違ない。けれどもあなたが私を僞つてゐる以上、私がよもやそれを知つてあゝした調子であなたを歸へしたと云ふことを思ひ出すまい。

私が人並以上我儘で、人並以上馬鹿者だ位ひあなたは知つてくれてる筈です。私が此處に來る前あなたの家には前の夫が來てた筈です。私はそれを聞いて隨分あなたの爲めに又、同じ心配をだまつて前の通りに繰返へしてゐました、そして本當の私の心からあなたを捨てゝ、そしてあなたが本氣になつて眞面目な眞實な幸福と云ふことを考へてくれたならと思つて、それを心で期待してゐました。その男が一日でも長く家にゐればゐるそれだけ

にあなたの氣も落着く事だろうと。私はあなたも知つてる通り不意に此處に送られたものだから、そのこともそのまゝ來てしまつたのです。けれどもあなたについては、それでもまだ心配は有つてゐた筈でした。あなたは近頃全くどうかしてゐます。惡くこぢれかけて來たのです。いつかあなたは私に初枝が可哀いゝこいつたそしてごうにでもして初枝だけは立派に育てゝしまふと私にもあなたの母親にも、又あなたの周圍の人にも誓つてゐた筈です。聞けばあなたは其の初枝を養育院に送らうと計つたそうですね、あなたは、其の時すでに私を捨てゝ、そして私を僞つてしまつたのです。そんな罪の深い無慈悲な言葉があなたの口から出たと云ふことを到底信じることが出來ません。自分獨りの滿足の爲めに、自分獨りのさもしい慾望の爲めに、あなたは、誓つて育てゝ來た子供迄捨てると云ふ、そんな事がよく云へたものですね、よし、あなたはその通り意志を通していよいよ自己の道を採る場合に、その場合になつたつて、決して面白い結果はきたす筈はありません。私はこんな强いことを云ひます、ね悲しそうに云つてゐます、けれども決してあなた一人をとがめてやしない。あなたが周圍に抗いて途を採ると云ふことについて私が第一の原因だと云ふことは信じてゐます、あなたが私を想つてくれるその美くしい熱烈な情を私が何故惜むものですか、惡く考へてゐるものでしよう、私の爲めに、あなたが女優の志願をして

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ゐると云ふことは、恐らく二人より知りはすまい。ね、二人より知つちやいないでしよう。

空想ばつかりで騷いでゐたあの時分の二人には、又それが本當に樂しい面白い愉快な仕事と考へてゐたのでしよう。私は私で、あなたが女優として立つた未來を夢見て、ね、そうでしたね、あなたが舞臺に立つた美くしい姿を夢見て、丁度そうです、今になつて考へるとあの小說にある主人公の樣に、主人公より外なんにも見ない考へて見ないものになつて、それからまるツきり活動寫眞の色彩の樣に、なめやかさの樣に、そんな幼稚なことで隨分長い間面白がつてゐたのです、それがこう、だんだん離れて來た今になツて、はツきり見えて來たものだから、全く不思議より滑稽化されちやツたのです。

あなたも又、私の前途を只、光らせて、飾り終せて見てゐたのに違いはないのです。勿論その時私は自分でも空想ばかりの未來であなたと交つてゐました。それがあなたの爲に第二の悲慘なあなた自身の全く氣付かない、(むしろあなたは幸福と考へてゐるでしよう)悲慘な道を作り上げてゐたのでした。

今、私の周りに一人の女がゐます。それがあなたの上ツらを滑めた樣な極めて面白そうに私を愛してゐる女です、內容もなけや面白味もない。然し私はこの女に依つてあなたを

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

思ひ出す原因を作り出したのです。

この女は非常に氣毒な家庭に束縛されてゐるらしいのです、この間から私に聞いてくれと頼むではゐますが臆病な私には到底それが只で聞いて置くことが出來ないのです、私は、又、不思議な運命を作り出すことの恐ろしさに敬遠主義でやつてゐましたが、それを知つて二三日前の晩髮を又切つたんださうです。

私はそんなことを聞かされる度毎に、身體の血が冷たく、にごつて行く様な氣がします。その晩私は遂に眠らずにあなたが髮を切つた前の夜のことを考へて泣いてしまつたのです今になると、本當らしくあの夜のことが感じられたのです。こうして色々なことを考へて見ると、全くあなた一人を怒つたりなんかするのが氣毒にもなります。

けれどこれも私の發作的の感情なんです。

私は全く今迄發作的にあなたを想つたり、あなたを苦しめたりしてゐました。それに私の幼稚なお伽噺的な氣分が入つて。だから、こうした手紙をかくのもきつとそうかも知れません。

けれども、この手紙をかき出す迄は全く眞面目で考へたり思つたりしてゐました。

私があなたを歸へした後で少なからずあなたを可哀そうに思つたことだけ知つてゐて下さ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

い、あなたが私を僞つてゐることもこの手紙で少しは反省して見て下さい。そしてそれでも私に對してあなたの下さる愛が眞實の愛であるかを最う一度考へて下さい。

私は十月頃には東京に歸へれるだらうと樂しむでゐる。協會の方へはその時一所に行くことを約束して置きましよう。

きのふだつたかM氏からあなたの安否を訪ねて來ました、M氏は歸省も出來ない程多忙で、そして今試演の稽古なんだそうな。

眞面目に考へて、あなたが立派に立てる日を今から待つてゐます。

私は、何處迄も今後あなたを眞面目に見る筈です、あなたの總を私は忠實に考へて行くつもりです、あなたは、私の藝術品の一つなんですもの、今迄の樣に、面白半分にふざけてばかりぢや到底立派なあなたが作り得られない、今日限りあなたは、私に對してもそう考へて置いて下さい。決して私が新らしい「生」に息をしてゐるからぢやないのです。

初枝ちやんのことも、あんな恐ろしい無謀な言葉を出さない樣に本當に可哀がつておやりなさい、もう東京も涼しくなつたでしよう。

だからそこを切上げて歸へつた方が能ゝだらうと思ふ。

私の病氣を心配して下すッて有難う。毎日毎日、よくなつて行きますし、この分ぢやもう

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

死ぬ程のこともないでしよう。九月の末か十月の末には退院が出來るでしよう。私がよくなるにつけあなたの身體を案じてゐる。今度こそ思ひ切つて診察を受けた方がいゝと思ふ。なんにしても早く歸へりたく思ふ。

東京の方は大變だろう。製作のことだけは、どんなに考へても頭から離れてくれないので日に幾度泣きたくなるか知れない。一度退院する迄に歸へつて樣子を見たいと思つてゐる。伯父が最う一双出來上つたとか聞いたもんだから、なんだかお腹がぐずり出して仕樣がない。

今、叔母さんも留守だ。あの裏の畑の西瓜が妙な形にふくれ出したのだ。叔母さんが歸へる迄に食べてしまはうと平さんと話しちや笑つてゐます。近頃の夜は月がいいので船ばツかり出して遊むでゐます。きのふも平さんと二人で上流の方へ出て、ぱちぱち花火を上げて十時頃迄遊むでゐたのです。
カステラがなくなつたので淋しい。安田さんからもらつたセイロンの紅茶を平さんの家へもつてゐつて毎日、飲むでゐる、こんな時に、カステラを思出す。怒つたり、小言いつたり、我儘かいたりして、あなたは、きつと面白くないでしよう、けれど私の氣分がこうなつて行くのだから仕方がないごめんなさい。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

病院の風車がよく廻つてゐます、海の色もいつの間にかすつかり變ッて、紫や青や白で包まれてゐます、江の島も烏帽子も繪の様に浮出して來ました。白い船は、切れ間もなく行通つてゐます、今頃あなたは、海水浴でもしてゐるんでしよう、庄ちやんはどうしました。相變らず騷いでゐるでしよう。別に手紙かきたくないから只よろしくとだけ。海老でも澤山とれたら少し送つてもいいだろうつて。

これから平さんの家に行くのです。

獨歩の家がすぐ傍の松原の中にあるんです、船頭なんかは、肺病患者が死むだ家だといつてよりつかないそうです、それから今だに空家です、平さんが借りて見ようかなんて云つてゐました。房州から歸へつたら一度ゐらつしやい。船に醉はない様に。さよなら。

紅吉

巴里雜詠

ほんにセエヌ川よ、いつ見ても
灰がかりたる淺みどり。
陰影に隱れたうすものか、
泣いた夜明の黑髮か。

いいえ、セエヌ川は泣きませぬ。
橋から覗くわたしこそ、
旅にやつれたわたしこそ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

あれ、じつとにじむ紅玉（ルビー）の涙…………
船にも岸にも灯がともる。
セエヌ川よ、
やつぱりそなたも泣いてゐる。
女ごころのセエヌ川。

空をかき裂く羽の音………
今日も飛行機が漕いで來る。
巴里の上を一すぢに、
モンマルトルへ漕いで來る。

ちよいと望遠鏡をわたしにも……

一人は女です……笑つてる………
あれ、アカシャの枝が邪魔をする…………

何處へ行くのか知らねども、
毎日來れば大空の
青い眺めも淋しかろ。

かき消えて行く飛行機の
夏の日中の羽の音。

知らざりしかな、昨日まで、

わが悲みをわが物と。
あまりに君にかかはりて。

君の笑む目をまのあたり
巴里の旅に見る我の
あはれ何とて淋しきか。

君が心は跳れども、
わが熱かりし火は濡れて、
自ら(みづか)を泣く時きたる。

わが聞く樂はしほたれぬ。

わが見る花はうす白し。
わが執る酒は酢に似たり。
ああ、わが心己む間なく、
東の空にさゞめこし
我子の上に歸りゆく。

與謝野晶子

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

京之助の居睡

京之助が自分の聲の變りかけて來た事に心づいたのは漸くこの程の事であつた。半月はど前あたりから謠のお稽古が妙に苦しくなつたのを感じてはゐたものゝ、それが聲變りの來る前兆とも知らず何心なくすごしてゐるうちに、いつとなく咽喉の底にまくかなんかでも張られたような濁ッた不透明な聲の響き出した時には、非常に驚いた。それと共に何だか心配な氣恥しい不思議な動搖を絶えず感じ始めた。高等科の三年をすましたばかりの彼にも聲帶の變化と云ふ言葉のみは聞き覺えに知つてゐたのであつたが、それが如何なるものと云ふわけの分る筈はないので、却つて物珍らしい興味と不安な心持を呼び起して、内弟子部屋の窓の下に小さい手鏡を持ち出して、熱心に口をゆがめたり舌を壓えつけたりしながら、咽喉の中を窺いて見ようとした。

身體の發達は近頃になつて目につくほどであつた。頭の上から手足まで男性らしい力が見えて來た。すべての部分〳〵に健康らしい肉がついて人形のように柔らかくふくらんでゐた頸筋から頰にかけての輪劃も、强い線に變つて來た。首はまッ直に堅く肥つた。たゞ

二皮目の大きな黒瞳のみは、相變らず愛嬌よく美しく輝いてゐたが、一體の顔だちがきつく引き締まると共に、その黒瞳にも一意地あるらしい張りをもつて來た。裝束でもつけて舞臺に立つと、古い弟子筋の人々の中にも、け押されぬ位ゐ堂々と見えた。

『まあどうでしよう京之助の大きくなりました事。』

『全く早いものですわねえ、もうあの子も幾つでしようね。』

『六位ゐではありませんか知ら、慥か喜多××とおなひ年だと存じてゐますよ。』

『丁度聲變りで又一苦勞いたしますねえ。』

と、定連と云ふような見所の一部分の人々が、こんな話を謠本の蔭で聲低く話しながら彼の舞臺姿を見送る頃には、京之助は全く苦しい壓迫の中にゐた。あの、自由自在に凛ん〱するほど逬ばしり出てゐたあの聲が忽然と涸れつぶれた事を考ふると、魔法にでもかけられたような氣がするのであつた。これまでの京之助は量も柄も調子も申分のない立派な聲の所有者だつたので、謠のお稽古には他の人ほどの苦勞は知らなかつた位であつたから、型の時に苦しんできびしいお師匠樣からなぐりつけられて涙を流す時でも、國元の面倒な叔父の家に小さくなつてかゝつてゐる一人の母親を懷しむ時でも、又は四年前、中學校に這入る代りに此能樂のワキ師の家元に連れて來られた。叔父に對しての根強い不平を思ひ出

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

す時でも、肺臟にありたけの息をふり絞つて、何かしら一番思ふさま謠ひつくす間には、いつとなく晴れ晴れとなつて、何もかも打ち忘れた氣輕い快活な少年の心になるのであつたが、この頃の難澁な發聲にはそれさえも一種の苦痛に變つた。その上

『京之助』

と奥から呼び立てられて

『はい。』

と潔く答えて立つ一言の返事すら、これまでの澄み透つた凉しい調子と違つて野太い荒い聲に變つたのが、恥しくもあり不快でもあつた。なる事なら一言も聲も出し度くない。むつと唇をかみしめて默つてゐ度いほどに考へられるのに、師匠の所置は京之助の願ひとは全く反對に出て來た。型の方を打ち捨てるほどにまで謠の稽古が激しくなつた。それも強吟のもの〳〵と撰んで責め立てるので、俄かに異なつた我と我聲をもて扱ひかねて、思ひよらず調子を外したりすると、嚴然と向ひ合つた師匠の口からは鋭い冷罵が容赦なく飛んだ。舞袴の膝に構えた扇子の一角が。ぴしりと彼の血の上つた頰を掠める事すら珍らしくなかつた。京之助は謠のお稽古でこんな目に合ふ事はたんとなかつたので、一層悲しく、情けなくなつた。

一頃のお稽古は船辨慶であつたが、ワキの詞のうち、別して荒事と云ふ傳のつく
　其上一とせ、渡邊福島をおん討ありし時――
と云ふあたりからの調子が如何しても一段張れなかつた。幾何張ろうとしても〻う聲が涸れて、苦痛の感覺さへなくなつた咽喉の底からは、たゞ火のような荒い息が出るばかりであつた。それでも師匠は猶
『張ッて〻、うんと張つて。』
と云ふより外の言葉は發しなかつた。京之助は二月下旬の氷りつくような板の間に、毎日うす暗いうちから袴の膝を正して大粒な涙を呑み込み〳〵謠ひつゞけたが、或日は殊にきびしくやられた。
『血を吐くまでは嘘ぢや。』
と冷然と云ひきられた時には、部屋に歸るとそのまゝ疊にうつ伏して聲をあげて泣いた。丁度稽古に來てゐた兄弟子の一人が、聲變りの頃の苦しさは誰も一度づゝは味はつた事だ、暫時の間だから我慢しなくちやと親切らしく慰めてくれたけれども、京之助はそれに耳を貸す餘裕もないほどに涙の中に全身を投げ出して泣いた。
　三月四月と世は春になつて行つた。師匠の住宅は市街からは小一里もある、昔のさる落

ちぶれた名家の寮の跡とかなので、廣い庭園や、木立、畑、傾斜面になつた岡と云ふようなものに取りまかれた邸の周圍には、さま〴〵な自然の推移が殘りなく見られた。雪や霜の下にちゞかんで焦げてゐた土は、いつとなく艶のある柔らかな肌になつて、その下からは青いものが一時に芽を吹き出した。芝生、畑、岡の路、悉くがうす青く瑞々とよみ返つて來た。花の咲く木には花が咲いた。匂ひのある草は匂ひを擴げた。太陽は瑠璃色の空とうす白い雲の間とを出で入りしながら、注意深い企てをもつて、黄金色の光と程よい熱とを萬遍なく降らして歩りくと、その度に地上の春は美しい種々な變化を進めた。崖つゞきの裏庭にある古木の八重櫻が、その枝にうす紅色の花をたわ〳〵にむらがらせる頃には、毎年各流の能舞臺はどこも春の番組で賑はふ時節であつた。その櫻に面した十五疊敷ばかりの廣い板の間が此家元の稽古舞臺であつたが、右手の古びた壁の片隅に黒く塗つた長方形の板が一枚かけてある。それは毎月の各舞臺の催能とそれに附き合ふ脇の割當とを書き留めて置く板であつた、時分柄で。

熊野、櫻川、千手、雲林院

と云ふような美しい派手な能柄の名が絶えず書かれてあつた。各月の一定した催能の外に何會の催しとか、某閣僚の企てとかで毎日のように能は續いてゐたりである。京之助は僧脇

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

のワレになつたり、大臣で出たりして師匠と共に方々の舞臺を廻つたが、聲は矢張り少しも立たなかつた。一生懸命になればなるほど、變に掠ずつた聲になるので、同吟の時などは調子をこわすと云つて一緒に謡ふ人々から不興な顔をされるのも、辛らかつた。役によつては師匠からも、

『今日のコレ〳〵の箇所は京之助は謡はぬのだ。』

と差し留められる事もあつた。そんな時右も左もの人々が、腹の中を突き拔けて來たような氣持のいゝ聲をあげてゐる間に交つて、啞のように默つたまゝ舞臺に連なつてゐる自分を考えると妙な心持ちになつた。

『なんだつてこんな事をしてなきやならないんだろう?』

京之助はこんな事まで思ふようになつた。脇座についてシテの働きや舞をぢつと待つてゐる間が馬鹿〳〵しく長く感じられ出した。優長な舞の一手々々がぢれつ度つて〳〵たまらぬように見える事もあつた。以前はこれどこではない。シテは彼の尊敬と美望の的なのであつた。折にふれては

『いつそ能役者にさせられるんならシテ方をさして貰へばよかつた。分らずやの叔父さんだから駄目だなア、脇師なんて全く緣の下の力持ちだもの、詰らない。』

と不平に思ひながら、シテの華麗な裝束や、主人公たる花々しい種々の動作を、脇座から子供らしい羨望の目を輝やかして熱心に見つめてゐたのであつたが、今ではごつちだつておんなじだと云ふ氣がして、何につけてもこれまでの興味や熱心が皆なくなつた。

そんな心持ちの續いてゐるうちに花も散る頃になつた。此時節になると師匠は每年京都の或舞臺に招かれて、その次手に上方の二三ヶ所の舞臺を廻つて來るのが例で、去年、一昨年は京之助もその旅に連れて出られたのだけれども、今年は取り殘される事になつた。同行の弟子たちはその出し物の申合せや支度に急がしかつた。金箔の重い狩衣や差貫や、『飛龍青海波』と云ふような由緒のある貴重な裝束などが取り出されて、丁寧に旅の荷物に作られた。京の助はその中をいろ〳〵な忙しい雜用に追ひ使はれながら、去年一昨年の物珍らしかつた旅が頻りに思ひ出された。上方の美しい山や川の景色、古い都町の夜の赤い燈――。

『ね、祇園の豆板を賴みますよ。』

と京の助は仲のいゝ兄弟子の一人にねだり顏をした。

師匠の一行は出發した。京之助一人になつた內弟子部屋は急にひろ〳〵となつた。師匠

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

が留守の間は來客も少ないので、取次ぎに出たり茶道具を運んだりするような雜用もすつかり省かれて、朝一度庭掃除と玄關の雜巾掛けをすませば一日暇な身體になつた。たま〳〵奥の使ひで本郷あたりまで買物にやられる事もあつたが、それは却つて京の助の樂しみの一つであつた。彼は賑やかな市街の大通りをぶら〳〵しながら、路傍の人だかりに立ちどまつたり、美麗な飾り窓を窺いたり、書物屋の店に這入つて雜誌の口繪をめくつて見たりした。彼は冒險世界の愛讀者であつた。それ故なけなしの小使からもきつと毎月この雜誌一冊は買つて來て、巨腕鐵公とか氷雪無人の黄金境とか云ふ讀みものに少年らしい血を湧かした。けれどもふだんは稽古が忙しいのと師匠がきびしいので、晝間など大びらに讀んでゐるわけには行かなかつたのだけれども、今は全く自由であつた。京の助は戸棚の隅に押し込んであつた古いのまで持ち出して來て内弟子部屋一杯に散らしながら夢中で讀み耽つてゐると、古城の騎士や、鐵塔の勇者や、漂流船の勇敢な水夫や、その他のいろ〳〵な物語の主人公がみんな自分になつてしまつた。その瞬間には兄弟子たちの上方の旅なども う羨やましいものではなかつた。勇氣が勃々として何か豪い破天荒の事がやつて見度い。何かやつて見度い、と云ふ氣が頻りにして、亂雜な愛讀書のまん中に大の字になつて、自由な手足を蹈み延ばしながらいろんな空想を追つてゐると、こんな時高山の絶頂にでも上

つて、何かしら天に突き抜けるほど諂ひぬいたらさぞ愉快だらうと思はれた。そんな事を思ふと又聾の潰ぶれてるのが一層いま〳〵しくなつたが、それでもこんな事を思つたり考へたりせられるだけでも、師匠のいつも澁くよせた白髮の額を見ないだけでも、耳痛い冷罵をきかなくてすむだけでも、非常に愉快で自由で嬉しかつた。

或朝の事、いつもの通り拭き掃除をすました京の助が、口笛を吹きながら低い生垣の前に立つて町はづれの寂びれた往來を眺めてゐるところに、やかましい物音が聞えて幾臺も荷車を連ねた引き越しが來た。畑地を間にした遠くの岡の中腹に暮あたりから手廣い住宅が作られてゐたのは附近のもの丶誰も知つてゐる事であつた。而してそれが何某中將の新築の家だと云ふ事も分つてゐたので、京の助はいよ〳〵今日引き越すのだなど思ひながら眺めてゐると、その數臺の荷車は京の助の家から五六軒先の横町に折れて、百姓屋や植木屋の多い、やつと轍のか丶る位ゐな狹い路を窮屈らしくのろ〳〵と通るのであつた。あたりの女子供もみな門口に立つてその跡を見送りながら、數多い荷物を羨やんだり感心したりしてゐたが、一番京の助の目を引きつけたのは、その荷車が皆横町に隱れてしまつた頃、その跡を追ふようにして、別當の乘つた一頭の逞ましい黑馬が驅けて來るかと見るまに、又一人の別當が白馬に乘りうつて通つた事であつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『あれに中將が乘るんだなァ。』と思つて、その二頭の馬に名高い中將の雄姿を想像しながら京の助は一種の感に打たれた。

その夕方なんとなくその方へ足が向いて新らしい中將邸の岡の方を散歩して見ると、思ひがけもなく岡の裾をめぐる小さい流の中に今朝見た白馬を一頭立たせてそれに乘つてゐた方の別當がそれを洗つてゐるところに出あつた。京の助は珍らしい觀物を見つけたつもりで岸の木蔭に立つてぢつとそれを見てゐた。馬は別當のするなりに大きな身體を任せておとなしくしてゐた。その切れの上つた蔔萄色の深い獸の目には、人間のとても持ちえないようなおつとりした優しさと純潔があつた。高く嘶いて首をふる時、たて髮が薄の穗のように白く戰いだ。其處に、向ふの火藥所に通ずる畑中の一筋の廣い道路を輕いほこりをあげながら、黑馬が此方を目がけてかけて來た。而して白馬を洗つてる前まで駈けつけると馬上の別當はひらりと飛び下りて、白馬の別當と二言三言何か云ひながらぬら〳〵した丸太の段々から馬を水中に引き込みながら、京の助の方をじろ〳〵と見た。目の鋭い若い別當であつた。いつの間にか岸の上には畑から歸り途の百姓や子供等が京之助と共に見物人になつてゐたのであつたが、夕暮れの陰影は空から岡の森から、岸邊に集まつた一團のもの丶上からだん〳〵に濃くなつて來た。流れはうす紫にたそがれかけた。その中に一

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

頭の白馬のみがいよ〳〵浮き出て白く見えた。

その明けの朝、京之助は昨日のあの馬に乘つた中將を見度いと思つて、その時刻と思ふ頃を門口に注意したが想像したような馬上の姿は決して通らなかつた。此の路より外を通る筈はないのだからと思ひながら行くともなく岡の方へ行つて見ると、二人の別當が又のんきらしく二頭の馬を乘り廻して運動さしてゐた。而して黒馬の方の若い別當は京之助の顏を見ると白い歯を見せて馬上にふり返りながら、白馬と轡を並べて火藥所の路を駈けて行つた。熟れかけた麥畑や靑い野菜畑の遠く續いた向うに、赤い煉瓦塀の長く續いてゐるのが火藥所であつた。京之助はどちらの馬が速いだろうと競馬を見るような氣持ちで、二頭の馬を見送つて立つてゐたが、何となしに黒の方が勝てばいゝと思つた。而して先刻の好意のあるらしい若い別當の笑顏を思ひ浮べて見て、ふと、

「あの人がもしかあの馬に乘せてくれないかしら?」

と考へつくと、非常に樂しみな事が足の下に湧き上つたように感じられた。それにしても中將は何故あの馬には乘らないんだろうと不審に思つたりしてゐるうちに、馬は又五月の朝の明るく晴れ渡つた空の下を、赤い煉瓦塀と玉子色の麥畑と靑い野菜畑と、そんな配色の背景(バック)の中から、一目散に駈け戻つた。それから又流れの中に連れ込まれて洗はれた。

二三日、京之助は朝も夕方もこうして馬ばかりを見に出て來た。けれども以前程近よらずに少し遠くから、眺めてゐると云ふ風になつた。それは餘り度重なるのと、黒馬の別當が時々白い齒を見せて微笑するのが、心を見抜かれてるようで極まりが惡かつたからであつたが、或日の朝いつもの通り川下の木の蔭をぶら／＼してゐると、突然

「おうーい。」

と後から聲をかけるものがあつた。何心なくふり返ると例の黒馬の別當が、丁度馬を引つ張つて來て川岸に立つてゐるところで、京之助の顔がそちらを向くと、も一度

「おうーい。」

と呼んで右手をあげてさし招いた。京之助は不意なので一寸と驚いて當惑したけれども、その時急に大膽な氣分になつて

「僕なの？」

と問ひ返しながら五六歩その方に歩みよると、別當は默つたまゝ笑つて領首いて猶手をあげて招いた。その日にやけた長い顔の微笑、その度に見ゆるまつ白い美しい齒は京之助には何んだか譯もなく拒みがたい親しみを與へるのであつた。京之助はまだ深い川べりの草の露に足を濡らしながら急ぎ足になつてやつとその別當と馬の傍まで行きつくと、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「サア來た。」

と別當は滿足げに古い馴染の子供をでも迎えるように云ひながら、

「今日は君を乘せてやるんだ、嬉しいだろう、サア乘つたり。」

と京の助が何か云ふ間も思慮する間もないうちに一寸と肩先を捕へさせておいて、譯もなく馬上に乘せた。

「毎日見に來てるんだからちつとはいける筈だぜ。」

と別當は京の助の一生懸命手綱にしがみついてるような不恰好ななりをお可笑がつて高笑ひをしたが、京の助はそれどころではなかつた。

「大丈夫？　放しちやいけないよ。」

と頼むように云ひながら、半分不安らしく又半分は嬉しさの込みあげて來るような氣持ちで、川岸に添うて靜かに乘り廻はした。別當はその口を取つてやりながら、時々

『はい、どう〱。』

などゝ囃し立てゝ馬上の京の助をも笑はした。

その日から京の助とその氣さくな若い別當とは仲よしになつた。京の助の初めから不審に思つてた中將の馬上の姿の見えないわけも別當から聞いて分つた。中將は暫時病氣をし

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て逗子の別莊に行つてるのだそうである。どうせかうして毎日遊んでるんだから馬が好きなら一つばし乘れるように仕込んでやると約束して別れた時には、京の助は無暗に愉快で口笛を高く鳴らしながら、手足をふつたりはねたり跳るようにして田畝路を歸つて來た。白馬の別當ともすぐ知り合ひになつた。仙さんに德さんと云ふ二人の名前を覺えた。仙さんと云ふ方が親しい黑馬の別當であつた。

『君の名前は何と云ふんだい？』

と仙さんに聞かれた時、

『京の助。』

と返事をすると、

『京の助なんて女義太夫見たいだな君の名は。』

と仙さんが冷やかしたので京の助は思はず赤くなつた。京の助と云ふのはこの流義にある古くからの藝名の一つで實名ではないのである。もしお能役者だなんて云つたら仙さんは何と云ふだろう。京の助は自分から進んで能役者といふものになつたのではない、云はゞ早く父を失なつて後事を托された叔父の、そうした古い藝術に心醉した趣味の犧牲になつたのにすぎなかつたのだけれども、それでも芝居者などゝ一緒にして考へられては不快

だ、と云ふようなその職分のものゝ持つて居る習慣的な堅い自尊心は子供心から浸み込まされてゐるので、なり丈けそんな方の話は云はない事にしてゐた。勿論カスリの筒袖に小倉袴を裾短かにつけた服裝は、仙さんや徳さんの想像する役者と云ふ名のつくものゝ姿ではなかつたのであつた。

京の助は馬に夢中になつた。仙さんは中々筋がいゝと云つてほめた。二人は毎日まつ青に晴れ上る五月の空の下で、一頭の動物を相手に飽くまで自由な快活な日を暮らした。一日、京の助は馬から下りると全身が汗でぐつしよりなつてるので、すつぱだかになつて仙さんの馬を洗つてゐる流れの中に這入つてざあ〳〵まだ冷たい川の水を浴びてゐると、

『その身體で軍人にならないた嘘だ、僕が馬は仕込んでやるから騎兵になり玉い。いゝせ。』

と仙さんは黑びろうどのような馬の肌と、その傍の水に半身をつけてゐるうす桃色した若々しい少年の肉體を見比らべるようにしてゐたが、ふと奇妙なことを云つたので京之助は

『知らないや。』

と反撥的な一語を投げつけたまゝ、大股な足どりでびちや〳〵水を跳ね返して向ふの方へ逃げて行くと、仙さんはその裸體の後姿を見送つてカラ〳〵笑つた。京の助は我知らずま

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つ赤になりながら、

『いやな奴、もう誰が來るもんか。』

と腹立しく云つたが、それでも明けの日になると又出掛けて仙さんのにこ〳〵した顏に向へられた。黑馬もこの頃は彼を見知つたように鼻をすりつけた。併し師匠の歸京の日がだん〳〵近づいて來るに從がつて新らしい不安が感じられ出した。うす暗いものが目の前にもや〳〵ひろがつて行く。

『馬に乘る事が知れたら大變だろうな。』

と思つて京之助は心配した。聲のまだ少しも變化しない事や、その中での辛いお稽古の事もしみ〴〵考えられた。

師匠は終に歸京した。それと共に八疊の內弟子部屋は三人の兄弟子たちに大部分占領せられて、京之助は急にその隅の方に小さくなつてゐなければならなかつた。冒險世界も亦戶棚の中に押し込められてしまつた、兄弟子達がいろ〳〵お旅の思ひ出で話をして打ち興ずる時、京の助は片隅につきほなくぼんやり坐はりながら、仙さんの白い齒の微笑と雄々しい馬の姿とを思ひ浮べて胸を跳らしてゐたが、都合よく岡の方へ足を向けられるような隙は見出せなかつた。けれども二三日たつと辛抱がしきれなくて、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『見つかつたらそれまで。』

と云ふような太い氣分と、出來ない事を强ゐてやつて見度いと云ふ少年らしい好奇心が手傳つて、さも一大事を企てたように感じながら夕飯前の丁度いつもの時刻を計つて飛び出して見たが、川端の木かげにも火藥所の白い一筋路にも馬の影はなかつた。冒險談的の事まで考えて出て來ただけに京之助は非常に失望した。そのまゝ引き返すのは殘念で溜らないので思ひきつて岡の路をだら〳〵上りに中將邸の裏門の前まで行つた。二度ばかり仙さんにつれて行かれた事があるので、其處を這入つて左りに折れた白いペンキ塗りの養鷄所の反對側の屋根が、厩に續いた仙さんと德さんの別當部屋だと云ふ事は、京之助はよく承知してゐたけれども、一人でその裏門をくゞるのが妙に氣がとがめた。こうしてる處にひよつと仙さんが黒馬を引つ張つてくればいゝなアと都合のいゝ事を空想しながら、京之助はすご〳〵と力なく歸つて來た。而しておくれた晩飯を出して貰つてたゞ一人で臺所のうす暗いランプの下でぼつそり食べてゐると、其處に早くから妻を失つた師匠の、奥から臺所向き一切をきり廻してゐるお爲婆さんと云ふ響いた年寄りが、次の茶の間から顔を出して、

「京さん、もうお師匠様がお歸りになつて見れば、お留守の間のようなまねはきつとさせ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ませんよ、よござんすか、約束しますよ。」と粘りつこい口調で宣言するように云つた。京之助は御飯を口に含みながら目をくる〳〵さして呆れたが、

「お爲婆さんは馬の事知つてるんかも知れない。」と思ふと胸がごき〳〵した。お爲婆さんの茶色の落ち着いた目には凝つと茶の間に座つてゐただけで、舞臺の事、お稽古の事、出入りの客の事、內弟子部屋の事、なんでも悉くうつるのであつた。けれども大抵の事はその茶色の目の中にうつしたまゝで知らん顏をして長火鉢の前でたゞすぱ〳〵と長煙管の煙を吐いてゐる。それだけに又その目はえらいものになつてゐた。

以後京之助は一度も岡の方へは足を向けなかつた。それはあながちお爲婆さんの茶色の目が恐ろしいばかりでもないので、久しく休んでゐた太皷と小皷のお稽古に又通ふようになつて、毎日染井の奧から下谷、下谷から麴町と終日驅け廻つてゐたからであつた。その頃、上脇師としての師匠の流義を保護すると云ふような目的で成立してゐる或會の春季の演能が、旅行や何かの爲めに遲れてゐたのを急いで催す事になつたので、その方のお稽古にも又きびしくいゝなめられ出した。稽古場の例の黑い板には、一きわ筆太な朱墨で

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

六月十日　何々會演能、於九段能樂堂

忠度、　隅田川、　調服曾我

と書いて、その下にシテの名と脇の割當てが書いてあつた。京之助は隅田川の旅のツレ男であつた。

此隅田川については、京之助に忘られぬ一つの回想があつた。それは京之助が四年前國元から叔父に連れられて來てまだ幾程も立たない頃の事であつた。家元の邸で或謡會があつてこの隅田川の狂女のシテを師匠が謡つた。弟子たちが大勢地謡の座に並らんでる裾の方に京之助も人並らしく小さい袴の膝に扇子を構えて行儀よく控えてゐると、人商人にさらはれたいとし兒の行衛を尋ねて、都を迷ひ出た哀れな狂女が隅田川の渡し守から悲しいその子供の最後の有様を語り聞かされるあたりから、京之助の目はぽうつとうるんで來て、幾ら我慢をしようとしても涙がほろ〳〵こぼれ出した。初めて膝もとを離れて來たお母さんの事がそれからそれと思ひ出される――狂女のめん〳〵たる悲嘆の歌が痛ましく進むに從つて、京之助はお母さん――お母さん――お母さん――と追ひ縋り度いようななつかしさが胸の底からこみあげて來る。目茶苦茶に涙が出る。手巾も紙も持つてゐないので平手でなすりながら鼻をすゝつてゐると、横にゐた兄弟子の一人がじろりと見て、

『あつちにお出でよ。見つともない。』

と肱でつゝいた。京之助は云はれるまゝに座を立つたが、その瞬間その言葉が、云ひようもなく邪見らしく聞えて、又後から〳〵涙がこみあげて來るのをふり落しながら部屋に驅け込んだ。——而して——

『お母さん——お母さん——、お母さん——。』

と胸の底で遠い故郷の母を呼びながらしやくり上げて泣いた。お爲姿さんは新參の子供弟子に里心のついたのをすぐ氣づいて、二三日それとなく親切にとりあつかつてくれた事も京之助はおぼへてゐる、而して紙にくるんでくれた五つの最中を窓の敷居の上において、その敷居に馬乘りになりながら、うら寂しい氣分で最中を一口食べては又しく〳〵してゐた事などを、隅田川のお能や謠があることよく思出してひとりで恥しがつて見たりした。

今度の隅田川のシテは觀世流での名高い花形で、こう云ふ狂女物や三番物には特別評判のいゝ人である上に、脇の渡し守には師匠がつき合ふと云ふので前々から盛んな取り沙汰があつた。この隅田川の渡し守の語りは有名な脇の三つの語の中の一つであつた。それに比べては旅の男に出る京之助などは何んでもない、たゞ

雲かすみ——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と云ふような平凡な一くさりの道行と、二言三言渡し守との間に問答があるだけだけれども、その一番の能の中に自分も獨立した一役を持つのだと思ふと、珍らしく舞臺に出るのにはづみがついて、苦しい咽喉に氣をあせりながらも熱心に稽古してゐたが、いよ〳〵その日の近づくに從がつて、京之助は非常に忙がしい目を見て暮らすようになつた。その日の能は師匠が中心のようになつて催うすので、それに就いての用事を持つたさま〴〵な人の出入りはふだんの倍にもなつた。その取り次ぎや茶菓の給仕や使ひ歩きや、すべての雜用はみんな一番年若な京之助一人の手に落ちる上に、自働電話一つかけるにも十町近くまで走らなければならぬ不便な土地柄なので、朝から晩まで二十日鼠のように駈け廻つても尙後から〳〵用事に追つかけられた。前の日はおくれて申込みのあつた見物の人々の宅へ觀能切符を配つてまで歩いた。そんな騷ぎの中からやつと六月十日の演能の朝が明けた。

お能は午後四時始めであつたけれど、お晝過ぎからそれまでの間に重な會員の娛樂會が催されるので、師匠は一時頃になるともう支度をして二人の兄弟子をつれて出掛けた。あとの兄弟子も用意した裝束のつゞらを車の前に積んでおひ〳〵に出掛けたが、京之助一人は電車から行くので四時頃までに九段の能舞臺に着けばよかつたのであつた。みんな出拂つた內弟子部屋の中にたゞ一人ぼんやりしながら、この頃から樂しみにしてゐた今宵のお

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

能の事などを考へ出してゐると、京之助は矢張り早く舞臺に行つて見度いような氣が頻りにしだした。それで直ぐに出掛ける事にしてお仕着の袖の長い淺葱紬の紋付に白い襟を重ねて、襞の正しい袴をきちんとつけた。而して堅く締めすぎた紐の中にお扇子を氣にしながら門を出た。

堀割一つ越えた場末の町を市内電車の終點まで行くのには十五分以上もかゝつた。けれども堀割に添うた淺い杉林から、續きの植木畑や茅つ原を拔けて或華族屋敷の白い石垣の横に出ると半分も時間が違ふので、その方向には誰となくつけ初めた足跡でひとりでに小路のようなものが出來てゐた。京之助もよく其處を拔ける一人なので今日も杉林に這入つて何氣なく木立の間越しに青い畑や堀割の底の銀色の線路や、向ふの往來に荷馬車の馬子を相手にしてゐる和布賣りの女などを見るともなく見過ぎていくうちに、終點の方の路から白い砂ぼこりを卷きながら一頭の栗毛馬が駈けて來た。京の助はハッとしたように我ともなく茅つ原の中を駈け出した。

「仙さんだろうか？馬は違ふけれどもなんだかそうらしい、仙さん――。」

と呼んで見てまだ聞えない事の分りきつてゐるのを自分から笑ひ出したりして、だん〳〵大きくなる馬を的にして走りながら石垣の前に出た時にはどちらの目も同時に見つけた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

仙さんは白い齒を見せて馬を飛び下りた。

『今日はどうしたんだい紋附なんか着飾つて。』

と仙さんは不思議さうに又からかふように云つて京の助の違つた姿を眺めた。

『うゝん。』

と京の助はたゞ笑つたゞけで

『この馬どうしたの、僕知らない馬だね。』

と艶やかな褐色の毛の肌に手をふれながら、その大きな目の中を覗いた時、京の助は仙さんと二人でもつた十日餘りの自由な逸樂の世界を又新しく見出したように感じられた。

『君は何んにも知らなかつたんだね。』

と仙さんは温順な馬を前に立たしたまゝ石垣によりかゝつて話し出した。中將邸には若旦那の大尉が名古屋から歸つて此間から竹橋の聯隊に勤めるのだそうで、此乘馬は大尉がつれて來たのだと說明した

『此奴はまたあの黑馬よりかもずつと鈍間(のろま)なのさ。乘つて見な。譯あない、赤ん坊でも乘れる馬だ。』

と仙さんは敷島の袋を腹掛の丼から出してマチをすつた。而して一本の卷煙草を京の助に

くれた。京の助はもう煙草の味も知つてゐた。まつ赤な子供らしい圓い唇に細い吸ひ口を挾んで甘そうに煙を吹きながら、凝つと馬の形を見て見ると、どうしても乘つて見度くなる。鞍や手綱の黑馬についてゐたものなどゝは比較にならぬ程新らしく立派なのにも目がとまる。

『乘つて見度いな。』

と嘆息するように云ふと、

『なぜ乘らないんだ。』

『だつて僕これからほかへ行くんだもの。』

『ぢや仕方がないさ、又遊びに來給ひいつでも乘せるから――どれ。』

と仙さんは吸ひ殼を投げすてゝ石垣から身體を離して歸りそうにしかけた時、京の助はなんだ舞臺には四時までに行けばいゝんだと咄嗟に決心した。

『乘せておくんな、今乘せておくんな。』

と縋りつくように云つた。途行く人は紋附すがたの馬上の美少年と、口をとつた氣さくらしい若い別當が戯れ合ひながら高笑しながら、森の方の途へと駈けて行くのを目をそばだてゝ見返つた。

京之助が息をはづましで九段の能舞臺の樂屋へ駈けつけた時には、一番目の忠度はもう後ジテの出となつてゐた。氣をいらだゝしてゐたらしい兄弟子の一人は、その顏を見ると行きなり、

『何してるんだ京ちやん。』

と鋭く押えつけて怒つたが廣い板の間に陣どつたシテ方や囃子方や狂言師と云ふような所々の群れ〳〵に氣を兼ねるので、高い聲は二言と出せなかつた。京之助もまだ自由な遊戯のたのしさに興奮してゐる氣分で、

『間に合つたんだもの、文句はない。』

と云ふ顏をしてゐたが、もう裝束をつけるばかりにしてゐた師匠が、無言のまゝ凝つと京之助の瞳のまん中を睨みつけた時には、思はず全身が震えて首をたれた。狂言の入間川がすんで『やるまいぞ〳〵〳〵』と大きな聲を上げながら大名や太郎冠者がお幕の中に駈け込んで來た時には、師匠と京之助はもう素袍姿の隅田川の渡し守と旅の男になつてゐた。頓て渡し守は先づ舞臺に出た。脇の名乘りがすむと續いて京之助も橋がゝりにかゝつ

たが

　雲かすみ……

と一段の道行を謠つて渡し守との問答をすまして脇座に落ち着いた時、謠は相變らず思ふようにも行かなかつたのだけれども、今日はそれもさほど氣にならなかつた。さつきの恐怖(こは)かつた師匠の一瞥！あれもこれでもう濟んだのだとなく一安心したような心持ちになりながら控えてゐるうちにお能は靜かに淋しく進行した。木賊色の水衣に狂ひ笹をもつた狂女の姿はもう作り物の墓の前にあつて、空しい我子のまぼろしを追ひながら痛ましく狂ひ、舞つた。地謠の座からは涙と恨みをこめた陰鬱な合唱が絶えず起つて、舞臺は一面うら悲しい陰府(よみ)のような空氣に浸(ひた)されてしまつた。京之助はその中に素袍の胸を張つて脇座にぢつとしてゐたが、この三四日の目の廻るほど忙しかつた明け暮れの上、今し方まで仙さんと共に珍しい馬を森の路や町はづれに驅け廻はして來た疲勞しきつた肉體は、幾日ぶりかで珍らしく休息の時間を見出したと云ふように、うつとりした輕い心持ちに包まれながら、どこからともなく凡ての部分〳〵からうつゝなく眠むりはじめた。獨り氣丈な心が驚ろいて眼を見張ろうとしても、眼はその意に從がふまいとした。耳をすまそうとしても、耳も矢張り眠つたり覺めたりした。その夢とうつゝの間から流れて來るきれ〴〵

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の地謡は、靜かに〳〵遠い故郷の山と野を越えて、むかしのお母様の子守り唄になつて聞えて來た。お母さん〳〵〳〵と作り物の墓の中から子方の幽靈がよぶ。その聲を聞きつけて墓のまわりを狂ひよる狂女の木賊色の水衣の袖。あゝ見える、見える、見える、木賊色のうすい袖が見える。向ふから仙さんの馬が駈けて來た。……危ない、危ない、仙さん其方へ行くと作り物にぶつつかるよ。……川が……川がある……

その瞬間京之助は自分と並んで脇座についてゐる師匠の恐い目も忘れた。舞臺も忘れた。千人の見所の群衆も忘れた。苦しい謡のおけいこも忘れた――地の十數人の人々が腹の底から絞り出す一生懸命な謡の聲も、たゞ彼の耳もとには心持のいゝ子守唄とひゞくばかりで――二重瞼の黒瞳をとき〴〵ぱつちり見開きながら、すぐその後から又眠りつゞけて！

京之助はとうと脇柱によつかゝつたまゝ甘い安らかな眠りに陷つた。

―完―

野上彌生子

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

重子

一

重子が今のK村の小學校に奉職したのは今年の二月からである。B市から二里近くも懸離れた海邊の貧しい漁師村で、宿直の夜なぞは浪の音がザブリ〳〵と枕近く聞えた。失敗に失敗を重ね、轉々の擧句の果が、終に心にも無く此處に落着くことになつた彼女は、然うした寂しい夜々、必ず遠流の人の味はうやうな悲しい心細さを覺えずには居られなかつた。

粗末な角火鉢と、古い一閑張の机の外には何にも無いガランとした宿直室に獨りツクネンと座つて、これまで經て來た不幸な半生を影のやうに思ひ浮べてはゾッとした。

何よりも第一に、自分は世間から日かげ者と呼ばれる、罪惡の間に生れた兒で、表晴れて父とは呼ぶことの出來ぬ他家の主人の袖のかげに、母と二人が肩身の狹い月日を送つた。七歲から土地の小學校へ通はせられて、更に私立の高等女學校を三年まで通はせて貰つた。が中途退學して、ある農家に嫁付いた。一年經つか經たぬに、自分は其處の生活の單調な平和に飽きた。取つて未だ十八の自分は抑へ切れぬ功名心に驅立られて、父母の言葉にま

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

で盾をついて的もなく上京して了つた。

其頃自分の爲めには義理ある姉と其婿とが東京に家を持つてゐたので、まづ其處へ訪ねて行つた。自分の希望をのべて、何處か學校へ通ひたいやうに話すと、姉婿も自分に同情してくれて、兎も角も家に置いてくれて、其上ある特種の私立學校へも入れてくれた。

もと／＼、親の言葉に背いて上京したのだから、父からは學資なぞ一文も送つては貰へなかつた。母は母で、儉約家(しまりや)の父の當がひ扶持に活きて、送りたくも送ることの出來ぬ境遇にあつた。といつて、姉夫婦にも然う／＼は言ひ出し惜かつた。ことに姉夫婦の生活は見てくれればかり好(よ)くて、案外内輪(うちは)は苦しかつたので、氣の弱い自分は何にも言ひ得ずに、いかなる不自由も默つて忍んだ。只生きて居られゝば可いのだといふやうな氣になつた事すらあつた。ある時は學校用具に事を欠き、ある時は授業料の無い爲めに休校するやうな事もあつたが、二年の月日は瞬きする間に過ぎて、自分は今より四年前二十一歳の春、漸と一枚の卒業證書を握つた。が、私立學校の簡易科出では一向權威の無い卒業證書だ。

「これでも歸國の土産にはなる、三年の月日を空費したのでは無い。」と自分は思つた。

「何有、阿父さんも阿母さんも學校の事には暗いのだから……」とも思つた。

歸國して見ると、父は三年前の事を言出して自分を責めた。けれども一枚の卒業證書に

譯もなく怒がとけて、「何處ぞへ勤めるが可い。」と言つた。

「えゝ、けども、私も女子最高の教育を受けて來たんですから、如何に何でも十圓や十五圓の安月給では……。」と自分は見えを張つてゐたが、其癖十圓十五圓の安口も容易には無かつた。自分は只ゴロ〳〵と遊んで母の傍に甘へてゐた――それから全つと三月ばかり。

以前と違つて、此節漸く足遠になつた父が、珍らしくやつて來て、母と色々自分の今後に就いて相談をした。母は婿でも取つてと言つたが、父は其には同意しなかつた。

「折角上の學校も出て來たのだで、二年なり三年なり勤めんぢや何の甲斐も無い。今更碌でもない婿なんぞ取つて普通の女にして了ふ位なら、學問もヘチマも要つたもんぢや無い。」と言つた。自分も、

「私も最う結婚には懲りてゐますし……男なぞといふものは最う〳〵可厭でたまら無いんですから、出來る事なら獨身で通したいと思つてゐますの。本當に阿父さんの仰有る通り、此處で結婚して了ふ位なら、私學問も何も爲なくつて可かつたんです。それでは折角皆さんの仰有る事に背いてまで上京した甲斐が有りませんわ。」と昂奮しながら立派に言ひ切つた。父は我意を得たといふ風に滿足さうに頷いて、

「うむ、流石は重だ。然しまあ口のあるまで向うの家へ行つて食べてゐるが可い、阿母も

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

貧乏なんだで。」と父が言ひ出して、それから自分は暫く父の家に厄介になる事になつた。

父は小い時から自分を非常に可愛がつてくれた。義理ある姉以上に愛してもくれた。けれども律義な父は、自分を妹娘として待遇はしてくれなかつたのみならず、庶子といふ事さへも認めてくれなかつたので、恥しい母の私生兒として登籍されてゐる。

父の家に移つてから半年過ぎた。父は時々自分のゴロ〳〵してゐるのを見て、チク〳〵と厭な事を言つた。が、父の妻といふ人は、何處までも優しい人で、其度父に取做してくれた。自分も物の分らぬ年では無いから、此人の心中も察した。嘗ては自分の母の爲めに夫の愛を二つにされて、其恨も女なら忘れぬ筈である。まして其罪の塊である自分が何で心底から可愛からう。と思ふと、取做されるだけ猶つらく、却ては又、濟まない事だが心と口とに表裏ある厭な人だなどとも思つて見る。一體ならば……此人が當り前の人であるならば、惡ざまにも言ひ做し、辛くも當るべき筈なのに、厭な顔一つせられぬのを可い事にして、アンカンと厄介になつてゐるのは自分に取つては大きな苦痛である。早く何處へか出たい、たとひ十圓が八圓でも……と思ふことは絶えなかつたが、ついした法螺から父の買被り方が案外大きいので、雇ひ教師でもなんでもといふやうな卑しい眞似も出來かねた。有りやうをいへば今更估券を下げたくなかつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

それから二月ほど過ぎて、ある人の周旋で兎も角も郵便局へ勤める事になつた。が、事務には不馴れだし、月給の安いのに直き厭になつて止した。其れからといふもの自分の境遇は色々と代つた。ある時は驛の切符も賣り、ある時は良家の家庭教師にもなつたりした。けれども一つも安んじて身を置く處は得られなかつた。終ひ〳〵には、「女の獨立は不可能だ、伎倆ある男に倚らねば僞だ……」と弱い氣にもなつた。自分が終に諦めて今度の此學校へ赴任する時、シミ〴〵と母が言つた。

「女は獨身なんて到底通せるものぢやない、私が好いお手本だから御覽。初め亭主が死んでから、私は一生獨身と決心して、神樣にまでお誓を立てたのが、何う魔が指したかお前のお父さんとこんな事になつて……私はお前にも申譯が無い。兩親揃つてありながら、お前は日陰者の私生兒と人にいはれにやならんのだもの。お前が若い身で何う獨身が通されよう、そんな事してゐたら、お前も亦私のやうに私生兒でも生むやうな……」自分は其時母の言葉を聞き兼ねて遮つた。

「何ぼ何でも阿母さんも餘りだわ、貴方はそんな私と思つて？」かう言つて母を睨みつけた。

「お前も阿母さんの子だでね。氣をつけておくれ。」母の聲は優しかつた。

お母さんの子だ！然うだ淺ましい阿母さんの子だ！自分は言返してやりたいのをジツと堪へると、如何にも自分の身が情なかつた。呪はしくもあつた。母も氣の毒には氣の毒である。自分は啜り泣きながら突俯して了つた。

重子は此處まで考へて來て戰慄した。

「私は生地から何の希望も持てぬ身だ！」と沁々思つた。今の學校でも自分が一番新參で皆して自分を監視してゞもゐるやうで不快である。いやだ！と言つて、境遇から拗くれたこの心と、年寄りじみたこの貧弱な押出しとでは……と重子は瘠せて兩肩を撫でゝ見て、「駄目だわ、こんな取得の無い厭な人間！」と、然も自ら呪ふやうに獨言ちた。

二

やがて机に向ふと、端書を出して手紙を書きはじめた。御無沙汰のお詫やら何やら書いた次へ、

其後の私は筆にも書かれぬ失意に失意を重ね、二月ほど前、漸く表記の學校に流貶され候。夜々聞く浪の音にもすゞろに遠流の者の心地いたし心細く暮し在候。今一度都に出で一勉强いたし度候へど、其もかなはぬ今の身の上御推察下されたく候。何卒私のやうなる風采揚らず學力不充分の者にても勤めらるゝやうなる氣樂の口も候はゞ御

配慮御願申たく………

こんな事を書いた。宛名は義姉婿の名を書いた。筆を擱いて柱時計を見ると、最う十時だ。寐ようと思つて、押入から夜具を取出してゐる處へ、

「お寐みですか。」と外から聲をかけたのは小使の留作爺さんである。

「いゝえまだ……何か用ですの？」彼女は入口の鑰を外づしながら言つた。

「貴方未だ寐なかつたんですの。」

「俺い、一遍寐ましたゞが、先生の處へ晝間お手紙が來とつたのを忘れとりましたで……それに何だか、今夜茶にでも化かされたか寐つかれんでね、起きて持つて來ましたゞ。」

「然う、明日でも好かつたのにね。」

人の好さゝうな柔和な顔の爺さんである。學校の印の入つた盲縞の半纒を着た。

「火もあるから些とおあたりなさい、夜の寒さは全く別よ。」

「もうこれ、櫻も咲いとりますだに、珍しい寒い年でござりますね。先生も朝お眠からうで……」と爺さんは端書を重子に手渡して、外から戸を引閉てゝ行つた。重子は床へ入つて手紙を讀んだ。それは郷里の父が明日午後に此處へ來るといふ通知であつた。

何時か中は父の家にゴロ〳〵遊んでゐたから、何と言はれても一言もなく閉口してゐた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

が、今度は其れとは違ふ。兎も角も獨立して行つてゐるのだから、面伏せな事は何にも無い。重子は恁う思ふと、如何にも肩身が廣い氣がした。そして獨立といふ事の尊さをもシミジミ感じた。

學校が退けると、重子は銘仙物の新しいのに些と着替へて、父の迎ひに村外れまで出かけた。昨夜書いた手紙も其次手に忘れず投函した。

父は例によつて質素な紬物づくめの身裝に、朴齒の下駄をカチカチ穿いた。毛繻子張の大きな洋傘と、縞セルの合財袋とを持つてゐる。B市から此邊を通ふ古い頬だらけの箱馬車の中から父の姿が現はれると、重子はニッコリしながら二足三足進み出て頭を下げた。

「持ちませう。」と言つて、重子は父の合財袋を自分に持つた。

「端書は着いつらの。」

「えゝ、昨晩拜見しました。態々出掛けて入らしつたんですか。」

「うむ、然うでも無いが、何んな様子かと思つての。」

「さうですか。」

「それに秀さんには、お前がマゴマゴしてゐる中色々心配して貰つた何もあるし……禮も言ひたいと思つての。まづ秀さん所へ行こうか。」

狹い穢い漁師町を二人は話も無く步いて行つた。灰色から薄藍、藍、紫、綠と次第に色こく鮮やかに幾層も重つた遠山が、紺碧の海を隔てた向うに細長く横つた。海は午後の夕日にキラ〳〵光つて、沖には澤山の漁船も見える。秀さんの家は此土地に一軒きりの醫者で、海岸の洲濱に近く小奇麗に構へた。粗末なペンキ塗の門柱に、荒井秀三といふ小さな木の名札が打付けてあつた。

「やあ！」と、二人を迎へた時秀さんは言つた。座敷へ接じて菓子だのビールだのともてなした。父は土產物を出したりなぞして、重子の一方ならず世話になつた禮を述べた。重子は始終俯向いて、二人の話に耳を傾けてゐた。

早めに夕飯を濟ますと、重子父子は海岸へ散步に出た。重子は父の後から步いた。大きなデップリした體格の父に比べて、瘠せて脊の低い重子の姿が常より一層ションボリと見えた。

浪打際に蹲んで、父は古風な烟草入を出して一服はじめた。重子も其傍に蹲んだ。

「あれが私の學校です、此方らのがA崎の試砲所……。」と重子は眼に入る風景を一々說明して父に聞かせた。

海も山も村もウッスリと夕霞がかゝつて、此頃に珍らしく風の無い靜かな夕暮で、如何

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

にも春の海らしい感じがした。

「今度は何うだの？學校の方は。」父が聞いた。

「今度は非常に可いんですの、第一こんな處だから呑氣で……」

「若い者が然う呑氣でも困るて。」父は少しむづかしい顔をして、

「それでは辛抱が出來さうかの。」

「えゝ、私も最う諦めましたから……小學敎員で滿足しやうと思ひますの、幾ら覗いたつて、思ふやうな口はナカ〳〵有りやしないんですもの。呑氣なッてのも、つまり敎員なんていふものは仕事が樂なものですから、つい呑氣にも成るのですわ。私は學校へ入る早々から、最う校長の次といふ地位に押された位ですから、幾らか張合がありますわ。」

彼女は出鱈目にこんな事を言つた。

「ほう、其れは何うしてだい？」と父は訝つた。

「兎に角、皆が出來ない人ばかりなんですから、それに、校長がヅボラなんで、何でも彼でも大抵の事は私に任せて、知らぬ顔してるつていふ風でせう、だから、自然私の方が村の人の受けも好いし、信用も有るんですわ。」

「ふうむ、そんな風かい。其れは何にしても可い事だ。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「其りや貴方、全でお話にならないんですの。校長て人も餘まり出來る人ぢやないんですよ、村の信任も部下の信用も薄いんです。此間も村の青年會から誰か英語の出來る人を一人、會の教師に賴みたいつて、學校へ申込んで來ましたけれど、誰も俺がといふ人が無くて、トウ〱私に押付けて了つたんです。私は女だから厭だつて言つたんですけれど……おまけに漢學までかけもちでね。でも、其方の手當てが好いから……六圓位はくれますよ、えゝ、本給の外に。村からの增金や何や彼で二十五圓位にはなりませう。」

「其れは可いの。それなら半分位は貯蓄が出來るだらう。殘つたら無駄費ひをせずに貯蓄するが可い。」

「えゝ。それは最う出來ます限りは……ですけれど、お金つてものは取る割に殘らない物ですわ。好い方とも交際しなければならないし……此間も視學の方が、貴方だけ立派な學歷があつて、小學校の敎員なんかには勿體ない、貴方も亦それで滿足してる譯でも無からうから、其中又何とか考へませうつて……何れ增俸か榮轉か、何にしても有望には有望なんですの。校長も、貴方なぞは到底も長く奉職してゐる氣は無からうが、此學校の爲め、二三年辛抱して下さい、其中には俸給も上げませうし、無試驗で免狀も下附されるやう盡力しますからつて。何しろ貴方、部下六人の女教師が皆私の言ふことなら校長の言ふ事よ

りも用ゐるんですからね、小學敎師なんか充らんと思ふけれど、でも面白いわ。」
彼女は恁う話して、無識の父を侮り切つてゐたが、ふと氣が着くと、ポッと獨りで赤くなつた。「よくもこんな駄法螺が臆面もなく吹けたものだ！」と自分ながら呆れもした。「だつて、私と阿母さんとは、少しでも此人の心を取らねばならぬ境遇だもの。法螺でも何でも喜ばして歸さなきや……」と心に辯護してから、「何うせ此人の爲めに私生兒なんかに生まれたんだから……初めから廢り物にされたんだから……欺す位の事は罪惡でも何でも無い。」とまで思つたのである。
「一月や二月で、何うしてそんなに信用がついたかの。」父も少し不審さうな口吻に聞いた。
「それは貴方、校長だつてホンの師範出でせう、外の人だつて皆其れ以上の學校を出てはゐないんですから……」
「すると、つまり學問に尾を卷いとるだの。」と父は頷いた。これには彼女も冷汗の外が無かつた。
「私も一二年かうしてゐて、其中には何とか飛躍を試みる積りです。」と六かしい物言ひで彼女は付け足した。極りが惡かつたのであらう。
日は今浪間へ沈まうとする處で、雲も水も一樣の鮮かな血紅色に彩られて、東の方の連山

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は漸く濃い紫色に暮れかけて來た。汀に這ふ白い浪がしらが、滿潮と見えて、足元近くなつた、

「寒くなつて來ましたからソロ〳〵歸りませう。」彼女は父を秀さんの家まで送つておいて、自分は學校へ歸つて行つた。

其晩重子は宵から布團を被つて寢て了つた。「何うせ私は厭な人間だ!」と吐出すやうに口に出して呟いて、構やしない、世間なんざ幾らでも迫害しろ、弱い者を窘めろ、醜い者を虐げろ!重子!名前までが可厭な女だ!干枯びた女!拗くれた女!僞つきの女!

ヒステリックになつた彼女は、布團の衿へ噛付いて激しく啜り上げてゐたが、直きに寢入つて了つた。

―完―

加藤籌

二人の女

甲。 では貴女は思つてさへ呉れる人があれば、死んで見せると御仰るの。うそにも思つてさへ呉れゝば。

乙。 えゝ！ きつと死んで見せてよ。

甲。 良人のある身でそんな事をなすつたら。世の笑ひものになるといふ事を少しもお構ひなさらずに？

乙。 えゝ構ひませんわ、別に悪い事とも思ひませんもの。

甲。 悪い事ともお思ひなさらない？ 人の妻として他の人に身を任せる事が。

乙。 否。あたしは身を任せるとは言ひませんわ。夫は別の問題でせう。

甲。 でも貴女。良人のある身で他の人に心を寄せると言ふのは、兎に角好い事ぢやありませんわね。少なくも私には好い事とは思へませんわ。

乙。 貴女はあたしの考へを取りちがへて入らつしやるのよ。 貴女だつて……まア人の妻云々は別として、もし人に思はれゝば嬉しいと思ふでせう？

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

甲。なんのつけ馬鹿らしい。

乙。少しも馬鹿らしくはありませんわ。例へ人の妻であらうと、人の母であらうと、もし夫が一生の中に只一人の思はる可き人でまた思ふ可き人であると感じた時には如何なすつて？

甲。そんな感じを持つのはつまり不貞だからよ。良人を良人とも思はないからそんな事ばかり思つて入らつしやるのよ。昨日迄も見もしらぬ人が良人になるといふのがそもく不思議の縁ぢやありませんか。夫以上不思議な事に逢ふわけがありませんわ。

乙。そこが私と貴女と大きに違ふ處なのね。あたしには、夫以上の不思議に逢ふ幸福があるのよ。昨日までしらなかつた人が今日の良人。少しも不思議ぢやありませんわ。日本に於て之ほど平凡な事は無いわ。

甲。では、貴女は人の妻、人の母でありながら、もし自分の良人以上自分を愛する人があれば死んで見せられるといふのね。

乙。あゝ、ちよつと。今貴女、あたしの良人以上、あたしを愛するとと御仰つてね。世の中の人はみんなあたしの良人以上、あたしを愛してますから、あたしがどの人の爲にでも死ぬやうにお思ひなすつては困つてよ。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

甲。まアいよ〳〵驚きましたわね。妻としての位置を持たして呉れて、立派に豚かしからぬ生活をさして呉れて、虐待もせぬ、地位の立派な良人を、そんなに塵かあくたのやうに言ふ貴女は妖婦ですわ。

乙。さうかもしれませんわ。けれ共、妻を妻らしくあいしらふといふのが良人の愛と云ふ事は出來なくてよ。妻と言ふものは良人を良人らしく見せる丈の道具ではありませんものね。

甲。貴女のやうに言へばあたしなんかはなんと言ふみぢめな女でせう。十六の時に突然嫁づかせられて、十七から子供を生み通して、まだ三十にもならぬのに十人の子持。さうして、毎日毎日あくせくと子供や良人のぼろとぢくり計りして陸に芝居も見ず、陸に着物も着られず、どんなに貴女から見たら馬鹿らしいでせう。夫でも私は私の良人に何の不滿も持たないのよ。つまりは私が意氣地が無いのでせうか。馬鹿なのでせうか。

乙。目が開かないのよ。なにもあたしは貴女のやうな方に馬鹿らしいとか、意氣地なしであるとか思はせるつもりでこんな事を言ふのぢやありませんの、あたしはあたし、貴女は貴女なんだから。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

甲。けれ共ね。世の中の事はさうは言はないものよ。何か不滿があつたら人に比べて御覧なさい、自分よりも不幸なものがいくらもあるから。

乙。ありがたう。

甲。私のやうなものでもさうでせう。あなたから見れば、馬鹿にも意氣地なしにも見えやうけれども、あたし自身には少しも不平は無いわ。何一つ良人の言ふ事に無理があると思つた事はなし、子供はみんな丈夫に育つし、良人は年々出世するし、自身一人位年が年中ぼろとぢくりをしてたつてなんのと思ひますよ。私位幸福なものは無いと思ひますわ。

乙。さうですとも、貴女はほんとに幸福なんですよ。

甲。けれ共貴女の樣にいふと私は決して幸福ではありませんわ。

乙。さうですかしら。して見るとあたしの目は開いてない譯ね。

甲。つまり貴女は物に絶念といふ事がないのよ。今の身に安んじなければならないと思つて御覧なさい、ね

乙。え、え、安んじて見ませうとも。

甲。今のやうな事はほんの戯談でせう?

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

何か小説かなんぞで讀んだ事をその通りに言つて私を驚かしたのでせう。

乙。さうかもしれませんわ。

甲。ね、だからもう小説なんか讀むのはおよしなさいよ。まして此頃のは陸な事は書いちやありませんわ。不義をしたり心中したりするのは當前だと思つてるんですからね。

乙。當前ぢや無いのでせうか。

甲。まア。貴女は當前と思つて入らつしやるの、恐ろしい事！だからもう小説なんか讀んぢや不可ませんわ。私から、あなたの旦那樣に御注意しませうよ。

乙。えゝどうぞ！ けれども、もう間に合ひませんわ。あたしの心の何處かが空だつた事は昔から空だつたので、何も小説に敎へられた譯ぢやないのよ。

甲。何が空ですつて、

乙。心のある場所が。

甲。つまり不滿があるのでせう、何か？ もしあるなら御仰い。私から、貴女の旦那樣に願つてあげますわ。貴女が斯うしたいと思つてるとかあゝしたいと思つてるとか。

乙。いゝえありがたう、貴女の御家で雨洩りでも直すやうに出來れば好うございますがね。さうはゆきさうもありませんわ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

甲。まア、どうせ私共は古家に住んでゐる古い夫婦ですわ。

乙。いゝえそんな意味で申したのぢやありません。私の雨洩りは人手には直りさうもありませんと申しましたの。

甲。ですから私が……

乙。まア貴女！　あなたは、銀とプラチナとどつちが好いと思つて入らして？

甲。何だつて今そんな事を御仰る？

乙。まア如何思つてゝ

甲。夫やプラチナぢやありませんか。

乙。どんな場合にもプラチナの方が好くて。

甲。當前ぢやありませんか。誰に聞いたつて硝子よりはダイヤモンドの方が好いには違ひありませんわ。好きぐは兎に角としても、好いものは好いに違ひないぢやありませんか。

乙。さう？私には只夫がさう思へない丈なのよ。夫があたしなのよ。

岡田八千代

ある日の午後 ―一幕―

人
小屋の主仙藏
娘おたよ
渡り者銀次
外に村の娘達
旅の男
駐在所の老人

處　田舍

時　十月の末

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

下駄の歯入れや雪踏の直しをしてゐる、仙蔵の小屋の後は、右の方が村の共有林で、林の入口のところは古い墓地のまゝになつてゐる。左の方は小藪で細流が前にある。藪の後と、小屋の前の方とは、ずつと畑地で、其さきが田になつてゐる。仙蔵は小屋の廻りに、すこしばかりの畑をつくつてゐる。

仙蔵はもう六十からの年で、自分では知らないでゐるが、永年の結核が重くなつて瘦衰へてゐる。娘のおたよは十八で、色の白い肥つた、赤い襷と赤い腰巻のよく似合ふ、田舎娘である。銀次はつい先頃まで工夫をしてゐた浮浪者で、廿四五の大きな血色の好い男、金色の義歯を光らせて、につけるの時計のくさりを帯に巻きつけて得意がつてゐる。

銀次とおたよと連立つて來る。

たよ　ぢやあどうしてもゆくの。

銀次　だから先刻つから、さうだと言つてゐるぢやねえか。

たよ　だつてあんまりだもの。

銀次　こんな田舎にいつ迄ゐられるものか。

たよ　でも、私がゐるぢやないか。

銀次　汝より好いのが、横濱にや大勢ゐるんだ。

たよ　私もゆきたいねえ。

銀次　(舌打ちをする)だから來ねえつていつてるぢやねえか。

たよ　行きたいけれど、お金がいるのだらう。

銀次　親父が持つてるだらう。

たよ　くれるものか。

銀次　くれなきやあ、借てもつてゆけよ。

たよ　借るつて、盗るのかい。

銀次　大きな聲だなあ。田舍娘はだから嫌になつちやうんだ。

たよ　仕方がないわ。私だつて横濱へゆきやあ直るだらう。

銀次　そりやあさうよ。本磨きにかけりやあ質が好いんだから。

たよ　ゆかうかしら。

銀次　しつかりきめねえな、何時迄もはなしがつかなきや御免だ。

たよ　だつて家の前ぢや何にも相談が出來やしない。お父さんにきこへると大變だもの。

銀次　嫌だせ、田圃の中ぢやいけねえの、家のそばぢや相談が出來ねえのつて、何時まで

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

もぐづぐづしてゐちやあ。何處までいきやあまさまるんだ。

たよ　いつもの處で。

銀次　だや、さつささしねえな。

仙藏は林の中から枯枝を拾つて出てくるこ、其道へゆきかけた二人は行合つて立すくむ。

仙藏　たよ、もう歸つてきたのか。

たよ　お父さん、私もう明日（あした）つから稻刈りにやあ賴まれていかないよ。

仙藏　なせだ。

たよ　みんなで豐年踊りのはなしばかりしてゐるだもの。

仙藏　そんなら汝（おめへ）もするさ。

たよ　乞食の子なんざ入れてくれるものか。

仙藏きこへぬふりをして小屋の裏へ廻つてゆく。おたよ手招きして、銀次をよび林の方へゆこうとする。

仙藏　たよ、おたよ。

たよ　なんだつてば、おとつさん。

仙藏　今日はもう、何にもするのも嫌になつてしまつたんだ。茶でも入れて飲まうよ、汝燃しつけてくれな。

たよ　今すぐでなくつちやいけないの。

仙藏　すぐにしてくれ。

たよ　チヨッ、嫌になつちやうなあ。

おたよ荒々しく小屋の裏口へ廻る。仙藏は小屋の前の、日あたりへ蓆を敷いて横にならうとする。

銀次　今日(こん)ちやあ。

仙藏　はい、なんぞごようで。

銀次　なに、ちよいと鼻緒を直しておもらひまをしてえんで。やすんでるところを濟みま

せんね。

仙藏　いえ、かまいません直しませう。兩方ですかね。

銀次　さうですね、兩方やつてもらひませう。

仙藏　（もの憂さうに）たよ、おたよ。

たよ　なんだつてば、おとつさん。

仙藏　ちよいと來てくれ。

たよ　今湧(わか)してるよ、すぐだつたら。

仙藏　さうぢやあねえのだよ。まあ好いや自分でするから。

小屋の中から直し道具を持つてきて、鼻緒のゆるみを直す。

仙藏　これぢやかたいかね。

銀次　結構だ。が、ところで小錢(こまつかい)がないが、つりをとるなあ氣の毒だね。

仙藏　いくらのですい。

銀次　五圓札さ。

仙藏　あるかどうだか、ちよいとまつておくんなさい。

小屋の中へはいつて、あつちこつちの箱を取出し、懐からも出して勘定する。それをおたよと銀次は思ひ思ひに覗く。

銀次　おつとあつた、あつた。父さん氣の毒だつたな、あつたよ。そら二十錢。

仙藏の手へ渡す。仙藏はあわてゝ錢をかくす。

仙藏　これでは多いがね。

銀次　とつておきねえ。

銀次さつさとゆきかける。おたよ氣が氣でない樣で、

たよ　銀ちやんてば。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

仙藏　知つた人か。

たよ　いいえ。

銀次知らぬ振りにていつてしまふ。おたよ立つて見送つてゐるうちに、向ふで銀次が振返つた樣子で、手招きをして、仙藏の氣がつかぬように林の中へ指さし示し、そして笑つて頷く。仙藏は日和ぼつこをして居れむりをはじめる。

たよ　お父さん。

仙藏　（首をふる）

たよ　お父さんてば、私はもう一遍いつてくるよ。

仙藏の返事もしないのを見すまして、おたよは忍び足で林の中へゆく。仙藏はすつかり睡入つてしまふ。

銀次に來かかつて、仙藏の眠りこけてゐるのに心附き、林の方へゆかうさしたのをやめ、小屋の中へはいつて、そこらを掻探し大急ぎに出ていつてしまふ。また暫時しておたよ林の中から出てきて、伸上つて向ふをながめ、仙藏の樣子を覗つて一散に銀次のあとを追つ

ていつてしまふ。

仙藏は眠りからさめて、激しくせきあげる。

仙藏　たよ、おたよ、湯でもくれろ。何處へいつてゐるのだ。苦しくつて仕方がねえ、おたよ、おたよ。チヨツ、また居ねえのかなあ、此頃はちつとも尻が落ついてゐやしねえ。困つたものだなあ。

仙藏は這つて小屋の中へゆき、お湯をくんで一口のみ、ほつと息をついて四邊を見廻して驚き小屋の外へ飛出す、

仙藏　大變な事になつたんだ。おたよ、おたよ。早く來てくれろ。おたよ、おたよ。

おたよの名を呼んで叫び廻る。銀次何氣なき風にて來かかる。

銀次　父さん、どうした。

仙藏　うぬ。
銀次　（とられた胸倉を拂つて）なにをしやあがるんだ。
仙藏　この泥棒奴、泥棒奴。
銀次　おい、おい、おい。間違へちやいけねえ。おれは其筋の廻し者なんだ。おめへ何かとられたのか。
仙藏　（くやしさうにじつと見詰め、やがて無言にておじぎをする）
銀次　何かとられたのかつてきくのに、ぐづぐづした爺さんだな。一體どうしたんだ。
仙藏　金をとられました。
銀次　いくらばかりだ。
仙藏　（涙ぐんで）勘定はまだしませんが、百兩ちかくためたので、へい。
銀次　そんなにやあねえだらう。
仙藏　へえ？
銀次　額はあとから屆ける事として、おれは早速其手つゞきをしてやるから、其心得でゐねえ。
仙藏　ありがたうございます。金は今ならすぐ返りませうか。

銀次　さうよな、どに角屆けておかなかつたのが手落だから、罰金さへ納めりやあ、すぐどうにかしてくれるだらう。

仙藏　へえ。盜まれても罰金が入りますのかね。

銀次　屆けねえからよ。お手數をかけるかはりに、たつた五兩納めりや、すつかり知れようつてもんだ。

仙藏　すると、すぐに泥棒はつかまりますかね。

銀次　まあさういつたもんだな。どうするい、よすか。

仙藏　…………。

銀次　署の方から呼出しがくるようだと、罰金も重くなるぜ。

銀次かけ引きをして ゆかうとする。

仙藏　もし、もし、ちよつとお待ちなすつておくんなさい。

銀次　用ですかね。

仙藏　罰金をいくら差上げます。

銀次　さうさね。まあ五圓で好いや。

仙蔵は漸々財袋から取集めて出し、銀次の掌へおく。

仙藏　何分お賴みまをしておきます。

銀次　好いとも、安心してゐる事だ。老人に心配は毒だからな。

仙藏　もう罰金をとられるような事はございますまいか。

銀次　すぐ屆けておきやあ、今のこれだつてとらなかつたのよ。もう二重どりにや來ねへや。

仙藏　有難うございます。

銀次足早に立去る。仙藏は落膽したやうにしやがんでしまふ。やがて小屋の中へはいり箱なとり出して、金の入れてあつた紙包なひろげ、そちこちと勘定なする。そしてとぼとぼと草履な引摺つて出てゆく。入違ひにおたよ驅けもどつてくる。

たよ　よつぽど變だよ、お父さんは此頃どうかしてるんだ。今だつて私がぶつかつて、何

處へゆくのといつても、無言つていつてしまうのだもの。あら、どうしたのだらう。さつきの箱が出しつぱなしになつてゐるよ。

おたよは、こはごは箱のふたをあけ、中の金包みを探す。

たよ　此處から出したのだけれどないわ。どうしたのだらう。屹度見られたかと思つて、入れどころをとりかへたんだらう。けちだねえ。——仕ようがありやあしないや。いやだ。いやだ、もうこんな處にゐるなあ、これつぱかりの間だつて嫌だ。横濱へ行きたいなあ。

がつかりしたように横になる。やがて起上つて、灯をともし、囲爐裏の下を燃しつけはじめる。

仙藏は駐在所の老人につれられてくる。

老人　お前はよつぽど、此頃はどうかしてゐるぞ。強つかりせんといかんよ、醫者にはかかつてゐるのか。

仙藏　つまらないからよしました。

老人　病人が、醫者にかかるのが約らないからよすなんて、そんな無法はいけない。今日のような目に逢ふ事を思へば、好い醫者にかかつて、身體を大事にする方が德だらう。

仙藏　もう金もいりません。

老人　そんなに落膽してはいけない。どうも罰金なんぞとりにくるのが第一をかしいから、こりやあ同一の者かも知れない、何直に分るだらう。心配しないが好い。

仙藏　何ね、とられたらすぐ届けろといふことだから、今度は罰金をとられた事を届けただけで、もう返してもらひたくもありません。

老人　それはいけない。お前が長年苦心をしてためた金だ。お前はよくつても、私の職務から捨てはおけないのだ。

仙藏　有難うございます。それでも考へると私も盜人だからね。

老人　とんでもない事をいつてはいけない。氣をしづめなさい。え、氣をしづめなさい。

仙藏　ほんの事つたよ。全體この小屋のたつてある土地からして盜みものだ。畑を作つてゐるところもさうだ。

老人　何をいふのだなあ。此處はお前、古くつからある無緣の墓地と、細流と、共有林の間の窪地で、蛇窪つていつてお前誰の地面でもない、地割にも書落したほどのところだあな。それを住めるようにしたのなら、矢つ張りお前のものといつて好いのだ。

仙藏　おら、ただもんめの地處へ種をまいて、出來たものは金をとつて賣つてきた。

老人　それは當り前ではないか、骨折りの代價だ。

仙藏　共有林から木を盜んで小屋を建てた。

老人　盜んだのぢやない、自由にとらせたのだよ。お前が此處に住んでゐてくれれば、無代で安心な番人をおいたようなものだ。

仙藏　さきはさう思つてゐても、おれは盜んだのだからな。それにおたよもとつてしまつた。

おたよは吃驚してきいてゐる。

老人　そりやあ拾子だといふぢやないか。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

仙藏　捨てあつたのか、たゞゐたのだか分つたものぢやない。おれが捨子にきめてこつてきてしまつたのだ。

老人　困るなあ、一々さういつてしまつては、どうにだつて理屈はつけられるものだ。

仙藏　（獨言のやうに）それだから、おれを捨ていつてしまうのは當りまへだ。

老人　あれがお前を捨て、何處へゆかうといふのだ。

仙藏　若けえもなあ、若けえもののこころへゆきてえのだらう。

老人　それはいかん、とんでもない事だ。お前の體のよくない事も知つてゐるのだらう。止めさせなさい、とんでもない事だ。

たよ　（飛出してくる）いゝえ、いゝえ、私はいくつていやしません。お父さんにも行かないかつていつてるのでございます。

老人　さうだらう。どうも此頃父親は變だぞ、氣をつけてやらなきやいけない。

たよ　なんだか考へてばかりゐるのでございます。屹度病氣のせいなんでせう。

老人　お前が孝行にしてやらなきやあいけない。

たよ　お歸りでございますか。

老人　それから金をとられた事を、あんまり人に言ひふらさぬ方が好いぞ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たよ　え、お金をとられたのでございますか？　お父さんが。
老人　さうだよ。お前知らないのか。
たよ　ちつとも。いくらばかりなのでございます。
老人　おれもそれは好く知らないのだ。兎に角な、それでよけいに落膽してゐるようだから、大事にしてやんなさい。
たよ　畜生、まあ誰がとつたのだらう。先刻まであつたのに。たしかにあつたのに、口惜しいね。
老人　お前までさう無中になつてしまつちやいけない。あれを見なさい、可愛さうに仙藏は、げつそりとしてしまつてゐる。力をつけてな、また明日からよく働くようにしなさい。
たよ　だつて、そりやあ無理です。お父さんがどんな思ひをしてためた金だとお思ひなさいます。
老人　それは知つてゐる。
たよ　私にだつて見せないのです、
老人　さうだらうとも。兎も角も、なるたけ早く知れるように、盡力させようから慰めて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

やんなさいよ。ところでわしは嫁にたのまれてきたのだ、唐茄子があるなら一個わけてほしいな。

たよ わたしが後から届けませう。

老人 いや、それは態々手數だ、わしがさげてゆきます。いくらだね。

たよ おこつさん。

仙藏 ………。

老人 仙藏さん、いくらあげるね。

仙藏 ………。

たよ おこつさん、どうするの。

仙藏 いらない。

老人 それはいけない、代價はおいてゆく。

たよ 今わかりませんから、便次に頂きにゆきますから。

老人 さうか、それぢやさうしてもらはう。ぢや氣をつけてやんなさい。

老人唐茄子をさげて立歸る。おたよは仙藏の落膽してゐる樣子を見詰めてゐる。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たよ　お父さん、お前金をとられて、そんなにがつかりしたかい。
仙藏　（首を振る）
たよ　だつて、まるで生てるようぢやないもの、心配になつてしようがない。
仙藏　心配する事はない。おれはもう何もかも用のないような氣がするだけだ。
たよ　なにもかもつて、どうなの。
仙藏　生てゐるのもよ、其外の事の何もかもだ。
たよ　お金をとられてしまつたからかい。だから一所に賑やかなところへ引越そうつて、此間からいつてるのに。あたいの言ふことをきけば、お金もとられなかつたのだよ。
仙藏　金はとられなくつても、あれんばかりではの、一月もたゝないうらに、親子でそれこそほんとの乞食になつてしまう。
たよ　噓ばつかりいつてら。お父さんどつさり溜てゐるくせに、箱の中のをとられても、まだ財袋にもつてゐるのだらう。
仙藏　ほしければ此金はお前にやる。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たよ　あたしにくれるつて？　嘘だ、嘘だ。お父さんはみんな私にかくしてゐるもの、拾子つてほんとなの。

仙藏　…………

たよ　ねえお父さん。もうこんな處にゐるのは嫌だらう。だから横濱かどつか、賑かな場處(ところ)へゆかうよ。さうすれば私のお母さんにも逢へるかもしれないから、それとも此處へ尋ねてくるだらうかしら。

仙藏　汝が尋ねてゆきねえ。

たよ　でも、お金もなんにもないもの。

仙藏　あんな野郎に連出されるよりましだから、行くんなら殘りはやる。

たよ　お父さんはどうするの。

仙藏　おれか。おれはな、駐在所の隱居が、蛇が窪は仙藏の所有地だといつたから嘘ぢやなからう、此處をいつまでも動くめへよ。

たよ　お父さん、淋しいかい。

仙藏　淋しかねえよ。

たよ　金もなくなるし、私もゐなくなつちやつたらば。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

仙藏　生てゐりやあ淋しいかも知れねえがな、いつまでゐるものかよ。

たよ　おとつさん。

仙藏　なんだ。

たよ　私をどうして育てたい。

仙藏　育てやしねえよ。かぼちやが大きくなるように、一人でにそんなになつたのだ。

たよ　お金と私とどつちが大切だつたい。

仙藏　さうよなあ。（考へる）おら汝にも濟まねえなあ。金にも濟まねえや。金はおらの手をはなれて、やつと世の中の光りにあつたのだなあ。汝も早くゆきねえ、もう立派な一人立の出來る人間にやなつてゐるからな。

たよ　嫌だよ。あたいはもうすつかりやめにした。いつまでもお父さんと此處にゐるよ。お父さんが可哀さうになつたもの。

仙藏　………。

たよ　おとつさん、御飯をたべないかい。

仙藏　（首をふる）

たよ　嫌なのかい。ぢやあとでおたべよ、たべないと毒だからね。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

仙薮　（頷く）

たよ　ぢや私だけたべてしまはう。――ねえお父さん、だれが金を盗んだと思ふの、私はたしかにあいつぢやないかと思ふのだけれど……。だつて、あの時お貼錢をとらうとして見てゐたもの、たしかに違ひないよ、銀ちやんに違ひない。

おたよはふつと氣がついて口をつぐむ、もぢもぢとたべおわると、茶椀をおいて、また考へはじめる。

たよ　あん畜生、金をとつてくりやあ横濱へつれてつてやるなんていつておいて、自分一人でとると、どつかへ逃げてしまやあがつた。私はどうしたら好いだらう。お父さんが可哀さうでしようがありやあしない。御飯もたべないで寐てしまつてるんだもの。あゝゝ、約らないなあ。

鍋をぶらさげて外へ出で、細流の方へすたすたゆきかける。旅の男飯のかげから手招きをする。

旅の男　姐さん、ちよいと、ちよいと。
たよ　ゐたしですか。
旅の男　他からちよいときいたのですがね、貴女ですかい、横濱の方へゆきたいつていふのは。
たよ　ゐたしやもうよしましたよ。
旅の男　なぜなんです、をしいぢやありませんか。
たよ　お父さんが、お金をとられてしまつたから。
旅の男　そりやあお氣の毒ですね。どうですものは御相談ですが、とられた丈のお金を貰女がこしらへて、お父さんにやつちやどうです。悅ぶでせうよ。
たよ　そんな事出來やしません。
旅の男　出來ますよ、この娘さんたちもみんなさうする筈なんです。ねえ姐さん達。

同じように皺から顏たけ出してゐた村の娘達は、おなじように頷く。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たよ　どうするとさうなるのだか、お父さんが承知するかどうだか。

旅の男　此處ぢや何しろ、なんにも咄しが出來やしません。彼處迄ちよいとお出なさい。さうすればよく得心のゆくようにはなしてあげませう。

たよ　すぐなんですか。

旅の男　すぐにも何にも、ぞうさない事さ。恐い事つちやないんですよ。

たよ　ぢや、そつちから出てまつてゝ下さい。廻つてゆきますから。

おたよは鍋を細流につけておいて、急いで籔を廻つてゆく。

仙藏はぼつねんと思ひに沈んでゐたが、小さな洋燈の心を搔上げて、懷からたした財袋の中の金を數へ、門口へつるしておいて、げつそりと疲れた背をむけて、とぼとぼと林の奥へはいつていつてしまふ。暫くしておたよ、息せききつて歸つてきて小屋の前へくると何氣ない風をする。

たよ　ほんとに馬鹿にしてゐる。女だと思つてあんまり馬鹿にすらあ。だれがくそ支那なんかへゆくものか。だまされてたまるものか、ねえお父さん、お父さんにお金をあげようと思つて、隨分馬鹿にされちやつた。……あら、なんだらう。

財袋に手をかけ、急に不安になつて家の入をのぞきこむ。

たよ　お父さん、お父さん。ゐないのかい。お父さんてば、返事をしておくれよう。ごうしたんだらう。お父さん、お父さん。――お父さん――お父さん。

おたよ林の中へ呼ながらはいつてゆく。其聲がだんだん遠くなる。

――幕――

長谷川時雨

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

新しく世に出たチエホフの書簡

チエホフの友人、シチエグロフ、レオンチエフは千八百八十九年から、千八百九十年までの間、即ちチエホフが樺太へ旅行した前後の書簡や、端書を彼は寶物のやうに大切にして、これを皆製本して藏つて置いた。今此處に掲載た書簡は其の一つで、チエホフの道德思想の自白や、又此の手紙によつて、如何に彼の高い人格と、純潔な、正直な、打明な、親切な人間なるかを明かに知ることが出來ると思ふ。

三月廿二日

愛するジヤン君、御機嫌よう。長いお手紙と、御親切な御注意とを誠に有難う。君の軍事物語は拜讀するのを樂んでゐます。これはパス八號に掲載されるのですか？　僕はもう暫く君の作物も、僕自身のも讀まないのです。

御手紙によれば、君は僕を相手取り、思ふさま激論を試みんとされてゐる『特に倫理的問題と、藝術的問題とについて。』而して君は何か曖昧に、僕が友誼上の苦諫をまで要する犯罪のあるもの〻やうに書いた。猶其上『有力な新聞の批評』云々を以て僕を威嚇した。僕は思ふが、若し君の文にして『藝術』と云ふ言を削つたならば、一層此の括弧の中に置かれた文句の意味が明瞭となるだらうと。然れども正直に云へば、これは尠からず僕を當惑

せしめた意味に當るものです。ジャン君、一體奈何云ふことなのですか？ 何と解したらよいのですか？

倫理のことの觀念について、僕は君方のやうな人等と意見が齟齬するのでせうか、のみならず其れが爲に、苦諫を受けるやうな、或は『有力な新聞の批評』の特別な注意を自分に向けしめるまでに至つて居るのでせうか？ 君が何やら難しい、高尙な倫理を考へてゐると云ふことは、僕には了解が出來ない。如何となれば倫理には低い倫理もなし、高い倫理もなし、中位の倫理もない。倫理はたゞ一つあるのみです、其れは即ちその昔、我々にイ、ス、●ハリストスを與へた所のもの、而して今我々―僕にも、君にも、バランツヱキチスにも、盗んだり、辱めたり、僞つたりなどすることを許さない所のものが即ちそれなのです。

僕は僕の一生涯、若し僕の良心の安んじてゐる所を正しいとして云ふならば、言を以ても、行を以ても、思を以ても、話をする時とも、戲謔る時とも、自分の隣の妻、又その僕、又其總ての家畜をも欲しがつたことはなかつた。盗もしなかつた、僞善も爲なかつた、道樂も爲なかつた、有力家に諂つたり、强請つたりも爲なかつた、又人の脛も嚙らなかつた。勿論怠つて生命を費したり、狂笑したり、飲食を謹まなかつたり、或は淫慾に耽つたりした。然しれこらは皆個人的のことで、これらは皆僕に倫理上に關して十(プラス)を以ても一(ミニス)を以ても、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

普通の人々の行く軌道から拔け出して居るのでないと考へる所の權利を、僕は失はない。勳功もなければ、卑劣な行もない、多數の人間と同じです。罪は多いが、倫理に對しては我々は帳消しとなつてゐるのです。何となれば此等の罪の爲に、其の結果として生ずる不便を始終身に着て、罪の勘定を支拂つてゐます。若し君は僕を酷く罵倒しやうと望むなら、僕は其相手になる程の豪傑ではないから、君の激語を窓の外に棄て給へ、而して君の罵詈を、君が愛すべき悲観的の微笑に換へ給へ、其の方が遙に增しだらう。

だが『藝術的』と云ふ言は、僕は商人の妻が「地獄の火」と云ふ言を恐れるやうに恐れてゐます。人が僕に藝術的だとか、非藝術的だとか、舞臺に適してゐるとか、適さんとか、主義だとか、寫實だとか、種々なことを云はれる時には、僕は全く自ら茫然自失して了ふ。而して僕は曖昧に紛かして置く。而して每度極りの三文の値もない半眞理を以て答へて置く。僕は總して作物は二種に區別する、卽ち氣に入る所のものと、入らぬものと、其他には標準を有つてゐない。例へば今君が、何故にシエクスピヤが氣に入つて、ズラトウラトスキイが氣に入らないかと問ふとも、僕はこれに對して答は出來ん。或は他日僕がもつと利口なものになつたらば、其時に標準と云ふものを見附るかも知れん。然しながら僕は此の『藝術的』と云ふ談話程自分をよく疲らせるものはないと思ふ。これは丁度僕には、中

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

世時代に人々が自ら自分を疲らしてゐた所の煩瑣哲學の談話の綴のやうに思はれる。

若し君が其權威を頻りに云々してゐる批評が、僕や、君の知らない所を知つてゐるとしたならば、何故に今日まで默してゐるのか？　何故に眞理と、動すべからざる理法とを我々に示さないのか？　若し批評が之を知つてゐるものとするならば、僕は云ふが、もう疾うに我々に道を示した譯である。而して我々は自分のなすべきことを知る筈です。さうしたならばホハーノフなどが瘋癲病院に入つてるやうなことも無かつたらうし、ガルシンなんぞも今日までも猶生きてゐたらうし、バランツェヰチなんぞも無暗と悲觀をしなかつたらうし、我々も這麼に今日のやうに傍んだり、寂しがつたりすることはなかつたらうし、君が芝居に行きたがつたり、僕が樺太へ行きたがつたりすることも無かつたでせう。所がです、この批評は何も示さないで、唯傲然と默してゐる、さうでなければ徒に空言空語を放つてお茶を濁してゐる。然も這麼批評が君に其れでも有力なものゝやうに事實見えるのは、たゞこの譯ばかりでせう、馬鹿な批評だから謙遜でない、鐵面皮で聲ばかり高い、空樽だから自然音がよく出る。

けれどもまあ、這麼ことはもう止しませう。他のオペラを歌ひませう。どうか僕の樺太旅行については、文學上には、大した希望を有たないで下さい。僕は觀察の爲でもなけりや、

印象の爲でもないので、詰り單に今日まで生活してゐたやうでなく、半年ばかり別な生活をして見やうと云ふのみです。大兄何卒僕に嘴を挾さんで下さい、若も果取つて何事か爲し得たならば結構、だが爲し得ぬとても僕を責めないで下さい。

切に君の健全と平康とを祈る　頓首

チエホフ

愛すべき髭の

二等大尉　殿

貴下

瀬沼夏葉

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

女醫の話

私達の話題が、いつか妊娠といふことの上に渡つて行つた時に、そのうちの一人の、女醫のA氏は、黑い袴の紐に絡んだ鎖を手繰つて、巧みな手付きで時間を見ながら（例の左で）次のやうなことを話し出した——。

女を診察するには、どんな場合にでも妊娠と云ふことを頭に置いてかゝらなければいけない——とはよく私達が生徒時代に敎しへられた言葉でした。誰しもまさかと思ふ、そのまさかゝ時々背負ひ投げを喰はせますからね。處女でございますなんて、口先きの例證を信じる程醫者はお人好しぢやないんですよホヽヽ。實驗がだん〲お人好しぢやなくなしてしまふんですもの。まさかの裏切り初めは、まだ私が學校に居ました時分です。或日のクリニックに、寄宿舍に出入りをして居る洗濯婆さんの娘が——一寸綺麗な顏をしてましたよ——どつかのお邸に奉公をしてるとかいひましたが、乳が腫れたといつてお婆さんが非常に心配をして診て頂きたいと云ふんす。丁度S先生のクリニックの時でした。先生は

さすがに躊躇して居る娘をさし招いて、お婆さんが脇からくど〳〵容態を云ふのをフム〳〵聞いてましたつけ、ふと口髭のあたりに輕るい微笑が泛んだと思ふと、周圍をふりかへつて Schwanger Schaft! つていふんです。ぐるりの眼といふ眼はみんな見合して、みんな意外といふやうな顏をしました。獨逸語で妊娠といふことだつたのです。お婆さんはそんなことは知るよしもありませんから、さも心配さうに先生に聞いて居ます。先生つたらまた意地惡るさうににや〳〵しながら、なアにお母さん、ちつとも心配することはないよ。藥も何も要らない、濕布でもして置きあ癒つちまあつて云ふんでせう。ぐるりの低いところから高いところから、たくさんな女の眼が自分一人に注いでるので、それもきつと或る憎惡と蔑みとが感じられたのでせう、(――A氏は玆に嫉妬といふ言葉を入れるのを忘れた――)娘はやがて耳を赤くしてしく〳〵と泣き出しました。するとお婆さんはまた、娘の背中を撫でないばかりに、此娘は昔から氣が弱いものですから……なんだか氣の毒になりましてね、笑ふには笑はれず、つく〴〵娘の顏が見られましたよ。まあだ十八ばかりの何にも知らないやうな顏をしてましたつけのに。

それから私が實地の試驗準備の爲めにW先生の醫局に居た時のことです。或晩患者の家からW先生を迎へに來ました。生憎先生は往診に出て居て不在でしたから、さう言つてか

へしてやると、追付けまた使ひが來て、何誰でもいゝから來て呉れと云ふのです。其晩醫局には私と同期生のHさんとだけでしたが、Hさんの都合も惡るくて私が行くことになりました。患者と云ふのは或る軍人の未亡人で、相當な地位にあつた人でした。いづれ婦人科の方には違ひありませんが、その滓りものゝ中に小さな塊りがあるんです、それがどうても何だか判斷がつかなかつたので、懷紙に包んで持ちかへりました。やがてお歸りになつた先生に見せると、どうでせう、それは流產だつたのです。あの時はW先生もお驚きなさいましたよ、まさかと思つてたのにねえつて。——私も成程と思ひましたね、女を診察するには如何な場合にでも妊娠といふことを念頭に置かなければいけない——こんなことを言つたら純潔な貴女方は侮辱されるやうにお思ひでせうけれど、私はもう女に依つて女を侮辱されるに馴れました。聽診器を握つたら病源を知つて、適當な藥を調合すれば私の任務は了るのですからね、患者の境遇を忖度したり、一々如何はしい病氣に腹を立てるやうな馬鹿はしません。それでも靑い顏をして肩で息をしながら、產褥に居るうちに夫と別れたのだから、妊娠する筈はありませんなどゝ言はれると、だつてもそれ、現在お腹の中にピク〳〵動いてるぢやありませんか！と少しは强く言ひたくなりますね。え、そんなのが一度來ましたよ、自分ぢや服諦のつもりで居たらしいんです。さう〳〵、是は學生時代

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

にS先生が話したことでしたが、某官吏の夫人がお產をして、一週間目に夫は臺灣に赴任したそうです、すると夫人の肥立がよくなつて來ると同時に、だん〳〵お腹が大きくなつて來たので、親戚の者が氣付いて大騷ぎをやつた揚句、事の次第を報じてやると、間もなく夫からは『心配するな』といふ電報が來たさうです。此話を聞いた時分には、私も奇蹟を聞くやうな氣がしましたつけ。自然といふものは時々皮肉な惡戲をやるものですよ。云々

私はたゞA氏の話をのべたゞけにとゞめよう。これらの話に徒らに眉を顰める人と、或る儚さを汲み得る人とは、その各々の境遇に伴ふ心持ちに依つて別れるであらうと思ふから。

完

水野仙子

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お使ひの歸つた後

この頃、私の眼のまはりは始終ちか〳〵してゐる。まるで瞼の底の方で小さな豆粒のやうな炎が消えたり燃えたりしてゐるやうである。

私は八の字ばかりよせてゐる。眉の間へ八の字をこしらへると、額からこめかみへかけての筋肉が引つ張られて緊張して快い心持だからである。

ぢつとしてゐると、時々私の呼吸は詰まつてくる、私は切なくなつて中間に眼を据へる事が日に幾度あるか知れない。鏡を見てゐて、あんまり私の眼が私を見詰めるので私はこわくなつて、立上つて、死にさうにあは〳〵胸を騷がせたり私の魂が何所かへ行つてしまつて、私の身體だけがぽかんとして壁に寄つかゝつてゐるのに氣が付いて、私は私の魂が何所へ行つてしまつたのかと思つて、方々をきよろ〳〵見廻して探したりするやうな事もある。

外を歩いてゐると、あの空がいまにも石棺の蓋のやうにぴたりと落ちかゝつて來さうで、何うしても肩が縮まつてしまつて仰向くことが出來ない。さうして地面が波のやうに搖れ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

る。私の膝から下は力があるやうでない。夜る出ると、其邊ちうの灯が一とつ〳〵私の眼を刺すので、額のところが氷の塊を直かに押當てたやうにぴり〳〵痛みだしてくる。

この頃の私は、打たれたり叩たかれたり蹴られたりてし散々ひどい目に逢つた獸のやうに、暗い押入れの隅つこの方を向いて、喘いだり唸いたり、のさばつたりして、のたり〳〵ごたり〳〵してゐる。私はこの日光を五分間見詰めてゐたら、きつと死ぬだらうと思つてゐる。だから恐しくつて、庭の方を振返ることが出來ないのである。

平塚さんが見えた時お約束したものもとても書けそうにないので弱つてゐると、又中野さんから御催促が來た。一枚でもいゝと平塚さんが云ひ置いて行つたからと思つて、一枚だけでも書かうと思ふが、矢つ張り書けない。何しろ瞼の底の方で消えたり燃ゑたりしてゐる小さな炎の爲に頭の中を掻きまわされてゐるのだから、時々自分が誰なのかさへ分らなくなる始末なので、書いたものは出列が廻つてゐないので弱つてしまふ。

二十四日になつてしまつた。思い切つてお斷りをしやうと思いながら唐紙へ寄つかゝつてゐると、表が開いてしやつきりした女の人の聲で訪ふ聲がする。出て見ると原稿を取りに來たと云ふ。

十八九の娘さんで、根の拔けたやうな横仆しになつた銀杏返しがばら〳〵になつてゐる。

素足で、白飛白の帷子を着て、濃い臙色繻子と黄色つぽい模樣の一寸見えたものと腹合せの帶を小さく貝の口のやうにちよいと結んで、洋傘を開いて、新聞紙に包んだものを片手に抱へてゐる。顏が眞つ赤になつて汗をひどくかいてゐる。――私は何か云ひながら格子の棧の間から見えるこの娘さんの顏をぢつと見ると、美い容貌だつた。美人だの、美しいのと云ふよりは美い容貌と云ひ度いやうな顏立をしてゐる。細おもてゞ顏が緊つて、鼻がほそく高くつて、眼がぴんと張りをもつて、險を含んでゐる。江戸藝者の俤を見るやうなすつきりした顏立だつた。

清元の紋の出てるけいしを抱へて、摘みの簪をさして、鬼灯をならしながら淺草の裏町を歩いて行く娘に、どうかすると、かう云ふ樣子の娘があるとも思つた。下町で生れて下町で育つた私は、この娘さんの顏がひどく氣に入つて、嬉しかつた。

『ちよいと立見をして行かうよ。』

斯う云つて手を引つ張り合つて一幕見の上り口をきやつ〳〵と馳け上つて行くお友達同士のやうな感じがして、私はまじくら〳〵とこの娘さんの顏をなつかしがりながら、格子の棧の間から見てゐた。

開いて見たら『小林です』と云つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

汗だけの身體で、初めての人のところへ上がるのは厭だつたと見えて、いくら勸めても上らずに歸つてしまつた。

私は後でいろ／＼な事を考へてゐた。私が淺草小學校にゐる時分の友達は、みんな今の小林さんのやうな風をした娘ばかりだつた。引手茶屋の娘、仲店の娘銀花堂の娘、鶴吉樓の娘、生人形をこしらへる人の娘、かしぶさん屋の娘、質屋の娘――お山ちやん、いつちやん、おさくちやん、おえつちやん、菅井さん――、半襟のかゝらない着物を着てゐた生徒は一人もなかつた。そうして誰でも友禪の前垂をしめてゐた。私は高等三年になつてもお休みの時間にはあねさまを切り拔いて、色硝子の切ればしを飾つて、伯母さんごつこをしてゐたものだつた。そうして學校の歸りにはきつと辨天山へ行つて遊んで來た――運動會には髻と根掛のお揃ひをする事にきまつてゐた。

『御師匠さんが來ましたから』

かう云つて迎ひに來られて、學課の途中から歸つてしまふ生徒は珍らしくなかつた。――友達同士喧嘩をすると、前垂で淚を拭いた昔がなつかしくなつて、私はいつまでもうつとりしてゐた。私は小林さんとあねさまを飾つて遊んで見たくなつた。靑鞜社の社員で、編輯の手傳ひをして、あの美い容貌の顏へ汗をかいて原稿を取りに歩かせたくないものだ。

鬼灯をならして、夕方になると眞つ白に白粉をつけて、襟を拔いて、忘れた合の手を友達のところへ淺いに行く町娘にしておきたいものだ。そうして藝者になつて、男ぎらいで賣り出したと云ふ樣な女にしたいものだ。

と云ふ樣な事を小林さんがお歸りになつてから考へてゐたので、猶何も書けなくなりました。一枚でも……と云ふお言葉に甘へて、

『青鞜の一週年をお祝いします。』

と云ふ眞底から出た一と言だけをお送りする事に致します。

次ぎにはきつと何か質のあるものを書いてお送りいたします。今度はこれで許して下さいまし

田村俊

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

南郷の朝

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

南湖便り

らいてうは拾七日の午後に茅ヶ崎に來ました、そして南湖下町の眞助さ云ふ漁師の家に一間を借りて勉強してゐます。表の畑は南瓜畑で裏の畑は芋畑です、獨歩の死體を搬むださ云ふ家はすぐ傍の松原の内にあるのです。

毎日五時頃から紅吉は遊びに行きます、食事さ診察さ深夜だけ病院にゐて、あさは、みんならいてうの家で邪魔ばかりしてゐる。

紅吉の病氣はだんだんよくなつて行きます。九月か拾月には全治退院が出來そうなんです。注射もごしごし進むで行きますし、目方も増して行くのですもの、けれど神經家の紅吉は時々いらない心配をしだして いけない、一番恐ろしがつてゐるものは檢痰日なんです、その日の來る前の日から青い顏して一日心配してゐます、そしていよいよ檢査が濟むで溫度表にBナシさ記されたら吐息をして生きかへつたような顏つきをするのです。もう紅吉が入院してから一ヶ月さ五六日たつてしまつたのです、入院してから今日迄に飲むだ玉子の數は四百四十四個で、牛乳は一斗八升五合も飲むでゐます。自分乍ら恐ろしがつてゐます。

毎日海岸に寢ころむでゐるものですから眞黑になつて丁度「ぐろみ」の樣になつてゐます。

來る人每になんさもいい樣のない處から申合せた樣に、おじようぶさうですさか羨やましいさか、いらないお世辭で逃げ出すので紅吉は途方にくれてゐます。

らいてうも紅吉のおかげで大變に日に燒けました、東京に歸へつたらきつさみんなが驚くでしよう。今こんな暑つい のに每日一生懸命に一葉全集を讀むでゐます、その内になにか書くつもりなんでしよう。

五六日前狀木さんが見へたのです。それで白雨さらいてうさKさ紅吉さで鳥を料理してお馳走しました、白雨が鳥りばつかり拾つちやつたもんですからお客さまは玉葱ばつかり暑つそうに食べてゐました。

その翌朝でした、生田先生さ一所に辨天さまの境内で寫眞を寫つしたのです。漁師の子供がうぢやうぢや出て來て、いろんなこさをからかふものだから紅吉は本氣になつて怒り出したのです、そんな時パチンさやられたもんだから紅吉は不良少年のようにされたのです。

らいてうは、每日不良少年、不良少年つて呼むでゐます。寫し上つた、らいてうはまるつきりロセツチの描く

女の樣です、白雨は一番叔母さんらしくすましこむだのです。

寫眞を寫すとすぐ馬入川に出かけました。

あつちこつちの岸に舟をつけて釣りをやつたのです。荒木さんは鰻ばつかり釣り出すので、その度に紅吉は蛇だ蛇だと云つて眞青になつてゐました。いつも釣れそうになつたり、魚が集りそうになつたら紅吉は水を動かしたり場所をがたがた換へて仕樣がないことをやり出すのです。「はぜ」が一匹はれたといつちや、ばたばた動くのでみんなが大弱りしてゐました。

この日一日で生田先生もらいてうも、叔母さんも荒木さんも眞赤に燒けてしまいました。

近頃は叔母さんも東京に立つちやつたものですから舟遊びしても淋しいのです、船頭も「オンリヨウ」さまが御不在だから面白くないと、いつてゐる。「オンリヨウ」つてのは茅ヶ崎で一番大女のことを呼ぶ名前なのです。なんだか神樣の名前のように思へます。

らいてうも近い内に一度東京に歸へつてくるそうです茅ヶ崎も又淋しくなるでしよう。

科達が茅ヶ崎を歩むと云ふことが隨分目玉を光らせてゐるんですもの。

留守になつた叔母さんの家の畑の西瓜はだんだん大きく育つて來ました、後二十五日程すればどうやら二人位ひで食べられるでしよう、勝ちやんもそれ迄に來たらいいのにと思つてゐます。

田村さんが茅ヶ崎にいらつしやる樣な、らいてうの話でしたがまだゐらつしやいません。

茅ヶ崎の夏も逝きました、涼しい風の間から南湖院の風車が心持よく廻つてカタンカタンと可愛いい音をたてゐます。

東京はまだまだ暑い事だろうと思ひます。

八・二六――　紅吉

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

編輯室より

■是れ許りの僅かな金で雑誌が出來るものか、經營は難かしいものか、社會から何う云ふ取扱を受けるだらう、二三ヶ月後は何うしたものか。此様な事で心配をしたり、急に喜んで見たり、驚いて見たりしたのは、僅か去年の今頃だつたと思ひます。一ヶ月で廢刊、三ヶ月續くかしら。借金が澤山出來やう。こう云ふ言葉を後に聞き乍らとう／＼創刊一週年紀念號を此處に出す様になりましたのはお互に嬉しい事です。

■白雨が眞紅な華やかな歌を詠んだと云つてはNは喜んで居ります。而して自分の何處を探がしても其眞紅の色は發見出來無い、自分には澁黑い色と鼠色と黑と白がある許りだと云つてすゝけた二王と一晩しやべつて居ました。

■Nは二三日二王さんに三尺の疊を貸す約束をしてから何事も手につかないそうです。朝起きると其前へ行つて坐つてニタ／＼笑つて居ます。外出して居る間が惜しいと云ふので、平常は留守勝なNが珍らしく家に居ます。二三日すると二王さんは二百の金でよそへ買はれて行く約束が出來て了つて居るそうでNは其の前に自分が買つて仕舞い度い、二王さんに別れるのはいやだと云つて居ります。Nは二王さんを取られて行くと病氣するかも知れません。

■思ひ切つたものを書くと云ふので、同人が期待して樂しんで居た長沼さんの表紙繪も、氣が進まぬとか、トウ／＼電報で斷つて來ました。何處からとも無く「今お目出度い事が持ち上がつて居るのだ………」と私の耳に小さい聲で囁いて呉れます。

■編輯をして居る處へ意氣なお上さんがNの宅へやつて來た。お上さんはNに吉原の貸席の倅へ嫁入れと進めて居た。倅年は廿一か二。白雨は面白がつて笑つて曰く「行つていらつしやい」

意氣なお上さんはそこ／＼にして歸つて行きました。

■白雨の顔は花の如くに美はしく薄紅色をして居ます。其の美しさは同人の歌を見れば誰れも直ぐに想像が出來ます。らいてうはじきに眼に涙をためます。紅吉は不安そうな眼つきをしてはしやぎます。Nは二王の前でニタ／＼と笑つて居ます。

■朱の剝げた煤けた木彫の二王の前に坐つて、肉付のいゝムク／＼と緊張し切つた、其筋肉の、手だの、腹だのを、撫でゝ嬉しがつて居る白雨は、Nに買へ買へと頻りに勸めて居た。二王は誰れが刻つたのだかよく分らないが、何でも五百年から八百年位前のださうな、白雨もほしがつて居た。らいてうも紅吉も見たいたらうと白雨が云つて居た。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

■口を結んだ方の二王さんを一つ買つて呉れないか知らむと白雨は實際ほしさうに眞顔で云つて居た。

■二王さんの肝をつぶした顔が可笑しい。可愛らしい、愛嬌がある。恐らく六百年前の老人が青鞜の我々から斯う可愛がられやうとは二王自身も思はなかつたでせう。氣の毒にもなりました。彫つた人にも會つて見度くなりました。と白雨がつけたしました。

■九月から青鞜出版及發賣に關する一切の實務を東雲堂に一任する事になりました。

■社員の會費も、購讀者の送金も、雜誌の申込みも九月以後は凡て東雲堂の方で取扱ます。交換廣告も仝様です。

■青鞜社は雜誌青鞜の編輯に關する事務と、社員の連續及研究會に就ての責任を負ひます。

■原稿は從前の通り毎月十日迄に萬年山青鞜社宛にお送り下さい。

■青鞜及研究會に關する希望要求は青鞜社の方に御申込み下さい。

■青鞜社の雜務を東京堂の方に任したので、之から第二の發展に心を傾注する事が出來ると云つて、私共同人は大變喜んで居ます。

■もつと、もつと、研究會も盛にして、個人の勉強がしたいし、青鞜社の新しい事業も興して行きたいと思つて居ます。

■全く今迄は雜務の爲に忙殺されて居たので、爲たい事も出來なかつたし、粗漏の點も多かつたがこれからは何でも出來さうです。私共は懸命になります、而して自重しつゝ一層の奮勵を期しませう。

■此度は記念號と云ふのでいゝ原稿が澤山集まつて來ました。巴里の與謝野さんからも送つて下さいました。なるたけ皆んな出したかつたので豫告して置いた、杉本さんの習作六、上野葉の男女と人生、同人の中野、物集、らいてうのは紙數の都合で殘念ながら次號に廻すことに致しました。樂しみにして入らして下さい。

■前からも思つて居たし、社員や其他の人の希望によつて、青鞜社の原稿紙が出來ました。同人の意匠になつた美しい半折の原稿紙には大小の二通りがあります。九月から東雲堂で販賣致しますから社員の方や其の他の人々も續々御注文下さい。定價は大小共に十五錢です。

■青鞜社の基礎を鞏固にし、段々と事業も發展させて行きたいのですから、どうか御遠慮なく御寄附下さい。送金は青鞜社宛の事。

■八月迄の會費未納の方へ。

此度青鞜社の事務を東雲堂に移したについては、整理上八月迄の會費、及購讀費、未納の方は此の際至急青鞜社に御拂ひ込み下さい。

■劇と詩の廣告原稿は間に合ひませんでした。

■青鞜は第一卷第一號から揃つて居ります。御入用の方には一部十錢で御讓り致します。但し創刊號に限り定價二十五錢。

■藤井夏と云ふ社員の方は男だ男だと二三人知らせて吳れました。

■かう云つた間違が時々あるし、社員の方々も存じて居たいので、どうか寫眞を青鞜社宛に送つて下さい。

■入會申込の方は寫眞に原稿を添へてお送り下さい。

■印刷所も此度出來た文祥堂の方に移りました。何かゞ新しくて氣持がいゝようです。

N、Y、

寄贈雜誌

スバル
モザイク
北方文學
早稻田文學
シバヰ
藝文
歌舞伎
紅塔
六合雜誌
俳味
十善寶窟
女子文壇
萬年筆
三田文學
下町
心の花
みづゑ
劇と詩
東洋時論
ザンボア
アララギ
ホト、ギス
短歌
學燈
新人
家庭通報

拾月號豫告

小説	藤岡一枝
小説	中野初
圓窓より	らいてう
男女と人生	上野葉
習作六	杉本正生
情死の後	岡本かの子
俳句	白雨
未定	紅吉
脚本	大村かよ
小説	荒木郁

雜誌規定

■毎月一回一日發行

■定價一册金貳拾五錢（郵稅壹錢五厘）

■前金購讀料（四ヶ月分）壹圓（六ヶ月分）壹圓五拾錢（八ヶ月分）貳圓（十ヶ月分）貳圓五拾錢（一ヶ年分）參圓

■社費は一ヶ月金參拾錢にして毎月十五日迄に納附せられたし。取纏め納付せらるゝも便宜とす。

■廣告料（一頁）拾五圓　半頁（八圓）

■振替貯金口座は（東京五六一四）に拂込まれたし。

■郵劵代用は一錢切手に限る（但し一割增のこと。

■編輯事務、寄贈圖書雜誌、及研究會に關する事務は萬年山内青鞜社へ。

■雜誌購讀、社費拂込、廣告申込、交換廣告其他販賣に關する一切の事務は東雲堂へ。

■原稿〆切期日は毎月十日限とす。

本號に限り特價四拾錢

大正元年八月三十日印刷納本
大正元年九月一日發行

禁轉載

東京市本郷區駒込蓬萊町萬年山内
青鞜社内
編輯兼發行人　中野初

東京市京橋區新榮町二丁目廿一番地
印刷人　佐藤保太郎

東京市京橋區新榮町二丁目廿一番地
印刷所　文祥堂

編輯所　東京本郷區駒込蓬萊町萬年山内　青鞜社

阪賣所　東京市京橋區南傳馬町三丁目　東雲堂書店
電話京橋一六三九番
振替東京五六一四番

文學士厨川白村著　（大好評八版）

近代文學十講

菊判六百四頁
定價金一圓二十錢
郵税金十二錢

本書は現代の文明と思潮とを説いて**新文藝**の大勢を明にし其特色を縦横に批判したるもの出版以來嘖々たる好評を博し讀書界に於ける**近來の快著**として又新文藝研究の唯一の入門書として今や既に**定評**あるに至れりさきに誤植を正し詳細なる**索引**を附するや**名聲更に一段の高きを加へ**注文引きも切らず今回**紙質**を改良し印刷を美にして**第八版**成れり文藝に志す士の精讀を待つ。

發行所　東京市銀座一丁目　振替東京二・九番　**大日本圖書株式會社**

新學期開始 募集

入會の最好季家庭の生きたる良友

▲入會金不要

▲入會規定見本進呈

▲女子手藝普及會編

女子手藝講義錄

◎本會講義錄は內外手藝界に於ける粋を居ながらにして修得することを得

◎本會講義錄は監督者なき出京遊學の危險を避くることを得

◎本會講義錄を修了すると一技藝學校卒業以上の價値あり

◎本會講師は東都一流の各學校教師と專門家にして最新式の說明法に依る

◎本會入會者には質問應答雛形下圖買物紹介受驗入學案內等の便宜あり

講義課目

裁縫科 和洋各種　手藝圖畫科 各種　割烹科 和洋支那

袋物科 各種　裁縫小物科 各種　手藝教授法

組糸科 各種　編物科 各種　手藝教授法

徍繡科 各種　刺繡科 各種　其他科外

細工物科 各種　造花科 各種　講義各種

會費

▲普通科 各一ヶ月 一冊金三拾錢

▲高等科 半年壹圓七十錢 一年三圓廿四錢

▲普通科高等科共各一年修了▲

讀んで作つた品が職業となり教授用となり家庭用となり進物となる

毎月一回五日發行

振替貯金東京二三八四 本局 一四一・二四〜四四

入會申込 本會支部全國書店

東京日本橋 大倉書店

發行所 入會申込所

法外ノ教授料ヲ貪ル詐僞的會ト同視スナ

通信教授

催眠術極意

入會希望者ハ先ヅ說明規則書ヲ要求セヨ

大阪東區生玉

帝國神祕會

文藝

クレナヰ

雜誌

會員大募集

雜誌

雜誌「くれなゐ」は毎月一回一日發行會員の作品は全部掲載し印刷鮮明體裁優美也

くれなゐ會清規

一、本會は健實なる文藝の研究を以て生命とせる者の結社也
一、本會は會員の作品を蒐め毎月一回雜誌くれなゐを發行し又時々文集詩歌集等を出版して會員に頒つ
一、本會は時々會員相會し研究會茶話會を開催す
一、會員たらんとするの士は入會の際會費三ヶ月分以上を添へて申込まる可し會費は一ヶ月拾錢とす
一、原稿は種類を擇ばす有らゆる文藝の創作品を歡迎す。一行十八字詰行數は隨意とす
一、原稿締切は毎月十二日と定む

會費

會費は振替貯金により（「大阪一三〇九七」田宮薰）宛に拂込まるべし
入會者には會員證を呈す

雜誌大改革

大阪市東區生玉町

クレナヰ會

"ZAMBOA."

朱欒

毎月一回一日發行
第二年 第九卷

定價一冊二十五錢
送費金二錢

九月號

硝子問屋（繪） 木下杢太郎
正義派（小説） 志賀直哉
草市の夜（小説） 平出修
ある小話（小説） 西村小徑
歌 吉井勇
評論 三木露風
藝術の新傾向（評論） 仲田勝之助
藏王山（歌） 齋藤茂吉
孤獨（詩） ボードレール
海邊消息（詩） 川路柳虹
MANDLIN.（詩） 夏野三良
リルケの詩（詩） 茅野蕭々
敬愛する人々へ（通信） 北原白秋
詩及歌 北原白秋

發行所 東京市京橋區南傳馬町三丁目（電話京橋一六三九番） 東雲堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

地下一尺集 第

木下杢太郎著

和泉屋染物店

宮本憲吉氏裝
鳥居清忠氏畫

四六判函入
挿畫三葉
定價壹圓
小包八錢

戲曲六篇

和泉屋染物店
醫師ドオバンの首
溫室
燈臺直下
印度王と太子
十一人の偏盲

新刊

發行所 東京市京橋區南傳馬町三丁目（振替貯金東京五六一四番） 東雲堂

新刊　發賣

若山牧水著

四六判頗美本
定價金七十錢
送費六錢

歌集
死か藝術か

[illegible]

氏が第三の歌集也、この緑玉の如き歌集の面の曇れるは、死にも等しき氏が生活の投ぐる暗き影なり

發行所　東京市京橋區南傳馬町三丁目（振替東京五六一四番）　東雲堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

吉井勇著

水莊記

山脇信德畫
齋藤與里畫

内容

■水莊記
■苦痛の谷
■山上哀話
戲曲「無智の序」
湘南秘事
七尺牘
海郷異志

九月十五日出版

奇しく凄艶なる七篇の物語を收む。

菊版類美本
本文黒背二度刷
挿畫二葉
定價壹圓
郵税八錢

發行所 東京市京橋區南傳馬町三丁目（振替貯金東京五六一一番） 東雲堂

北原白秋氏著及畫

本文朱黒二度刷……歌二百余首及歌論
挿畫欄畫數十種……装幀薄紫と白の瀟洒
定價金八十五錢……送費金六錢

KIRI-NO-HANA.

桐の花

抒情歌集

凡てこれ快くして悲しき氏が内心の息づかひと清新なる感觸の記録なり。今や新装成る。

發行所　東京市京橋區南傳馬町三丁目（振替東京五六一四番）　東雲堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

歌集

故石川啄木著

悲しき玩具

（新裝發賣）

詩壇の鬼才、石川啄木氏は逝きぬ。逝きて旬日、今歌集刊行の事成る。氏の俤を傳ふる最初のものたり。歌は到底氏に於ては悲しき玩具なりき。しかも鋭烈なる自嘲慨世の念凝つて、一度氏が唇を放るゝや皆玉を成し、こゝに詩壇に異色ある珍品を遺す。卷末に添へたる感想二篇は以て氏の作歌の態度を窺ふべきなり。

四六判二百頁
裝幀瀟洒
定價金五十錢
送費四錢

石川啄木著

第一歌集

一握の砂

藪野椋十氏序
名取春仙氏畫
定價金六十錢
送費金六錢

發行所　東京市京橋區南傳馬町三丁目（振替口座東京五六一四番）　東雲堂

幽玄なる象徴體詩集

白き手の獵人

十月出版

三木露風著

正宗得三郎裝

阪本繁次郎畫

四六版頗美本

定價八拾錢

郵稅金八錢

發行所

東京市京橋區南傳馬町三丁目
振替貯金東京五六一四番

東雲堂

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

東雲堂書店出版書

歌集	桐の花	北原白秋	定價金八十五錢	送費金六錢
歌集	水荘記	吉井勇	定價金壹圓	送費金八錢
歌集	死か藝術か	若山牧水	定價金七十錢	送費金六錢
歌集	黄昏に	土岐哀果	定價金五十錢	送費金六錢
歌集	別離	若山牧水	定價金七十錢	送費金六錢
歌集	收穫	前田夕暮	定價金七十錢	送費金六錢
歌集	一握の砂	石川啄木	定價金六十錢	送費金六錢
歌集	悲しき玩具	石川啄木	定價金五十錢	送費金六錢
詩集	思ひ出	北原白秋	定價金九十錢	送費金六錢
詩集	邪宗門	北原白秋	定價金八十五錢	送費金六錢
詩集	霧	河井酔茗	定價金五十五錢	送費金六錢
詩集	路傍の花	川路柳虹	定價金五十錢	送費金六錢
詩集	夜の葉	森川葵村	定價金六十錢	送費金六錢
戯曲集	午後三時	吉井勇	定價金壹圓	送費金八錢
戯曲集	利泉屋染物店	木下杢太郎	定價金壹圓	送費金八錢
論集	演劇新聲	小山内薫	定價金八十錢	送費金八錢
評傳	哲人カアペンター	石川三四郎	定價金八十錢	送費金八錢

東京市京橋區南傳馬町三丁目十番地

電話京橋一六三九振替東京五六一四

現代の洋畫

九月號

第六號挿畫

■女の顔　藤島武二
□エドルタの岩　モネー
■初秋の光り　太田三郎
□風景　石川欽一郎
■百合　坂本繁次郎
□木蔭の女　伊藤誠一

以上は原色寫眞版刷

其他にモネーの作品數點と奈良、和歌山に於ける與里氏及岡雄氏のスケッチ畫數葉を寫眞版として掲出します、

■記事は未定です、

■發行日は本號に限り十日頃になる豫定です、

■見本入用の方は往復ハカキで申込まれたし規則附の見本を差上ます■

一冊定價 金三十錢

毎月一回 一日發行

發行所
日本洋畫協會
東京市牛込區水道町五十三
振替東京四三七三

第四年
第九號

スバル

特價卅五錢
郵税二錢

九月特別號要目

雁　森鷗外
P君の批評　松本泰
さざめゆき　竹友藻風
椿の記　三島きぬ
題未定　岡田八千代
大詰　五百歌左二郎
ヸタ、タオプ　清見陸郎

死の勝利　石川戲庵
戲曲 王女パミナ　灰野庄平
或る夜のこころ　高村光太郎
湘南秘事　吉井勇
就眠前　地下一尺生

ゆきずり　江馬修
女　江南文三
畜生道　平出修
なげぶし　中谷德太郎
詩　出野青煙
發車前　福士幸次郎
むく鳥通信　無名氏
歌　昴同人
リンゴ（裏繪）　濱田藻光

神田北神保町　昴發行所　電話本局二四六四

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第三卷第九號

白樺 小說號

九月一日發行

・定價參拾錢・送料壹錢五厘・半ヶ年前金一圓七拾錢・壹ヶ年三圓卅錢・

目次

▲或る女のグリンプス（小說）……有島武郎
▲田舍より（三）……南薰造
▲四日三晩の旅（小說）……平澤仲次
▲若いお母さん（小說）……繁惠洲
▲〆切前（小說）……正親町公和
▲クラウディヤスの日記（小說）……志賀直哉
▲蝙蝠の如く（小說）……有島壬生馬
▲短歌……木下利玄
▲セザンヌ紹介……有島壬生馬
▲六號感想……平澤仲次
▲編輯室より……白樺同人

挿畫

▲自畫像……ホール、セザンヌ
▲風景……同
▲マダム、セザンヌ……同
▲シヤツテン……同
▲セザンヌの子供……同

發行所 東京麴町區麴町二ノ二 振替東京二〇一九四番 洛陽堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

九月一日發行
五巻九號

アララギ

本號特價
金參拾錢

□子規居士沒後滿十年記念として本號を發行す□

○記紀短歌抄（記紀の短歌全部を評釋す）……古泉千樫
○歌人實朝雜記……齋藤茂吉
○叫びと話……左千夫
○萬葉雜話……森田義郎
○短歌漫言……柿乃村人
○短歌連作論の由來……茂吉
○金槐集私鈔（本號には五十首を精評す）……齋藤茂吉

○イブセンの半面（精神病理學的見地より見たるイブセン）……齋藤玉男譯
○夢と詩作（夢と詩作に就て心理學的に解明したるもの）……氏家信譯
○善惡の彼岸より（ニーチエ）……林道倫
○古代佛像に就て……香取秀眞
○ふるさと（小說）……大原道雄
○消息のいろ／＼……長塚節等

短歌

左千夫　柿の村人　文明
節　義郎　梨郷
蕨眞　千里　里靜
茂吉　憲吉　千樫

東京市本所區茅場町三の十八
東京根岸短歌會

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

心の花

第十六卷　九月號　第九號

いんきな女　岡部千代子
少きアイヨフ　草野柴二
愛吟論　川田順
古今集の修辭　次田潤
皇室と和歌　和田英松
先帝陛下の御製　芳賀矢一
明治天皇陛下の御製　佐佐木信綱
支那の旅にて　前田利定
空想より現實へ　吉野臥城
噫　澤弌
萬葉集講義　佐佐木信綱

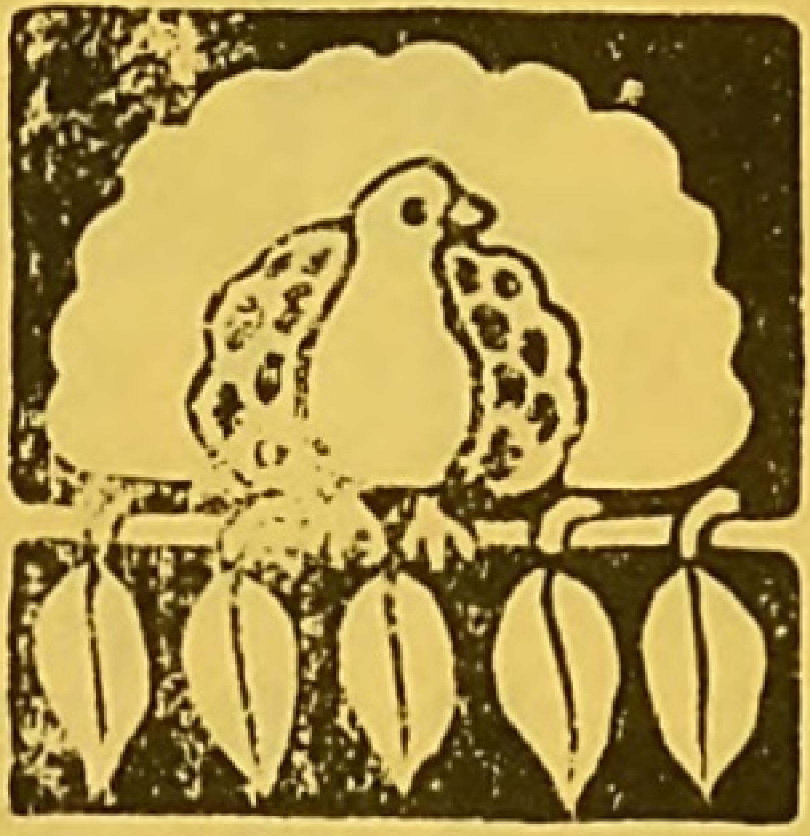
定價一部十三錢●半年七十五錢●一年一圓四十錢●稅共

東京日本橋區本石町一ノ一
竹柏會出版部
振替東京四[illegible]番

大下藤次郎遺作展覽會

本號には上野竹之臺に於て開催せらるべき仝展覽會
無料觀覽券を添付す

□英國の田舎（水彩畫原色版） 丸山晩霞
□伊豆の海邊（同） 中川八郎
□NEAR REDHILLFARM, WAREHAM（寫眞版） CLAUDE HAYES.
□木崎湖（水彩畫原色版） 故大下藤次郎
□薔薇（同） 三條千代子
□寫眞版數葉



みづゑ

第九十一

九月三日發兌

郵税共廿五錢

■春悼の詞 春鳥會同人
■風景畫に於ける人格 小島烏水
■夏の自然 丸山晩霞
■畫の研究と外國語 石川欽一郎
■サー、アルフレッド、イースト氏の水彩畫 山桝大次郎
■日光遭難記 故大下藤次郎
■續三脚物語 鵜澤四丁
■綠陰叢話 水野以文
■鹽川より 赤城泰舒

發行所
東京小石川關口駒井町三番
振替口座六九六三番
春鳥會
大下春子方

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

毎月一回一日發行
一冊貳拾五錢郵稅一錢五厘

斯道唯一の演劇雜誌

歌舞伎

第百四十七號　九月一日發行

六冊前金郵稅共金一圓廿錢
十二冊二圓八十錢

佛國文士の「支那演劇觀」……喜代美
近代劇試演の興り……市川又彥
「焔の流」に就て……和田魚平
背景と建築……黑田鵬心
私の希望……仲木貞一
演劇雜感……上司小劍
全體批評と局部批評……人見東明
劇壇の臆病風……佐藤紅綠
默阿彌著作解題……河竹繁俊

戲曲「戀愛三昧」……鷗外譯
脚本「骸骨の舞」……倉田啓明

土曜劇場見物記……山の手の女
橫濱で見た羽左衞門……奖の女
「神崎彌五郎堪忍袋」の型……鈴木春浦
八月の脚本界……川村花菱
羽左の松王と無學の脚本……山野芋作
「牡丹燈籠」の鳴物……杵屋勝四郎
大小劇場の評判(青々園、春浦)……
故團十郎の面影(三升會の人々、外國女優と合同、排優、毛利、長兵衞、團十郎直筆の扇面)其他、劇談會—劇壇時事、劇界一覽……

本郷湯島切通坂町 畫報社内　歌舞伎發行所　電話下谷二四八三番 振替口座一八一一六番

月刊 藝文 雜誌

大正元年九月號 九月一日發行

定價一部郵税共廿二錢　半年分一圓廿錢　一年分二圓卅錢

「藝文」は京都帝國大學内京都文學會の機關雜誌にして東西兩洋の學術文藝に對し最も謹嚴深刻の批判を下さむとするものなり

論理の理解と數理の理解　文學士 西田幾多郎

支那小說の飜譯　文學博士 藤井乙男

設樂神　石巻良夫

活字印刷術傳來考　文學博士 新村出

送君山狩野博士被命歴遊西土六百字　文學士 鈴木虎雄

岩野泡鳴君の批評に答ふ　理學博士 近重眞澄

狛諸成翁につきて　高木千鷹

能樂の源流を論ず　友枝照雄

三ツの書物　文學博士 桑木嚴翼

聖教日課（附錄）　文學博士 上田敏

最古の個人「日の神の精」と其家族　文學士 坂口昂

發行所　東京小石川原町六　振替東京一三五三　電話番町二六八　鷄聲堂

陰影

前田夕暮氏著
正宗得三郎氏装

■ 新装を凝して出づ！

氏の歌は鋭く深くして最も現實味に富む。氏の歌は新しき木の實の如く、日光を反射する樫の若葉の如し。讀者の心を刺戟し亢奮せしめ、冥想せしめずんば止まず。巻中の歌六百首、氏が第一歌集「收穫」以後の作中より特に精選せられたるものにして、すべてこれ氏が自信深き作ならざるはなし。

■ 定價金七拾五錢　送費六錢

東京神田表神保町　東京堂發賣

東京市外西大久保　白日社發行

詩歌

定價廿錢　九月號　送費壹錢

■ 断片言　岩野泡鳴
■ 詩數篇　ソログーブ
■ 風景　山村暮鳥
■ 月の出　柳澤健
■ 最近の歌壇　前田夕暮

■ 戲言　水野葉舟
■ 夜のばかぼんご　西宮藤朝
■ 別れのはじめ　SCHNITZLER
■ 病める沈默　新城和一
■ 最近の詩壇　服部嘉香

短歌

富田碎花　堀露洋
新妻莞　楠田白若
尾山篤二郎　熊谷武雄
廣田樂　瀧澤謙
細谷明　奥川夢郎
菊地知男　小野深雪
田村飛鳥　中村琢郎
小谷清子　近藤元

■ 山の歌（百餘首）　狹山信乃　前田夕暮

社友募集　白日社詩規入用者は往復ハガキにて申込まれたし

東京神田表神保町　東京堂發賣

毎月一回 一日發行

モザイク

定價一册 貳拾五錢

九月號内容

石版屋の徒弟…（小說）…五十嵐禎夫
ラ・フォスタン…（小說ゴンクウル）…武林無想庵譯
沈默の村…（小說）…西田廻瀾
饗宴の後…（小說）…西田廻瀾
日本趣味と建築…（評論）…龍井枯山
鏡…（詩）…川路柳虹
晩餐の後…（詩）…水島爾保布
柘榴の花かげ…（短歌）…伊東勇太郎
亡の家…（小說）…薄田斬雲
スフインクスの謎…（對話）…灰野庄平
死と眠…（戯曲）…藤井伯民
太陽の笑…（獨白）…山本露葉
編輯の後…（感想）…モザイク同人
表紙繪…大野隆德
裏繪…小林源太郎

東京市下谷區 モザイク社 中根岸町六九

峽灣

第三

九月一日發行

（定價一冊金廿五錢）

■巖端屋（脚本）　黑田玄一

■綺語の墮落（オスカアワイルド）　矢口達

■詩數篇　山本朝太郎

■天地開闢神話　小川水靑

■文章の興趣　山本惡華

■數の概念　ウエーベル

■うらおもて　蔦二

■砂利こしの女　山口八九子

■ある夜カノエエ　同人

東京牛込下戸塚町一五

峽灣發行所

毎月一回
一日發行
第一卷
第一號

奇蹟

定價一部
貳拾五錢
（郵稅共）

九月號

馬車……舟木重雄
夜……廣津和郎
金絲鳥の死……秋野優
日沒……峯岸幸作
哀しき父……葛西歌棄

麻布區材木町六十九舟木方
奇蹟發行所
電話芝二二五八

書籍雑誌取次販賣　廣告

東雲堂地方部

東京市京橋區南傳馬町三丁目
振替貯金東京五六一四番

御取次に應ずべきは市内發行の圖書雑誌に限り候

■書籍は（原書醫書及現行教科書を除く）……一割引

■雑誌は（新聞を謝絶す）……御注文次第即時發送す

（注意）御注文の節は書名、定價、著者、郵税、發行所等（雑誌なれば何月より何月までと）明細に御認めの上割引價に郵送料必ず添附の上、振替貯金又は小爲替にて御注文下され度、切手代用は二割増と相定め候。

■四十五年一月改正圖書目録往復はがきにて御申越次第贈呈仕候。■

昭和44年 3月15日発行　　【第3回配本】

青鞜 第2巻 (第2分冊)

編著者	平塚 らいてう
発行者	藤原正人
発行所	(株)明治文献
印刷	正明印刷
製本	(株)三高製本

【分売はいたしません】　定価 3,800円

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ASN
PER
PL
756
S45
v.2
no.9

University of Colorado at Boulder

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER